

浪漫俱樂部

大正区今昔話

大正区今昔話

浪漫俱楽部

大正区まち案内人協会

# 大正今昔詩「浪漫俱楽部」の発刊に寄せて

大正区長 志村雅彦

大正区まち案内人の皆様の努力の結晶である、「大正区今昔詩・浪漫俱楽部」が発行されましたことを心よりお慶び申し上げます。

平成16年4月、「大正区の歴史を語る会」の発足から始まった大正区の歴史発掘は、冊子「大正区の歴史を語る」の発行へつながりました。

平成18年には「大正区まち講座」が開催され、修了者には「大正区まち案内人認定書」が交付され、研修内容が「大正ガイドブック」にまとめられました。

まち案内人の活動は、平成20年春に自主組織「まち案内協会」の設立とともに、毎月の学習会を通じての研究／発表、大正区内の学校や団体への講演、区外からのお客様への大正区の歴史をはじめとするさまざまな魅力の発信など、ますます広がっています。

そのご活躍に対して、深く感謝申しあげたいと思います。

5年間活動の中で、多くの埋もれていた史実が明らかになってきました。

第一次世界大戦時のドイツ軍俘虜収容所の存在から発展した大正ドイツ友好の輪は、第九合唱団設立、定期演奏会の開催へと花開き、大正区になくてはならない行事になりました。

大正区の原風景というべき江戸時代からの新田開発やそれにつわるさまざまなお話からは、大正区、そして大阪の発展に向けた人々の元気な姿が見てとれますし、明治以降の近代化の波の中で、大正区がその先導役となり、さまざまな産業・工業が、大正区から全国に広がっていったことがわかります。

こうした歴史の発掘は、大正区民にとって誠に有意義なものでのり、特に子どもたちにとって、故郷としての大正区の存在を示すものとして、大きいといえま

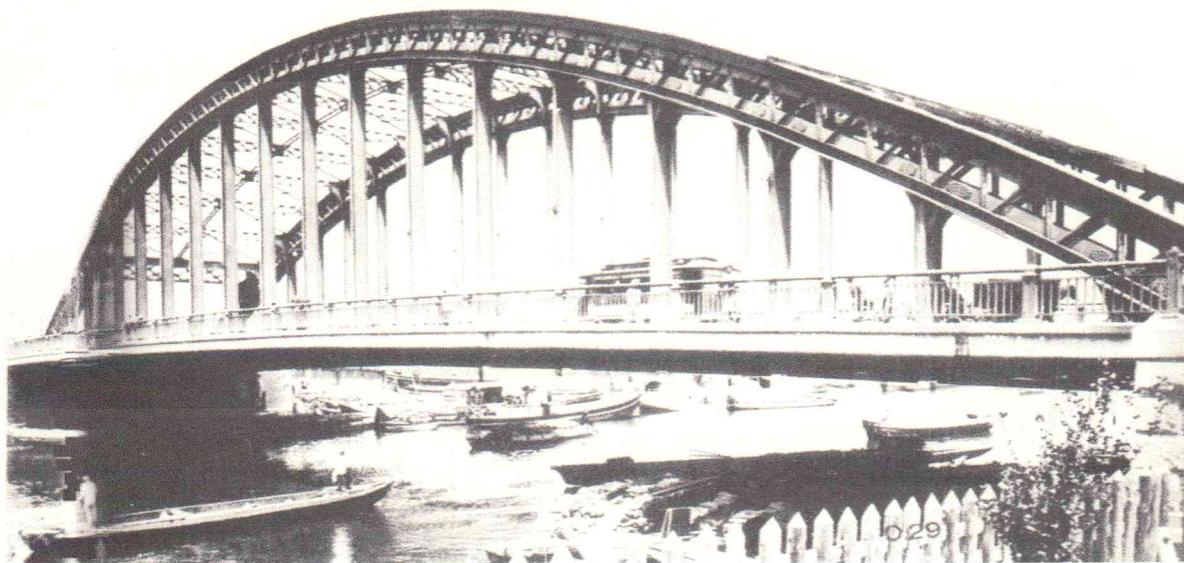
す。

まち案内人の皆様を中心としたこれらの活動の集大成として、「大正区今昔話・浪漫俱楽部」が発行されましたことは大きな喜びです。

どの章をとっても、執書された皆さんのが熱い思いが伝わってくる力作ぞろいです。

区民をはじめとする多くの方々におかれましては、ぜひとも目を通していただき、大正区の歴史について、思いをはせ、ご家族ご友人と話合っていただきたいと思います。

最後に、今回の「大正区今昔話・浪漫俱楽部」の発行を期に、まち案内人の皆さんがありますますパワーアップされ、今後も大正区の埋もれた魅力をたくさん発掘されること、それを通じて、多くの方が大正区の魅力に触れていただけますことを祈念してあいさつの言葉といたします。



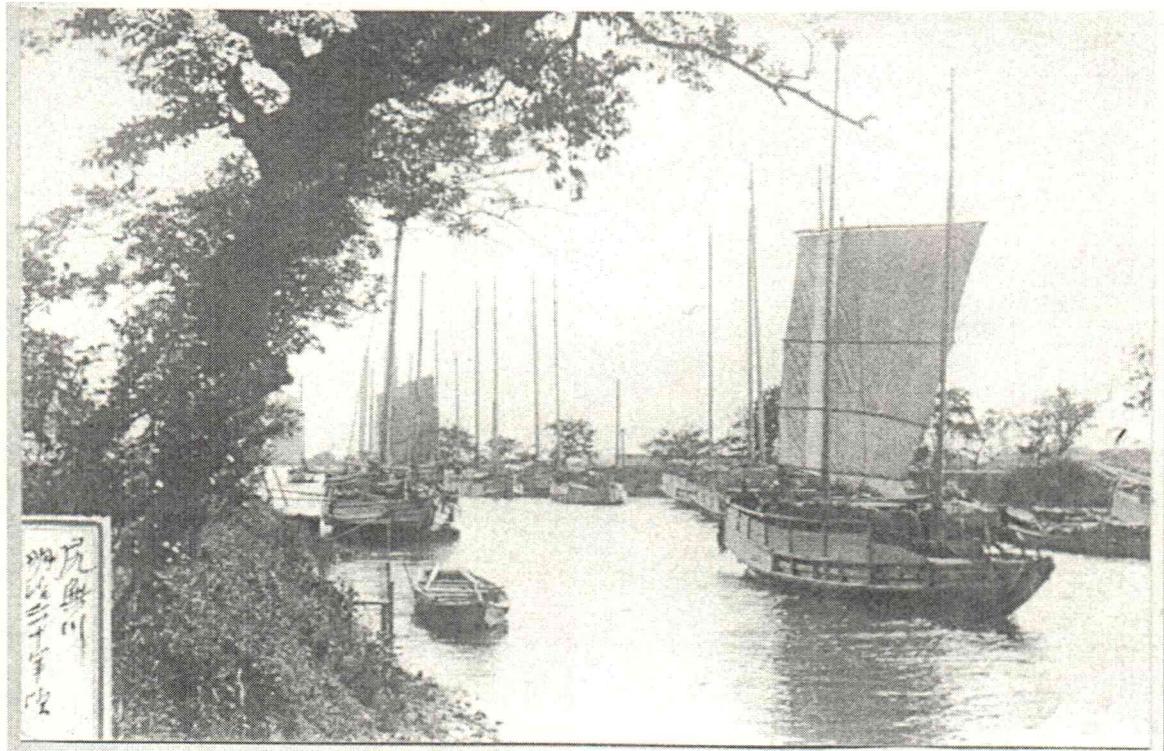
大正橋

## 目 次

発刊の辞	大正区長 志村 雅彦
万葉ウォーク大正区を中心に	西村 東一 1
大正区の生い立ち	岸本 君枝 4
大正今昔物語	松田 邦雄 8
<b>大正区を拓いた四天王</b>	
浪華の英雄木津勘助	松田 邦雄 9
木津勘助心意氣	松田 邦雄 11
河村瑞賢	山口 謙一 13
北村六右衛門	赤羽 三郎 16
岡嶋嘉平次	山口 謙一 19
天下分け目の信長水軍	波多江 寿昭 22
大阪冬の陣	山口 謙一 26
木津川を利用した江戸時代の使節団	西村 東一 29
朝鮮文化使節団	森 伸治 32
木津川口千本風景	山口 謙一 34
幕府の遠見番所	松田 邦雄 36
井原西鶴と尻無川	松田 邦雄 37
三軒家遊里の里	松田 邦雄 38
医学に貢献した今木刑場	松田 邦雄 39
川口津波碑	野間 知君 41
逃亡者 桂小五郎	本郷 良章 43
近代紡績発祥の地 三軒家紡績	松田 邦雄 47
明治の巨頭渋沢栄一と三軒家紡績	森 伸治 50
藤田伝三郎伝	岸本 君枝 52
紡績王 山邊丈夫	宮本 明 54
森鷗外と三軒家	波多江 寿昭 55

大阪ドイツ俘虜収容所の研究	西村 東一	62
ドイツに届いた友好の輪	松田 邦雄	64
ドイツ俘虜アラカルト	松田 邦雄	69
大正区と似島を結ぶ俘虜収容所	杉井 勇	70
ドイツ俘虜収容所の出版	満谷 健作	73
第九初演の地	藤井 寛	75
チター演奏の地	山下 好子	78
日本最初の木津川飛行場	松田 邦雄	79
木津川飛行場のレコードホルダー	本郷 良章	82
日本初の蒸気船藤永田造船所	山下 好子	84
大阪シボレー物語	近藤 正孝	86
幻の自動車王国誕生の夢	松田 邦雄	88
蓮旗で勝ち取った初代大正橋	藤原 潤一郎	90
大正橋こぼれ話	山下 好子	93
音楽橋よろこびの歌	山下 好子	96
橋づくり	宮本 明	98
大正区の八百八橋	高木 善雄・松田 邦雄	99
尻無川風景	松田 邦雄	100
みおつくし物語	石野 重則	101
化粧地蔵	宮本 明	103
大井伊助伝	小林 一子	104
鉄鋼王 中山悦治伝	谷 真孝	107
日本最初の自動車学校	神尾 栄一	112
北恩加島繁盛記	嘉手苅 實	114
材木の街 日本一の小林	松田 邦雄	116
消えた幻の小林銀座	奥野 清美	117
大正区町名の由来	宮本 明	120
三泉夜話	斎藤 晃徳	122

昔話三軒家あれこれ	鴨宮 光男	128
相生座物語	野川 由美子	130
野口雨情と泉尾北小学校	小林 一子	132
細雪語り草	本郷 良章	134
吉川英治と川柳仲間	山口 謙一	137
松下幸之助氏と櫻セメント	山口 謙一	139
鶴町よいとこ	勝浦 典子	141
十六地蔵と大阪大空襲	深谷 巖	143
炎の恐怖大阪大空襲	松田 邦雄	146
大正区ロケマップ	松田 邦雄	148
司馬遼太郎と大正区	藤原 潤一郎	150
高村 薫の世界	本郷 良章	152
直木三十五「大阪を歩くより」	本郷 良章	156
飛行機・梅田と木津川		
大正区で航船が一番長い渡船場	宮本 明	159
落合下渡船場	波多江 寿昭	162
関西大風水害と美談	嘉手苅 實	166
初代大阪競馬場	本郷 良章	168
夕日の昭和山	磯村 成郎	170
私の地球一周の船旅	古川 澄子	171
大正区を詩う	松田 邦雄	175
大正区歴史マップ		182
あとがき	松田 邦雄	183



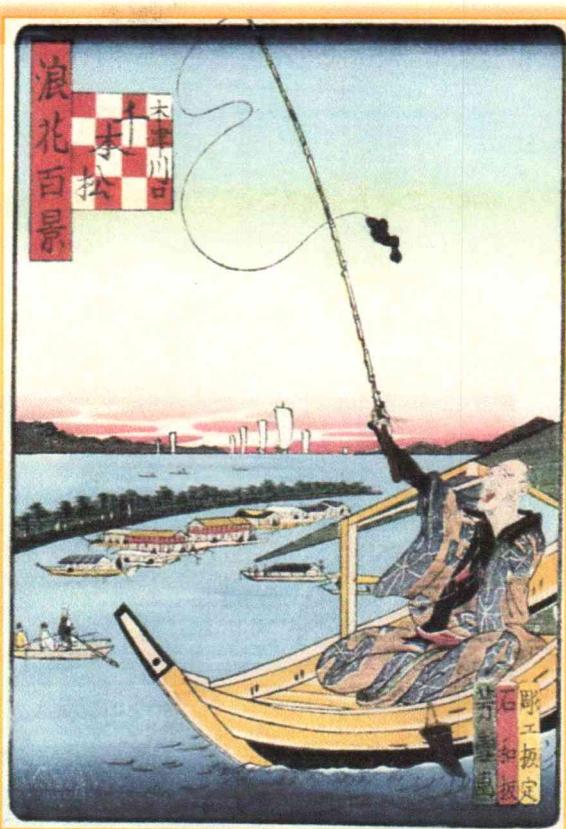
明治 31 年 尻無川 時空館所蔵



木津川千本松 時空館所属



1



2



3



4

## 浪速百景

- 1 しりなし漆つゝみ甚兵衛の小屋
- 2 木津川口千本松
- 3 天保山のみおつくし
- 4 木津川口甚兵衛の小屋

提供 なにわの時空館所蔵

# 大阪万葉ウォーク大正区を中心に

大阪市ゆとりとみどり振興局 スポーツ部長 西村東一

難波（なにわ）は、ある意味で和歌発祥の地である。古事記によれば最初の和歌は須佐之男命（すさのおのみこと）が詠った歌であるとされている。

「八雲立つ 出雲八重垣 妻込みに 八重垣造る  
その八重垣を」がそれである。

しかし、最初の勅撰集である古今集の「仮名序」では「歌の父」として、『王仁（わに）』の作になる「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花」をあげている。

つまりこの歌を古来より人々は歌の手習としたと古今集は記している。

この難波津の歌は仁徳天皇の時代の話とされ、今の上町台地周辺のいずれかの場所であったと推定される。

さて、最古の歌集である「万葉集」で、大正区に関して言えば、「鶴町」「船町」の町名の由来となつた『田辺福麻呂（たなべのさきまろ）』の歌がある。

「潮干れば あしへに騒ぐ あし鶴の 妻呼ぶ声に  
宮もとどろに」卷6-1064

「あり通う 難波の宮は 海近み あまつおとめらが  
乗れる船見ゆ」がある卷6-1063

鶴町の由来になつた1064の歌は鶴町中央公園の「パネル」に、船町の由来になつた1063の歌は木津川渡船場（船町側）の「パネル」に記されている。

また、卷2-28には和銅4年、711年に『河辺宮人（かわべのみやひと）』が詠んだ「妹が名は 千代に  
流れむ 姫島の 小松が末に 苦むすまでに」がある。

この歌は若い高貴な女性が、入水自殺したのを悼んで

みく作られたようで、その場所は、一般には西淀川区の姫島神社付近とされている。しかし、その当時の海岸線や難波宮からの距離から見てみた場合、西淀川ではあまりに遠いと思われる。

事実、僧行基の事跡を記した書物である「行基年譜」では「比売（ひめ）島」が西成郡津守村にあると明記されていることや、平安時代に作られたとされる「浪速往古国」では「姫島」が「江小島（えのこじま、西区）」「くじょう島（西区）」の南に表示されている。また区内、上八坂神社の近く、三軒家東にある浄土真宗大谷派の「専称寺」の山号が「姫島山」であることなどから、古来この歌の場所として一説で主張されている「敷津西説」のほうが実態に合うと考えられる。

つまり、大正区の上八坂神社一帯がこの歌の舞台となるほうが妥当であると考えている。

なおこの歌を本歌取りして、古今集「賀の歌」の中に記されている「我が君は 千代にましませ さざれ石の巖となりて 苔の生すまで」が生まれ、のちそれが和漢朗詠集に採用され、さらに薩摩藩琵琶歌に取り入れられ、明治になって「君が代」になったといわれている。

また区内、北恩加島にある泉尾病院の北側のバス停留所の近くには「難波潟 潮干に立ちて 見渡せば 淡路の島に 鶴渡り見ゆ」卷7-1160

と万葉かなを使って彫りこんだ、立派な自然石の碑もあり、これらをつなげるとちょっとした「万葉ウォーク」になる。ところで古今集には参観『小野室（おののたかむら小町の祖父）』が隠岐へ流されたとき、難波津から出航した際に詠んだ歌として、小倉百人一首にも選ばれている。「わたの原 八十島かけて こぎ出でぬと 人には告げよ 天の釣舟」がある。

壊れた遣唐使船に乗ることを拒否して流罪となつた量が、葦が茂る淀川河口をしずしずと罪人として「ちぬの海」と呼ばれた大阪湾に滑り出して行く様は、きらびやかさと共に哀愁を感じざるを得ない。

当時、「葦」のイメージが定着していた難波には、新吉今集には『西行法師』の「韓の國の 難波の春は 夢なれやあしの枯葉に 風渡るなり」がある。

ちなみに、古代に都が置かれた難波は、万葉集に様々に詠われている。

都の風情については、鶴町の名前の由来のときに記したので省くとして、例えば東国から集まつた「防人」が出発したであろう、現在の中之島あたりで、防人が詠んだ歌として「難波門を 潙ぎ出でて見れば 神さぶる生駒高嶺に雲そたなびく」卷20-4380

「八十国は 難波に集ひ 舟飾り 我がせむ日ろに見も人もがも」卷20-4329

また、堀江（今の大川）を『大伴家持』が詠んだ歌として「堀江漕ぐ 伊豆手の渦の 梶つくめ 音しほたちぬ 水脈連みかも」卷20-4460

さらに、難波から出発した遣唐使節に携わり、「難波」に対して強い愛着の念を持った『山上憶良』の作品として「いざ子ども 早く日本へ 大伴の ト三津の浜松 待ち恋ひぬらむ」卷1-63

「大伴の 御津の松原 かき掃きて われ立ち符たむ 早や帰りませ」卷5-895

など、万葉集では大阪は奈良に次いで多くの歌が詠まれており、大正区も含めて、「万葉ウォーク」を楽しむ好適の地ではなかろうか。

## 大正区の生い立ち

岸本君枝

江戸時代より「みなとまち」として発展してきた大正区。江戸時代の大坂は、南の木津川・北の安治川をして利用した。北前船を中心とする諸国廻船は、木津川筋を往来する一方、菱垣廻船等は安治川筋を利用した。

大坂が難波と呼ばれていた頃は海であり大坂湾が生駒山脈から千里山丘陵のあたりまで入り込んで「難波江」(なにわえ)となった。

この入海に北から淀川・南から大和川が流れ込み、下流部に土砂を堆積させ、これに海からも砂や海藻類が打ち寄せ長年の間に上町台地の西方にも、幾つかの砂州ができるこれらが集まって、「難波八十島」(なにわやそじま)が形成された。

大正区の歴史は400年前の江戸時代初期から始まった新田開発の頃から、と言うのが定かな文献で知られる歴史と言える。

しかしながら古事記ではすでに(430年)仁徳天皇が難波島(なんばじま)あたりを行幸されたと、記されている。このことは木津川下流の砂州に始まり、難波八十島と言われた古代の島の一つ『姫島又は日女島』が大正区の始まりといえるのではないかでしょうか。

160年前の江戸時代末期の大坂湊を再現したジオラマでは、船が多い所が木津川の北前船で春に大坂を出て堺で砂糖を積み北海道で昆布を積み大坂に運んだ。大正区は江戸時代から北前船を迎える「みなとまち」して発展、綿業・農産物を生産する新田が次々と開発され、幕府に奨励され庄屋を中心に村人が共同で開いたが、江戸時代以降は町人が幕府から請け負った「町人請負新田」が多い。

大正区の新田開発は次の通りで、江戸時代初期(第1期)・元禄(第2期)・宝暦・明和・安永期(第3期)・文政・以降の幕末(第4期)の4期に分けられる。第1期の開発は、難波八十島と呼ばれる未開の島や未使用の

海辺から始められ、大正区域内では慶長15年（1610）姫島（今の三軒家地域）と呼ばれていたが、中村勘助がこの島に港などの整備を行い、堤防を築き、新田を開発したので豊臣家より『勘助島』の名が与えられた。尻無川両岸に築かれた堤防には黄櫨漆（きはぜうるし）が植えられ秋には紅葉を愛でる町人で賑わった。「甚兵衛渡し」の茶屋（渡船待合所）ではしじみ・蛤汁（はまぐりじる）が振舞われた。木津川は天保3年（1832）川ざらえの時幕府が河口南岸に石垣堤を築き諸国廻船が入出帆しやすい様に漆を整備したこの堤には、松並木が植えられ「千本松」として知られた。

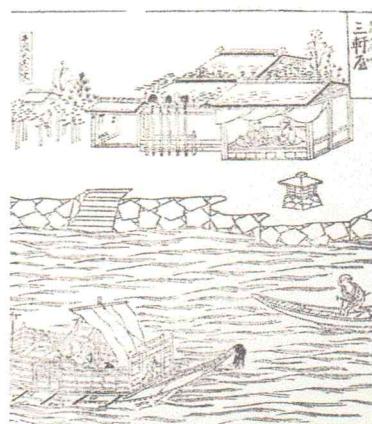
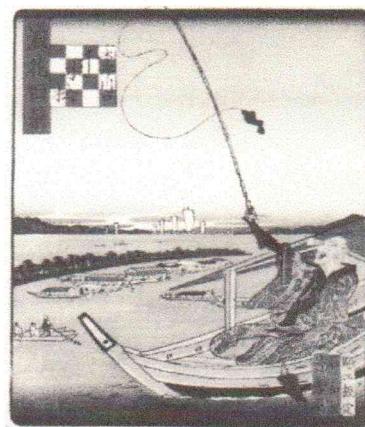
江戸時代の「浪花百景」の錦絵に当時の様子が描かれている。

『千本松堤』の先には、水路を示す、航路標識の杭が並び一番沖の杭には「澪つくし」が付いている。昔、難波江の浅瀬に建てられていた水路の標識で摂津名所図絵（今で言う観光案内）などには、クイの上に×印を付けただけのものが描かれ、天保年間の絵図などには、今の大阪市章のような形のものが描かれている。

大阪の繁栄は昔から、出船入船に負うところが多く、長らく人々に親しまれていたところから、明治27年4月、「みおつくし」が市章に制定された。

### 『三軒家村』について

三軒家村は木津川尻の小島で姫島（日女島）又は丸島と言われた、難波八十島（なにわやそじま）の一つで他に九条島・四貫島・難波島などがあるが、姫島を慶長15年（1610）木津村の中村勘助（通称・木津勘助）が島の北岸（今の大正橋西南付近）で工事中の豊臣家の軍船係船所建設事業に従事、



堤防を築いて風波を防ぎ船着場を整備、堤防内には洪水の恐れをなして田畠を開いた。

功を認められ豊臣家よりこの地を「勘助島」と名付けられた。

三軒家村の始まりである。当時は荒地で住む人もなかった。元和年間（1615～24）に難波村の漁師・助右衛門ら三人が移住して漁業を営み次第に人家が増え港町として栄えた。

寛永7年（1630）木津川を浚渫（しゅんせつ）して船の出入りを盛んにして他国の入津船にたいして入津料・白米五合づつ取得する権利を与えられ、五合船の始まりである。又この地が三軒家と呼ばれるようになったのは開発当時、三軒の民家が建てられたからと言われる（西成郡史より）。

三軒家は木津川の入り口をおさえる要地であったため、織田信長と石山本願寺（信長と毛利水軍の激戦地・毛利水軍・織田軍の兵船を破り兵糧を本願寺に運ぶ。8年後・織田方・九鬼水軍の安宅丸・鉄板張りの大型軍船・6艘・一艘につき大砲3門・兵員300人で毛利水軍600艘を撃破）の戦いや大坂冬の陣では、大坂防衛軍の守備地に利用された。

寛永3年（1675）になると人家が軒を並べて繁栄し旅泊の船の出入りが激しく賑わいを増した「西の海は見渡す限り青くはるかに帰帆船が望まれる景勝の地であった」（難波名所芦分船より）三軒家川の川口付近は、元禄のころ秋になると鯨（はぜ）釣りの名所として賑わい人々が船を浮かべて遊覧したことが、井原西鶴により紹介されている。

江戸時代の名所案内図芦分船によると三軒家は江戸時代を通じて北前船など発着する大湊として発展している。

### 『姫島伝記』について

古事記に、アカルヒメは新羅から優秀な文化を難波（なにわ）に伝え



た女神です。

垂仁天皇3年（68?）頃、新羅の皇子天日矛（あめのひほこ）が赤い玉を農夫から譲り受けた。阿具沼で昼寝をしていた女人に太陽が入り生まれたという。翌朝、阿加留比壳（アカルヒメ）と名乗る美しい娘になり日矛（ひほこ）は比壳（ひめ）を妻にする。何年かたつと夫が驕慢で嫉妬深いので嫌になり船で逃げて難波にやってきた、追ってきた日矛は渡神（わたりのかみ）に防がれあえずには但馬に住み土地の女と幸せに暮した。

日矛夫婦の玄孫が神功皇后である。アカルヒメは難波八十島のひとつ姫島で暮らし、機織り・裁縫・焼物・楽器の演奏等を教え、予言・病気の治療など人々の難儀を救い、女神様と尊敬された。アカルヒメの伝統から稗島の女は機織上手の働き者、嫁さんもらうなら稗島の女子とはやされ、毎日糸を紡ぎ木綿を織り、三幅前掛けと呼ぶ前掛けだけでした。

明治の初め「ひめじまのあかんさん（稗島の阿閑）」という医者がいました。治療が下手でよく失敗をした。物事がだめになることを（あかん）と言うようになったとの伝説があります。



勘助島・三軒屋・姫島・難波島

## 大正今昔物語

松田邦雄

幻の姫島、蘆島、勘助島、難波島、寺島、百濟橋、今い  
ずこ。木津村の漁師、助右衛門他2名が住み着いたとさ  
れる三軒家浦難波八十島の一つ、木津川大湊と歴史館に  
は三韓交流の中心地、浪華繁盛記の大湊と記す、天下の  
財は浪華にあり、浪華の財は船にあり、天下の台所をに  
なう船運は、川と船にと記されていた。木津川24浜に  
も寺嶋浜、勘助島上浜、勘助中浜、勘助下の浜、落合浜  
とあり、いずれの浜にも、檜垣廻船、荷受船が二十隻か  
ら三十隻常時係船されていた、又出舟千隻、入船千隻と  
いわれる木津川には一日千三百五十隻の船が通航した  
と云う水路(みお)つくし、いまは大阪市の市章も過去に  
は木津川堤ににあった。寺嶋は難波島船作りの湊として  
浪華百景に紹介され、大阪冬の陣の起こりは寺嶋、木津  
村、三軒家浦から始まったと記されている。朝鮮通信使  
の上陸点も11回の内、後半は難波島に着船し、船はお  
船蔵に置かれ、宝物を抱えて、城中や江戸等へと出発し  
た。人員は三百名から多い時には三千名を超える時期も  
あった。幕府も賓客扱いの礼をつくした。歓迎船数百隻  
を要し鳴り物入りで迎えたとある、木津とは木材を積み  
降ろす湊と言う意味もあり、姫島縁起には新羅の国の王  
子、天の日矛がアカル姫と不仲になり、姫が国東半島の  
姫島に逃れ、そこから浪華の姫島に住み付いたといわれ、  
探し廻りしが、遂には会えず、滋賀の地から但馬にて生  
涯を終えた、悲劇の逸話である。姫島の女は帶の代わり  
に前掛けをして糸を紡いでよく働いた、天の日矛を祭神  
とし、祇園神社、八坂神社、姫島神社等がある、大正区  
にも木津勘助が勧請されたという、上八坂神社がある、  
三軒家遊里の文化財屏風十曲が、なにわの歴史館に保存  
されている。元禄10年に娼婦禁止令が出て公娼である

新町遊里に合併されたが、元禄の風俗、百二十あ  
った諸藩蔵屋敷の役人、マーク入りの藩船ら町人の遊楽、  
料理に至るまで細かく描写され資料とても一級品であ  
る。

# 「大正区を拓いた四天王」

浪花の英雄 木津勘助

松田邦雄

中村勘助源義久彰徳碑が八坂神社の社殿のかたわらにあり、背面の刻文は、空襲で傷つけられたため全文の判読は困難だが、三軒家東小学校百周年記念誌に掲載されている碑文全文は次のとおりである。

中村勘助、姓は源、諱は義久、新田義貞の末流にして資性剛直沈勇なり。

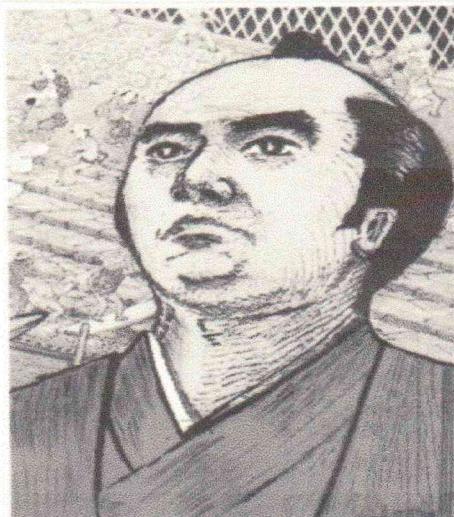
其の木津村に住む故を以て、時人之を木津勘助と呼ぶ。豊臣家摂海の要害を完備するため、姫島即ち今の三軒家北岸に軍船碇繫所を建設するにより、勘助船舶安全の施設を以て大阪開発の要務なりとし、慶長15年沿岸一帯に堤防周築の計を立て自ら奮って其工を起す。爾来刻苦励精萬難を排し、遂に之を完成し、此に於いて田畠を開き、外風波を防ぎ、船舶の碇泊始めて安置をえる。

豊臣家其の功績を賞し、此地を勘助嶋と称せしむ。勘助又大阪市内舟運の便を増進せんと欲し、寛永7年木津川を浚渫す。

其の後幕府田制を改正するが故を以て農民の困苦勘からず、寛永10年飢饉あり、餓鬼道に満つ。而も幕府の処置其の宜しきをえず。

勘助憤慨惜く能はず、挺身之が、救済を固りし可熱誠の激發するところ其の所為却って制規を逸し、為めに罪を獲て斬に処せらる。

時に萬治3年11月22日年73歳。想うに勘助は独り三軒屋村の開祖たるのみならず、亦大阪に於ける水利の恩人なり。



乃ち此に碑を立て其の功を勤し、以て後見に侍ふ。

中村勘助（1586—1660）については経歴に諸説があり、区内八坂神社に碑が建てられているが、碑文の内容についても疑問点が指摘されている。

勘助は相州（神奈川県）足柄の生まれで、新田義貞八代目の子孫とされているが、新田義貞とのつながりは疑問視されている。

先代に連れられて流浪し、慶長15年（1610）木津に移住、豊臣家の姫島北岸軍船係船所建設工事に従事、姫島を開発した勘助の木津川浚渫によって船運はよくなり、幕府は入港の船から米五合を入津料として取得することを決めた。

これが大阪における五合船の始めである。

寛永18年（1641）の飢饉の際、農民を引き連れ下難波領の幕府の米蔵を襲ったというのは、当時下難波領には、まだ幕府の米蔵はできていなかったので、事実と異なる。

勘助らが襲ったのは中之島の福岡藩蔵屋敷で、海路運ばれてきた御用米を蔵屋敷に納める際に奪い、難民に分け与えた。

勘助は奉行所に自首、二ヶ月の入牢のあと勘助島へ流罪となり、さらに斬罪されたとなっているが、これも疑問視されている。

勘助は、勘助島預けとなったあと、正保4年（1648）に上八坂神社を勧請し、木津に浪花稻荷大明神のほこらを建てており、これからみると島預けは形式的なもので、市中出入りは自由であった。

また斬罪というのも疑問で、万治3年（1660）

11月26日、老衰死が事実のようである。

## 木津勘助心意氣

松田邦雄

四天王寺と大大阪時代への参入、その人達の名前は、日本中をアッと云わせた河村瑞賢、伊勢のやんちゃ坊主の幼少から江戸へ出て小間物問屋、江戸の大火の時には、いち早く借金をして、信州の材木を買えるだけ買いため巨財を築いた。

幕府にも目をつけられ、東北と江戸の航路を開くため、秋田に港を作り移出入を便利にした。

次は家定将軍と共に近畿琵琶湖から淀川の水の要路を調査して安治川を作り、木津川、尻無川を改修し功績をあげた。

次に金山採掘に着手、伊豆、佐渡で堀当て鉱山王に、全国の諸大名からは、千両箱を積まれて、懇願されたとされる、快にして豪、男冥利の人生を送った。

浪華の義侠男ナンバーワン木津の勘助、二番は大塩平八郎である、その名も高く生涯は華麗であった。

芝居は元禄10年まで道頓堀にて、三軒家夜話、義侠、木津の勘助と題されロングランの興行であった。

また、映画は木津勘介伝7巻が制作された。

藤原秀憲の小説、浪曲は日吉川秀水の木津勘助の生涯、落語名人、桂米朝百選「骨つり」演歌は三門浩の中村勘助伝と多彩なる人生を謳われている。生涯かけて庶民と共に闘い抜き死罪となるが功績多く難波村預かりとなつたと云う説もある。

時に70有歳、嫁は淀屋橋を造った豪商淀屋十兵衛の一人娘お駒さん、長者は難波村の鉄眼寺盆供養に来て墓に忘れ物をした。

実印と16枚の証文、三百両の大金！それを勘助が拾って届け出た所から縁の始まり、娘にぞっこん惚れられ恋病になる程に、父と娘に見込まれ難波の破れ長屋に風呂敷一つで嫁入りした。

淀屋はいざという時の為、持参金三千両を豪商天王寺屋五兵衛に預けた、勘助は役人になり頭角を表し、木津川、尻無川の大改修を行い難波島、月正島を分離し流れをよくした、その功績により開拓した難波島を勘助島と命名して又、木津川通行の船より五合の米を徴収する権利も許可された、幕府の軍船係船所を作り浪花丸、鳳凰丸、金剛丸等が係留していた、寛永の飢饉には浪花の民の餓死者が続出、救助を乞う陳状を提出したが聞き入れられず遂に意を決し、民衆と共に公の米蔵を襲撃し浪花の民数万人を救い、自ら自首し罪に服した。

真に見上げた義侠男木津勘助である、浪速区の大國神社には勘助の銅像が、大正区、上八坂神社には顕彰碑が建立され後世にその名を留めている。



八坂神社境内に  
中村勘助顕彰碑建立



浪速区の木津市場の前

河 村 瑞 賢

山 口 謙 一

江戸の街づくり。淀川の大普請など江戸時代の初期の繁栄を下支えした巨人である。卓越した発想・先見性で、東廻り航路の確定など日本のインフラを築いた。

元和3年(1617年)生まれで元禄12年6月に83歳で人生を閉じた。

現在の三重県南伊勢町に生まれ、13歳のとき、江戸へ出た。そして幕府の土木工事の人足頭なる。

彼は、人生において何度かのチャンスが訪れた。

その一つ一つのチャンスを最大限に生かした人物であると思う。

第一のチャンスは、品川にさしかかった時、折しも灯籠ながしの最中に、きゅうりや茄子が精霊舟とともに川の岸辺に打ち寄せるのを見て、ひらめいた。「もったいない」、これを漬物にしようと河原にいた漂泊民に、あり金を投げ出して渡し、野菜を集めさせた。30樽ほどの漬物を江戸へ運び外堀作業をしている日雇い人足たちに安く売り引っ張りだこになった。それが因で人足頭に取り立てられた

第二のチャンスは、材木商を営むようになった、40歳の時、明暦3年(1657年)江戸の町に大火災が起こった。その際に木曾福島の材木を買占め、土木・建築を請負、利益を得た。

此の時、江戸の同業者に公平に利益を得るよう流通機構の改革も考え実行したという。

第三のチャンスは、海運業として西廻り航路・東廻り航路を開いた54歳の時、寛文11年(1671年)東北地方から奥州米などを江戸へ伊豆半島の下田から西南風を待って直接運ぶ(東廻り航路)を開いた。

また、翌年東北酒田から日本海沿岸を廻り瀬戸内海・大坂。木津川や尻無川で停泊し、紀州。遠州灘を経て江戸へ入る(西廻り航路)を開拓した。

輸送時間の費用、大幅な短縮と日本の海運事業に、大きな変化と発展を示した。

第四のチャンスは 66 歳のとき、天保 3 年（1683 年）幕府は畿内の治水対策を検分するため大坂へ行く（大坂

検分）稻葉石見守正休と瑞賢を中心として、京都・摂津・河内を中心に山城・大和に及ぶ巡見を行った。

巡見の結果、瑞賢は、大和川の付け替えを否定し「九条島から海へ川を削り抜けば、大坂の町の水はつかえなくなる」と判断し、淀川河口の開削と山地の植林による砂

防を提案した。翌年・貞享元年（1684 年）から貞享 4 年（1687 年）にかけて一連の工事を実施した。

大坂川（淀川）河口の九条島を開削し、新川（後に、元禄 8 年に安治川と命名）が完成。

中津川・大坂川・堂島川・福島・百石島の河岸改修、曾根崎川河岸の改修や淀川中流・大和川・山城国木津川・宇治川の改修などがその内容であった。

治水工事は広域にわたったが、大坂に重点が置かれ、中央市場としての大坂の経済的諸機能の維持・拡大が意図されていた。

このため、大和川筋では柏原村・船橋村の堤外島の削除、森河内村前の笹刺、東成郡鳴野村（大阪市城東区）前の外島の開削、久宝寺川と菱江川との合流点から下流の河道拡大などが実施された。

大和川の付け替えをめぐる促進・反対の訴願合戦に一応の結論を与えた河村瑞賢は、元禄 11 年（1698 年）3 月幕府に召されて御家人となり、平太夫義通と改名した。

その直後、幕府は彼に再度治水工事を命じた。

同年 5 月に開始された工事は、山城国木津川・宇治川から淀川本流・神崎川・中津川・大和川、さらには淀川下流の木津川までの広域に及ぶ、翌 12 年 2 月に竣工した。その中心は大坂市内における堀江川の開削、堀江・道頓堀川南岸・古川・富島の新地開発、木津川河口の難波島

(現在の大正区と浪速区)は水路の障害になっていたため島の中央を南北に切り開き、木津川の水を一直線に海に導き、島の東を月正島(今の浪速区)西を難波島と呼んだ。

大坂に重点を置くという性格は、貞享年間の治水工事の時と変わることろがなかった。

工事を終えて江戸に帰った瑞賢は、同年6月83歳で他界した。

河村瑞賢の一連の治水工事により、かつて付け替え反対の運動を展開した村々は、「川違えはなかなか沙汰がない」として安堵した。

大和川沿いの村々では、その後も洪水の脅威から解放されることではなく、付け替えの訴願活動が断念されることもなかった。

大和川の付け替えの事業は、次の時代に引き継がれるのである。

ともかく彼の事業は、国家的また歴史的に多大な功績であったと思う。



木津川の帆船

## 北村六右衛門

赤羽三郎

正保元年（1644）北村六右衛門は、和泉国大鳥郡踞尾村に生まれ、幼名を宗俊（むねとし）といったが、後に第四代目六右衛門と名乗った。

「泉州瀬尾村北村氏新田開巻由緒之記」という古文書に第四代目六右衛門について詳細に記されている。「泉尾史」に引用されている文章によると『即ち彼は性篤貴で慈悲、困窮せる人を見れば直ちにそれを救済し、寺社には多額の金品を寄進し、父母を敬し祖先を尊び、努めて賢士高僧を置装い、道を修め学を問うた』ということである。

逸話として泉州附近を旅する人が道に迷うのを見て道標を建てたことも多くあったということです。

また、北村家では有り余る上米の処置に窮し、酒造を嘗んでいたらしいが、ある日、三輪山遍照院の正亮和尚を訪れ酒の害を教えられ、その酒を醸す者の罪を説かれて、突然酒造業を廃業したという記録があり、彼の性格を物語っています。強い意志を持ち、慈悲深く、豪放で、緻密であり、資産家であったため、新田開発の大事業を遂行することができ、天災への復興を果たした宝永5年（1708）3月9日に逝去している。

四代目六右衛門の法名は、賢山了貞居士といい、また、妻である伊和の法名は謙空照貞禪尼といい、後に2人の法名から一文字を使い、新田開発のために犠牲となつた人夫や魚介類の菩薩を弔うため「了照寺」と名づけたお寺が建立されている。大阪の泉尾新田の開発主であった北村家は和泉国踞尾で脇差を持つ本百姓であり酒造家でもあった。

四代目六右衛門以前にも新田開発を行なっていたこともあり、四代目六右衛門の時代には泉尾新田の開発に必要な莫大な費用を出しうるほどの大家になっていた。

元禄11年（1698）に幕府が沿海の新田開発を奨励し、その開発希望者を募り、四代六右衛門は直ちに

8月15日付で応募したが、九条島、下難波島二カ所の開発は他人に許可が下った。9月21日付で三軒家島開発の願書を奉って熱願し、ようやく開発許可が下った。

これが泉尾開発の第一歩といえる。新田開発は元禄15年(1702)をもってひとまずその工事が完了した。しかし、5年後の宝永4年(1707)10月4日、突如起こった未曾有の大地震(宝永の大地震)に続いて葬った大津波のために開発した新田が瞬く間に破壊流出してしまった。開発後5年となり土壤も肥えてきたところで根こそぎ流失させてしまった新田の小作人たちには失望し落胆したことであろう。

そのとき84歳の四代目六右衛門には、このとき不思議にも全身に湧き溢れ、自然の力に流失した新田を再興させるべく乗り出した。この姿を見て感激した小作人たちは、共に不境不屈に日夜復興に努力し、翌春にはものの見事にこの難工事を完遂させた。

また、北村家は延宝元年(1673)には一町二反半の稻作と七反小の綿作を経営していた。当時、同家の所持地は三町七反三畝であるから、上記の手作経営以外は小作地としていたわけである。

その手作経営だけとりあげてみると綿作が作付面積の約37%を占めていることはそれが明らかに商品生産としてのものであることがわかる。(「明治維新と地主制」:歴史学研究会編、岩波書店版48頁より)四代目北村六右衛門に開発された泉尾地域は、明治以降も土地の所有者は元禄開発当時の誓約どおり北村家で全部所有し、土地の売買などは行なわれず、産業は農業のみの農村であったため江戸時代となんら変わりが無かった。

十三代目六右衛門氏は明治30年(1897)合名会社北村銀行を創設したが、財界の変動に遭遇し明治33(1900)年に支払停止の悲境に陥り一年後に破産宣告を受けた。

負債約85萬円に対し銀行の代表者であった十三代六右衛門は別途債権を92萬円有していたため、和解契約が成立し北村家所有の泉尾新田一二五町歩をもって、預

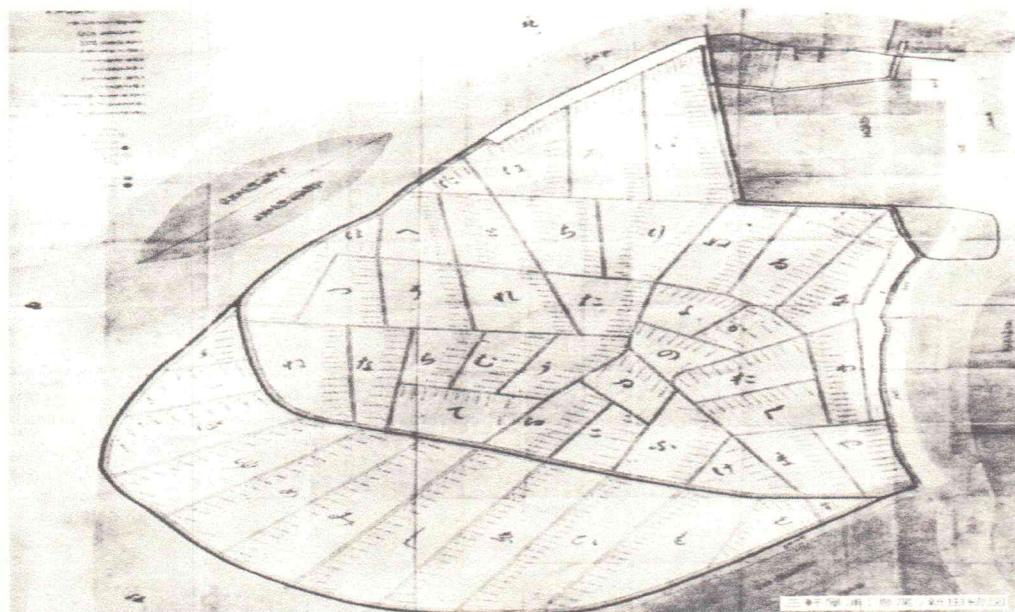
金者その他を包含する債権者に対する負債償却を目的として明治37年（1904）1月1日泉尾土地株式会社が設立された。土地を直ちに現金化することが困難であったため、一括して買収する会社として泉尾土地株式会社を設立し、この株式を債権者が取得することにした。

土地所有会社である泉尾土地は、小作料や土地売却で収益をあげ配当した。

こうして、北村銀行は言い換えれば、土地保有会社に生まれ変わり、精算する形となつた。

個人として所有していた泉尾新田の土地を失った北村家は同時に、踞尾村の邸宅などの財産も失つたが泉尾町有志が開発者の功績を追憶し懇請し明治90年泉尾町に北村家が居宅を構えた。

私自身、同志社大で経済史のゼミナールを受けていましたので、しかも自給自足経済から商品生産経済への変化が、この北村家も一つの例であることを見つけ、地名から「北村」が消滅する瀬戸際にあることに気づき、なんとか「北村」を町名に残したい一心で行政にお願いした次第です。昭和51年（1967）2月2日実施の新住居表示による町名に「北村」として残されている。



泉尾新田

わが大正区の土地は、江戸時代以前から続いてきた三軒家、難波島と江戸時代以後に、木津川、尻無川の河口に開発された新田で大半を形成している。

古代の大坂は生駒山脈から千里山丘陵のあたりまで入り込んで「難波江」となっていた。この入り海に、北から淀川、南は大和川が流れ込み、しだいに土砂が堆積し上町台地の西方にいくつかの砂州ができた。これらが集まって「難波八十島」と呼ばれた。

その中に姫島、九条島、四貫島、難波島があった。

このうち、慶長15年（1610年）中村勘助によつて一番最初に開墾されたのが三軒家村となる姫島であった。

江戸中期になると町人勢力が台頭し「町人請負新田」が多くなる。

当初は、庄屋を中心に村民が共同で開発した。その主だったものは、泉尾新田（北村六右衛門が開拓）、炭屋新田、千島新田、今木新田、平尾新田、中口新田、上田新田、南恩加島新田、北恩加島新田、小林新田、岡田新田、千歳新田などである。

新田開発は沖合いになるほど困難を増した。しかし財産と行動力を備えた代々の岡嶋嘉平次が幕末にかけ積極的に開拓を進めた。

南・北恩加島、小林、岡田、千歳新田が作られ、こうして大正地域の形成に大きな役割を示した。

初代の岡嶋嘉平次は、東成郡千林村（現旭区）で、宝永6年（1709年）に生れた。

この初代嘉平次が、木津川、尻無川間の浅州の干拓に

着目、大阪町奉行、京都所司代に願い出たが、共に許可されなかつた。

宝暦 7 年（1757 年）江戸へ出向いて幕府に直訴し許可された。

嘉平次は、直ちに、木津川から尻無川までの開拓地百二十三町歩余の地代銀四千三百五両を納めて、千島新田から開拓に着手した。

初代嘉平次は天明 2 年（1782 年）千島新田に移住し、同 6 年（1786 年）11 月に死去、のち子孫がその遺志を継ぎ、新田開発の大事業を成し遂げた。次に岡嶋嘉平次が、またその子孫が、開拓してきた各新田の内容を要約して示しておきます。

#### [千島新田]

泉尾新田の南東に接し、炭屋新田と同様に尼崎屋又右衛門の請け地であったが、宝暦 7 年（1757 年）岡島嘉平次が譲り受け開墾、宝暦末若干の新田を開き、自分の居住村名千林村の千と姓の岡島の島をつなぎ合わせて千島新田と命名した。

明和 5 年（1768 年）に第一回の検地を受け、安永 9 年（1780 年）まで続けられた。

#### [恩加島新田]

文政 12 年開発に先立ち、宝暦年間（1751～64 年）に初代岡嶋嘉平次の請け地（南・北恩加島新田）となり、これを引き継いだ 2、3 代目嘉平次が文化 12 年（1815 年）から開発を始め、最初の検地は、文政 12 年（1829 年）に行われた。

このあと明治 4 年まで数回にわたって増懲された。はじめは、「恩加島新田」と言われていたが、後に二分され南恩加島、北恩加島となった。

### [南恩加島新田]

この地はもと木津川下流右岸の寄州で、千島、平尾両新田の南にあったが、文政12年（1829年）二代、三代の岡嶋嘉平次によって開墾された。

この功績をたたえ、時の代官より恩加島新田と称させた。

岡嶋を恩加島と言い換えたのは、恩加島には、後生に恩を加えるという意味が込められている。

小林新田・岡田新田両新田とも、尻無川西南の寄州であったが、天保元年（1830）6月から四代目岡嶋嘉平次が開墾にかかり同3年に完成、翌4年検地を受けた。天保10年（1839年）京都の三文字屋庄三郎の所有となる。

安政元年（1854年）の大津波で田畠は荒廃したが、のち復旧される。

### [千歳新田]

小林、岡田新田の西にある尻無川沿いの寄州であった。文政12年（1829年）大阪の葭屋庄七の請け地となつたが、天保年間これを、西成郡長柄村の木下延太郎が譲り受け、四代目嘉平次と共同で開墾、弘化2年（1845年）検地を受けた。

明治4年（1871年）5月の暴風、高潮に襲われ新田は荒廃したが、10年かかって嘉平次が復旧した。

岡嶋嘉平次が、初代・二代・三代・四代にわたって人生をかけての自然災害との大闘争また、新田開発への大情熱を、今の我々は、少しでも学んで後世に伝えるべきではないでしょうか。

## 天下分け目の信長水軍

波多江寿昭

今から400年以上も昔、戦国の世のことです。現在では大正区の東側を大阪湾へそそぐ木津川の河口で大きな戦いがありました。

「天下統一」をめざす織田信長と「百姓の天下」をめざす石山本願寺の11年間にわたる戦い（石山合戦）のうちの一つの海戦です。

信長が今、大阪城のあるところ、当時の石山本願寺の寺地を望んだことから石山合戦は始まりました。

大正区民は、いまこの海戦の跡の上に住んでいるのかもしれません。百人一首の時代なら、このあたりは「わたしのはら八十島かけて漕ぎい出ぬと人には告げよ海人の釣舟」と詠まれるような海原に無数の島が点在するところでした。

現在の大正区はもちろん、大阪のほとんどはこのような土地を埋め立ててできた土地だったのです。

さて、海戦は天正4年（1576）と天正6年（1578）の2回行われました。

第一回戦は、天正4年（1576）7月13日から14日早朝にかけて。本願寺を支援していた安芸の毛利氏は、村上水軍を派遣し、本願寺を封鎖していた信長軍と木津川河口で激突、激しい戦闘となりました。

毛利方の村上水軍は、瀬戸内を制圧していた海賊衆で、この海戦では、「熾焰火矢」などという一種の爆弾で織田方の船を焼き討ち、無事、本願寺に兵糧を運び込み、意気揚々と帰還しました。

「熾焰火矢」というのは、煙硝・硫黄・炭などを混合して作った火薬を丸めた一種の爆弾です。村上海賊衆は、この爆弾を駆使して攻撃するの得意の戦法としておりました。

第一次木津川河口の海戦、これは織田水軍の完敗です。この後、兵糧はなんども信長をせせら笑うように、石山本願寺に運び込まれました。

慶長年間（西暦 1600 年頃）に書かれた信長の伝記、「信長公記」（太田牛一著）には、このときの模様が織田側の目で次のように描かれています。

「…中国筋安芸の水軍、能島元吉・来島通総・児玉就英・栗屋元如・浦宗勝という者が、大船七～八百艘を率いて大坂の海上に来航し、大坂方に兵糧を補給しようとした。

海上では、敵は焙烙火矢というものを作り、味方の船を包囲してこれを次々に投げ込んで焼き崩した。…安芸の水軍は勝利をおさめ、大坂へ兵糧を補給して、西国へ引き揚げた。」（「信長公記」「天下布武」を呼号して、天下統一の野望に燃える織田信長にとって、大名以上の戦闘力を持つ本願寺は、その存在を許せるような相手ではありません。

信長は、志摩の九鬼嘉隆に命じて「鉄甲船」と呼ばれる鉄板を張り付けた大型の軍船を建造させます。

信長に招待されてこの軍船を見たポルトガル人宣教師オルガンチーノはその印象をこう述べています。

「この船は信長が伊勢国において建造させた日本国で最も大きく、かつ華麗な軍艦である。

わが王国の船に似ているが、実際に見分して、日本でこのような船を造れることに驚いた。信長がこの船の建造を命じたのは、天正 4 年以来戦争を継続している、大坂川口にこれを配置して、援兵と糧食を搭載して入港してくる敵船を阻止するためである。これによって大坂の町（石山本願寺の寺内町）は滅亡するものと思われる。  
……」

天正 6 年 11 月 6 日、六百余艘の毛利の水軍は、米を満載して木津川河口へ押し寄せます。

辰の刻（午前 8 時）木津川河口で、再び織田対毛利の水軍がぶつかり合います。

はじめ九鬼水軍は苦戦しますが、九鬼嘉隆は、敵船が近づくのを待って、大砲を発射させます。村上水軍が後退するところを一気に進んで追い散らします。正午頃、勝負はつきました。この二回目の海戦では、九鬼嘉隆が毛利水軍に完勝します。

本願寺への食料の運びいれは失敗し、石山への輸送路は全く断たれました。

天正 8 年（ 1580 ） 8 月、攻囲に耐え切れなくなった石山本願寺はついに開城、宗主顕如は紀州鷺森に退去して、 11 年続いた石山合戦も終ります。

織田信長はこの 2 年後、天正 10 年（ 1582 ）本能寺の変で倒れ、秀吉の時代になります。日本史は中世から近世へと大きく転換していきます。

○ 今、大阪のメインストリートとなっている御堂筋は、二つの本願寺寺院、北御堂（西本願寺、津村別院）と南御堂（東本願寺、難波別院）から名づけられたものです。この二つの御堂をつなぎ筋だから「御堂筋」と呼ばれたのです。

○ 村上水軍の頭領だった村上武吉の末裔の方は、三重紡績、東洋紡績の社長だった方と親戚筋に当たられるようで、まんざら大正区にあった大阪紡績（三軒家紡績、日本近代紡績発祥の地）とも関係がないわけではないようです。

○ 九鬼嘉隆は、石山合戦で村上水軍を破って、一躍その名を高め、戦国大名にのし上がります。

九鬼一族は明治維新後も政財界で活躍、白洲次郎・正子夫妻、九鬼周三著「『いき』の構造」などは、いまだに私たちに親しまれているとうりです。

2009 年、NHK ドラマ化決定「白洲次郎、占領を背負った男」という話題もあります。

城山三郎著「秀吉と武吉」（目を上げれば海）、「進者往生極楽」の章には、第一次海戦について、次のように描かれています。

15 日、村上元吉他 14 名が連署して、毛利輝元へ向け、注進状を認めた。開戦当時の状況に触れた後、報告は簡潔に、しかし力強く書かれた。

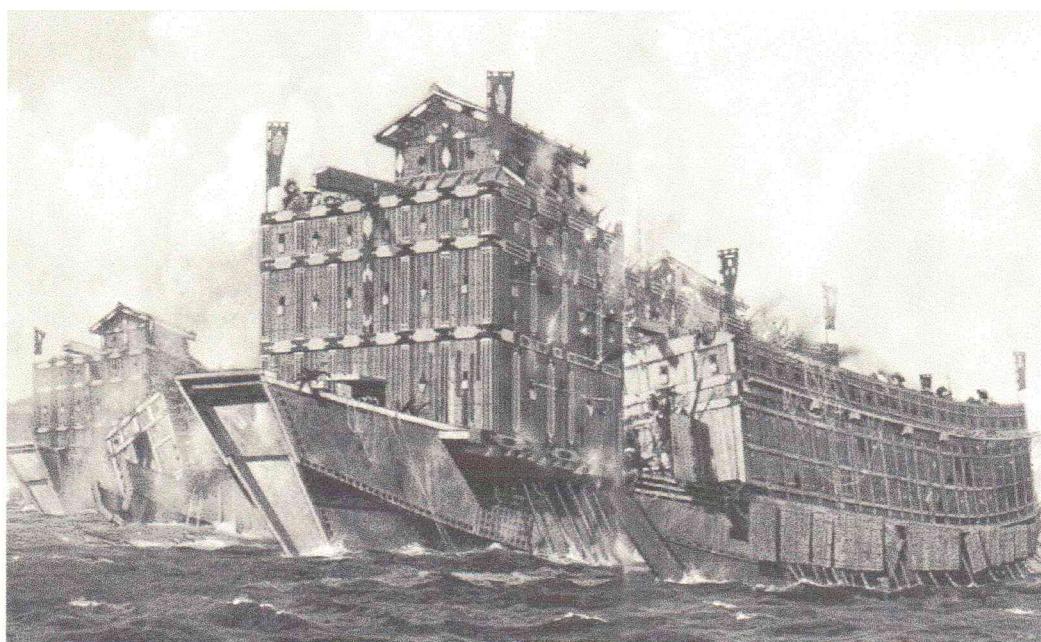
「 13 日より 14 日早朝迄に悉く討ち果たし、かの太船

残りなく焼き崩し候。数百人討ち捕り侯。頸注文相揃へ、やがて上進致すべく候。御警固衆並びに雜賀の者、比類なく手を碎かれ候。御用に立たれ侯衆に手負ひ数人候。是れ又重ねて注進致べく候。先づ以て御吉左右申し上げ候。「恐惶謹言」「信長公記」下には、第二次海戦について、こうあります。

「西国毛利方の船六百余艘が木津沖へ攻め寄せて來た。九鬼嘉隆の船隊が出撃すると、敵はこれを包囲して南へ押し戻しつつ、辰の刻から午の刻まで海戦となつた。初めのうちは、九鬼は支えがたく見えたが、六艘の船には大砲が何門もあつた。

敵船を間近に引き付け、大将の船とおぼしきものへ大砲を撃ち込み、大破させた。以後、敵船は恐れて寄り付かなかつた。

九鬼は敵船数百艘を木津の河口へ追い込んで擊破した。この海戦を見物していた人々は、九鬼嘉隆の大手柄に感嘆しない者はなかつた。」



織田軍の鉄張り軍艦

# 大坂冬の陣

山口謙一

大坂の役、慶長19年（1614年）】慶長20年

（1615年）は、江戸幕府が豊臣宗家（羽柴家）を滅ぼした戦いである。大坂冬の陣と大坂夏の陣（6月4日（旧暦5月8日）終局）をまとめた呼称。

一般には「大坂の陣」と呼ばれることが多い江戸幕府と豊臣宗家（羽柴家）との激突は方広寺鐘銘事件が発端になった。

慶長19年（1614年）、4月には梵鐘が完成した。文中に「国家安康」「君臣豊楽」の文字が問題視された。

方広寺鐘銘事件は、豊臣家攻撃の口実となった。豊臣側の軽率な行為に乗じたものというという性格が強い。

慶長19年（1614年）10月2日、豊臣家では旧恩ある大名や浪人に檄を飛ばし戦争準備に着手した。

同日に兵糧の買い入れを行うとともに、大坂にあった徳川家をはじめ諸大名の蔵屋敷から蔵米を接收した。

慶長19年（1614年）11月19日、戦闘は木津川口の砦においてはじまる（木津川口の戦い）。

木津川口砦（穢多崎、江田ガ崎とも呼ばれる）は豊臣軍が軍備を整える中で城外の要所に築城した砦の一つで「城」とも称される。

かつての石山合戦の舞台となった地である。豊臣方は大坂湾への出入り口を重視。

それを押さえるため、大坂城の西方に集中的に砦を築いていたのだ。これらは徳川軍の城の西方への展開を拒む形となっていた。

木津川口砦は城の南西、木津川と尻無川の合流する要所である（大正区・三軒家。道頓堀河口付近といわれる。地形的には、木津川の流れが河村瑞賢の木津川の改修以前であり、はっきりしない。）砦は大野治房が築き、兄の治長の指揮で明石全登<sup>あかしたけのり</sup>が800人をもって守備し、舟奉行には、樋口雅兼が付いた。

大坂冬の陣の本格的な火蓋は穢多崎砦の攻防戦によって切られた。

11月18日、徳川方の蜂須賀至鎮が偵察により「守兵は要害を頼りに守りを疎かにしている」と情報を掴み、本多正純を通じて家康に攻略の許可を求めたのである。家康は佐久間広政・勝之に砦を偵察させた後「至鎮は追手、浅野長晟は搦手、池田忠雄は遊軍となって攻め、木津の地形は人馬に不便な為、3人で協議して必勝を期すよう」と許可。至鎮は長晟と忠雄と3人で協議して明朝6時出発と決めるが、重臣・中村重勝の進言を受けて本多正信の内意を取って約束を破って抜け駆け。明朝3時に三千の兵を率いて勝間から出発。途中で二手に分かれ、水陸より砦を襲った。

この時、豊臣軍にとって不幸なことに、砦の主将・明石全登は本丸に伺候していて留守であり、弟・全延が砦を守備していたのである。守兵の指揮統制は乱れ、蜂須賀勢にとって都合良く強い北風が吹いたので火は延焼し、たやすく砦は陥落。全延は砦を捨てて博労淵へ向けて敗走。五隻ばかりの水軍を率いていた雅兼も四十隻の蜂須賀水軍を見て、とっとと後方へ下がっていた。

この戦いにより、徳川水軍の木津川の跳梁は容易になる。ちなみに浅野長晟だが、一万の大軍を率いて今宮から約束通り午前6時に出発、急行したが、時既におそし。戦闘に間に合わないどころか渡川の途中に船が沈んで多数の溺死者を出すという醜態を曝している。

ここで問題となるのが、穢多崎に集中的に砦を築造した目的です。弱体化した豊臣水軍の援護も兼ねていたと見る向きもあった、また水路を押さえて色々攪乱しようという構想はあった。

大坂城の北と東は溢水作戦と洪水で水浸し、南は惣構の補強と真田丸の築造。西の水辺の守りを固めるためであった。城外の穢多崎(木津川口。大阪市大正区)・博労淵・阿波座(同市西区)・瓦町・船場(東区)・福島(福島区)などの砦(とりで)の攻防戦によって展開されていった。この後11月26日には鳴野・今福で(鳴野・今福の戦い)、11月29日には博労淵、野田・福島において激しい戦闘が行われた(博労淵の戦い、野田・福島の戦い)。数ヶ所の砦が陥落した後、11月30日に豊臣軍は残りの砦を破棄、大坂城に撤収する。

豊臣方が籠城した大坂城を徳川方は約20万の軍で完全に包囲した。そして12月19日には講和条件が合意、20日に誓書が交換され和平が成立した。同日、家康・秀忠は諸将の砲撃を停止させている。

協議条件の内、城の破却と堀の埋め立ては二の丸が豊臣家、三の丸と外堀は徳川家の持ち分と決められていた。

和平成立後、家康は京都から駿府へ戻り、秀忠も伏見に戻ったが、一方で国友鍛冶に大砲の製造を命じるなど、戦争準備を行っている。

慶長20年（1615年）3月15日、大坂に浪人の不穏な動きがあるとする知らせが京都所司代の板倉勝重より駿府へ届くと、徳川方は浪人の解雇、豊臣家の移封を要求する。本丸以外の堀を埋められ、裸同然となっていた大坂城は、もはや殺到する徳川方を防ぐ術がなかった。現在、大阪城天守閣で所蔵されている、自らも大坂の役に参戦した黒田長政が絵師を集めて描かせたとされる屏風絵「大坂夏の陣図屏風」の左半分には、徳川方の雑兵達が大坂城下の民衆に襲い掛かり、偽首を取る様子や略奪を働き、身包み剥がしたり、さらには川を渡って逃げる民衆に銃口を向ける光景、そして女性をてごめにする様子などが詳細に描かれている。

また、記録によれば、一万数千の首の内、偽首を取られるなど殺害された民衆が数多くおり、生き残ったものの奴隸狩りに遭った者の数は大人から年端の行かぬ子供まで数千人に達したとされる。

人が残した記録「見かよし物語」には「男、女のへだてなく・老ひたるも、幼子も、目の当たりにて刺し殺し、あるいは親を失い、子を捕られ、夫婦の中も離ればなれに、なりゆくことの哀れさその数を知らず」と、その悲惨さが語られている。



# 木津川を利用した江戸時代の使節団

西村東一

～朝鮮通信使と琉球使節～

大正区は木津川と尻無川に囲まれた島であり、豊臣時代から江戸時代にかけて新田が活発に開発されるとともに、明治時代になっても埋め立てが進められた地域です。

それとともに木津川は大坂の玄関港として江戸時代を通じて、北前船が航行し、安治川と並んで大坂の二大港として栄えました。

木津川は道頓堀や立売堀などにつながるとともに、川口を経て中之島にもつながっていた関係で江戸時代を通じて、川全体が河川港の状態で、勘助島（三軒家東一丁目）には、遠見番所等も置かれ、摂津名所図会にも薩摩（鹿児島県）や加賀（石川県）などの諸国の中船が着船した賑わい振りが伝えられています。

このような中で、江戸時代には鎖国しているにもかかわらず、「朝鮮国」と「琉球国」が徳川将軍家と誼を通じるために、江戸に向けて使節団を派遣しました。

その際、瀬戸内を利用した大船を、淀川河口で川御座船に乗り換え、大坂で何泊かしたのち、伏見まで遡行し、その後江戸まで陸路を行きました。

この「淀川河口」はどこなのか、もちろん明治時代にできた新淀川ではありません。

江戸時代始めは伝（此花区）から旧中津川（現在の新淀川の流域にあった蛇行した河川）を利用したこともあったようですが、土砂の堆積によって、輸送河川としての利用ができなくなり、途中から木津川を遡行することになったようです。

それでは今残る記録文書で、この2つの使節団が木津川を利用した事実をお示ししましょう。

まず朝鮮通信使は、徳川將軍の代替わりや世継誕生祝として、慶長12年（1607）から文化8年（1811）までの間に12回派遣されました。

一回当たりの人数は回によって大小があるものの500人近くに上りました。

このうち第11回目の宝暦・14年（1764）の家治襲封時の日本側記録「宝暦物語」が残っています。それによると、使節団員数は462人、うち大坂留め（船の管理などの役目）が160人となっています。

「宝暦14年1月20日夜明け方、大船數娘大坂川口へ乗込ける。

然るに先例として、先此所に朝鮮の舟を留置きて、大坂より信使御迎えとして多くの船出されける。

先一番に將軍家の御船には孔雀丸、鳳風丸、紀伊国丸、新土佐丸…（諸大名七艘）…其の外大船小船数を尽くして、七カ国の船思い思いに給羅を尽くし…一艘一艘列を正し、河水に浮かみし有様は何にたとへん物なし。大坂近辺は言うに及ず、近国近在より見物に出し老少男女、僧尼の徒迄彩敷群集す。上は博労（西区、木津川左岸）より九条（右岸）、一・勘助島（三軒家西一、二丁目、東一丁目など）、前垂島（浪速区、左岸）、難波島（三軒家東二、三丁目）、木津村（浪速区左岸）の辺、…總て川に沿いし處は、両方の川岸にいでて我一にと見物す。

（この当時は千島新田はまだなく、難波島の南は海であった。）…午の刻（お昼ごろ）下がりに成りければ、三使を始め和漢の人々船にて中飯の支度有りて、船乗うつり用意をぞしられける。…亀井橋（江の子島と川口を結ぶ）早や日も暮れてければ…」とあり、船の巡航に時間がかかり、真夜中に宿舎である西本願寺に入ったようです。

「朝鮮の元船は九条尻無川に有りけるが、…風荒くして船に当りしかば、内川にてせまき河なれば、風の為に

船ゆられ、岸に当りて損ぜしかば、・・夫より下難波島の辺に船を置れたり。」

とも記され、天保10年（1839）発行の「大坂湊口新田細見図」によれば尻無川下流の泉尾新田付近は「唐人拷」と表示されています。

次に琉球使節は、將軍の代替わりの慶賀や琉球国王の即位時の謝恩のため寛永11年（1634）から明治5年（1872）まで全19回派遣されました。

一回当たりは約100人、常に薩摩藩主などが同行するので合せれば1000人にもなった記録があります。那覇から薩摩山川港までは琉球船で、鹿児島川内から薩摩船（関船）で大坂まで、後は朝鮮通信使と同じ行程ですが、大坂の宿舎は薩摩藩邸でした。

このうち確かな記録として残っているのは天保3年（1832）の「儀衛正日記」（ぎえいしょうにっき 儀衛正とは儀仗等を担当する役職）があります。

「天保3年10月17日 明六ツ時（午前6時）木津川口に着船。

10月20日 今朝五ツ時分（午前8時）大坂船問屋之者川内案内、正使ご乗船乗込、換船等出、船行列順々川登、四ツ過時分（午前10時）同正島（月正島）辺繫留候事（元難波島は川村瑞賢によって島の中央部を開削し木津川本流とし、大正区側を難波島、浪速区側を月正島とした。）

10月20日九ツ時（午後零時）ご乗船被成侯様・・王子御始役役小屋形船、川御座船に乗移、・・・酉時分（午後6時ごろ）大坂御屋敷前着船天保4年正月8日（帰路）王子副使川御座舟に乗付、いづれ賦り之船に乗合、船行列に楽舟諷等替がえいたし、川下りに、七ツ時分（午後4時）川内難波島前に、王子新田丸に御乗船、いつれ登之通各関船に乗移候事。

このように二つの使節団とも木津川を遡行したことは事実で、私たち大正区民の先祖たちは、きっと川べりから楽しそうに眺めていたのだと思います。

## 朝鮮文化使節団

森 伸治

### ○秀吉の朝鮮出兵と通信使のはじまり

今から約四百年前、豊臣秀吉による二度の朝鮮出兵がありました。これが「文禄・慶長の役」でした。7年間に及ぶ長い戦いの結果、両国は深い傷痕を残しました。秀吉の死後、この両国の平和回復に努力したのが徳川家康でした。日本と朝鮮はかっての友好関係を取り戻すべく、朝鮮から日本へ使節団がやって来ることになりました。これが朝鮮通信使のはじまりです。

江戸時代の二百年あまりの間（1607～1811）に合計12回来日し、江戸城で徳川の將軍と面会しました。通信使一行は正使のほかにすぐれた学者・文人・書家・医師などが選ばれていて、多い時には500名にも及ぶ一大文化使節団でした。

### ○木津川を行く通信使

朝鮮から瀬戸内海を航行して来た船は伝法沖に停泊させ、日本側が用意した喫水の浅い川御座船に乗り換え、土佐堀川に出て難波橋で上陸し3日10日あまり大坂に滞在しました、宿舎は御堂筋にある北御堂（津村別院）という寺でした。この伝法から入るルートはその後木津川ルートとなり、船は船乗りが乗ったまま尻無川に係留されました。

### ○大坂での交流と出来事

大坂は通信使一行にとって宿敵秀吉の居城として忘れることが出来ない土地であったと記録されています。一行が始めて大坂に着いた時、大坂城代として秀吉の子秀頼が居城していたのは皮肉なことでした。当時海外との交流が限られており外国人と接する機会が少なかつたため、通信使一行がやってくるのを大坂の人達も心待ちにしていました。

一行が到着すると宿舎には大勢の人が押し寄せ漢詩を交わしたり、絵を描いてもらったして交流を深めました。「人が多くやって来て寝るひまがない」と通信使がボヤクほどの熱狂ぶりでした。

第11回の目の使節団が大坂に来た時、不幸な事件が二つ起きています。一つは通信使の随員の一人キムハンチュウが、大坂までの航海中に病気にかかり宿舎の近くの竹林寺（西区本田に今もある）で養生していたが看護の甲斐もなく亡くなりました。

当時の竹林寺住職は、異国で若くして亡くなつたことを知らず、首を長くして故郷で待つてゐる妻と二人の小さな子供を哀れに思い、次の追悼の句を残しています。

「日本の本に消えにし露の玉ぞとは、知らで新羅の人や待つらん」

もう一つの事件は、通信使が江戸での公務を終えて大坂に到着し、宿舎になつてゐた北御堂で隋員の一人サイテンソウが殺される大事件が発生しました。大坂町奉行所と幕府の懸命の努力で無事解決したが、この事件を当時の劇作者達は見逃さず、角座で上演されたということです。対馬藩の通訳であった鈴木伝蔵が捕えられ、尻無川の月正島へ送られ処刑されています。

### ○善隣友好の旅

釜山から江戸まで2,000キロの長旅を半年以上かけて往来した朝鮮通信使は、まさに「善隣友好の旅」でした。このことを知る文物は、記録用の行列図、古文書、絵画、詩文、工芸品、芸能などさまざまな形で今も残されています。通信使一回の接待に幕府は一年分の収入を超える百万両（今の500億円位？）を投じたと当時幕府の財政を担当していた新井白石は記録しています。江戸時代に日本と朝鮮との交流が

深まり、文化、政治、経済など多方面で友好な関係が続いていたことを考えると時の流れを感じられずにはいられません。



朝鮮通信使

## 木津川口千本松風景

山口謙一

木津川河口千本松は、淀川水系の河口部にて分流し大阪湾へ流れ込む。そして大阪への物資の流通拠点の人口であった。

江戸時代は北前船が着き日本全国の物産が集まつた。

木津川が歴史的に、大きく登場するのは、石山本願寺と織田信長との木津川口の戦いにおいてであり、本願寺側は木津川口に砦を築いて抗戦した。その砦の場所は確定されていません。

木津川口の砦は、大正区三軒家付近であったとする説もある。地名のみから場所を定める事は困難でしょう。

西国（毛利）からの兵糧・武器、等を守る為に砦が築かれていたようです。

また、木津川口は、大阪の陣でも戦場となり、江戸時代には、木材商、造船業、荷受運搬業、等で賑わい、木津川沿いに新田開発が行われました。

江戸時代はじめの大坂の港は、南の木津川口（現在の大正区付近）と北の伝法（現在の此花区）であった。

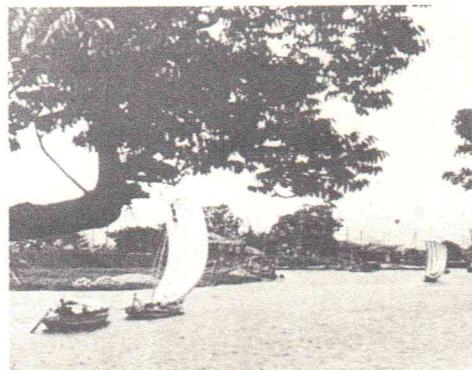
安治川（あじかわ）が開削された後、新しく安治川口に港ができる。

木津川は延長に伴い、新田開発や、大坂南郊と中心部を結ぶ重要な動脈となつた。住吉大社参りには、船場の旦那衆が船をしたてて川を上り下りしたようである。

大坂の港を象徴する「濬つくし」は海と川の境を示す航路標識で、「濬木」ともよばれ、川に向かって並んで打たれていた。そのうち一番海側の濬木が現在の大阪市章の形をしていた。

港の様子は絵画にも画かれた。  
「出船千艘、入船千艘」と言わ  
れたように、たくさんの船が停  
泊していた。

浪華木津川口新築立石波戸  
千本松風景は、江戸時代後期の  
作で暁鐘成が画いた。



文字は、道頓堀からの千本松までの道筋を記したものであり、絵の手前には加賀屋新田・住吉高灯籠が見える。木津川口には、天保3年(1832年)に幕府が石堤を築いた。

石堤の上には松が植えられ、「千本松」と呼ばれる景勝地となった。

現在の千本松大橋は、大阪府道五号大阪港八尾線の大正区南恩加島三丁目～西成区南津守二丁目間の木津川に架かるループ橋である。

大阪市の管理で、1973年に架設された。二層のループ構造で、橋の長さは中心部375m・ループ部分を含めた総延長は1245m。橋中央部の水面からの高さは36m。「千本松大橋」の名称は、江戸時代にこの地の木津川堤防に沿って多くの松が植えられていたことに由来している。なお、橋の形状をメガネに見立て、地元では「めがね橋」の通称で呼ばれる。

車道と歩道があり、自動車・歩行者ともに通行可能。橋を通るバスも存在する。

木津川の両岸には工業地帯が広がり、大型船が頻繁に航行している。そのため、船の運航に考慮して、通常の橋が架橋できない。

かつて自動車は上流の橋まで大きく迂回しなければならず、特に大正区南部の住民には交通面での不便を生じさせていた。

交通の便を改善する目的で、桁下の高さを高くとったループ橋・千本松大橋が建設された。

この地には従来から、木津川を渡る渡船場・千本松渡船場があり、大正区～西成区相互での歩行者や自転車の移動に利用されてきた。渡船を管理・運営する大阪市は、千本松大橋の開設に伴い、当初は千本松渡船場を廃止する計画だった。

しかし、渡船場の存続を求める住民の声が高まった。住民の声を反映して大阪市は当初の渡船場廃止計画を撤回、千本松渡船場は現在に至るまで存続している。



## 幕府の遠見番

松田邦雄

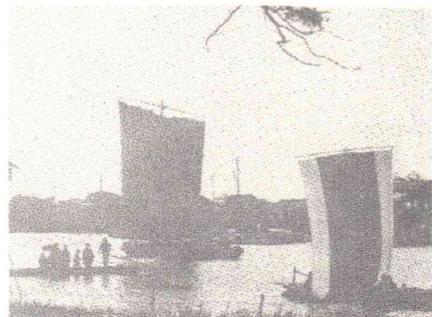
木津川は大坂の経済を支える大動脈として諸国の船の出入りで賑わいました。

当地は昔、「姫島」「日女島」と呼ばれておりましたが、義民として名高い中村(木津)勘助が、慶長15年(1610年)に豊臣家のために軍船係船所の建設や船着場の整備等を行い、その功により「勘助島」と名付けられました。

江戸時代になって、幕府は宝永5年(1708年)に「木津川口遠見番所」を現在地に設けました。また、西方には幕府の官船等を収容する「御船蔵」(岩崎橋公園附近)がありました。

大阪の島と言われた当地と都心をつなぐルートとして、大正4年(1915年)市電開通とともに架けられた大正橋は、当時わが国最長のアーチ橋で、当区名の由来ともなっています。新橋が昭和49年に完成、下流側の高欄にはベートーベンの交響曲第九番「歓喜の歌」の楽譜がデザインされています。

なお橋の東側にある「安政津波遭難者供養碑」は、安政元年(1854年)に木津川一帯を襲った安政の大津波の惨状を述べるとともに、最後に「後人の心得として願がわくば心あらん人、年々文字読み安きよう墨を入れ給うべし」と記しており、大阪人の心情を表しています。



木津川口遠見番所

## 井原西鶴と尻無川

松田邦雄

井原西鶴は近松門左衛門、松尾芭蕉と並んで元禄時代から日本中に雷鳴を轟かした大文豪である。西鶴塾金儲講座、日本永代蔵と云った経済繁栄、金持ちの商法の本から、浮世草紙に町人の人情やお色気を盛り込んだ、「好色一代男」「好色一代女」「好色五人女」等、色物の第一人者でもある。

人間の機微哀感を描いて後世に偉大な歴史を残した、大阪の豊かな商家に育ち、中年期には若い女房に家出され、商売を手代に任せて、頭髪を剃り、坊さんの姿に、ずた袋をかけ諸国漫遊の旅にでる。

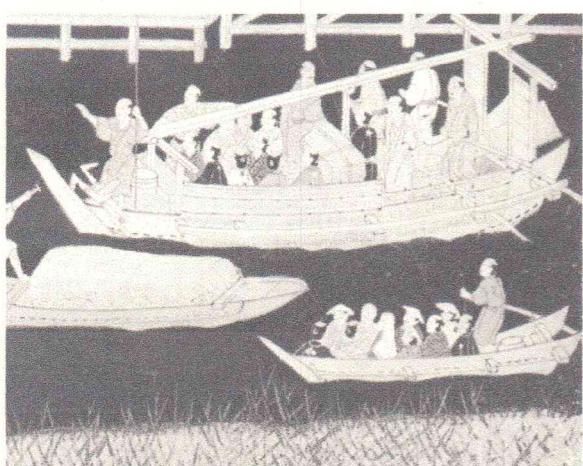
本名、平山藤五、寛永19年(1642)に生まれた、14歳で俳諧の道に進み、20歳で選者となり頭角を現す、31歳で西山宗因一門に移り、名を西鶴と号した、35歳から、俳諧作りの速さを競い、矢数連句俳諧記録、一日千句、千百句、四千句を創り、貞享元年(1684)6月5日、住吉大社に於いて、一昼夜に二万三千五百句の大記録を達成した。又好色一代女の木津川口の浮かれ比丘尼の情景は、三軒家遊里の里のことであろう。歴史館に残る、十双の屏風、大阪重要文化財の、三軒家遊里の里に思いを重ねるのである。

又、西鶴織留中の「何にても知恵の振売」には「すぎしの比、三軒家川口之鯉舟に出でし人、酒に乱れて後、釣りたる鯉を、丸焼きにして数食う事を手柄に、おのおのあはれける中にも、殊更一匹一口にせし人、俄かに喉を苦しめける、是はいかに、と見るに、この鯉の腹に二寸ばかりの糸ついて釣り針あるを喉に立て如何様も抜ける事無く、難儀すべきようなく舟中、鼓、三味線も鳴り止めて、と尻無川ハゼ並木の風景、風流舟遊びのにぎやかな情景を紹介している、唐紅に水くくる、と云う尻無川は絶景の地、尻無川は浪華絶名所であった。



## 三軒家川口遊里の里

松田邦雄



名、家来、豪族、庶民の遊び様を見事に描いた名作である。作者は不明だが大阪で最も古い絵巻、絵図である。大小の舟が行き通い、大規模な遊郭が描かれ、遊女の髪型や着物は寛永時代に流行した状態と判断されます。

木津川の川口に存在した三軒家で西国諸藩の御用船が描かれ、因州鳥取藩、阿波徳島藩、肥前佐賀藩、筑後の立花藩等の蔵屋敷に運ばれた船や上荷物、茶荷船が描かれています。出舟千隻入船千隻、天下の台所にふさわしい風情です。漁をする地引き網、遊女達の顔見世風景、仕出し屋、水売り、水泳姿の子供たちが生き生きと描かれています、木津川は寛永7年(1630)の浚渫によって船の航行が盛んになりました。三軒家は船着場として発展し、その賑わいとともに遊女達が住むようになり、明暦3年(1657)に幕府の政策により三軒家遊郭も幕府から出された文書、娼婦禁止令で西区の新町に移転しました。

人間模様や、風俗をあます所なく描かれた十曲の屏風は貴重な文化遺産です。食い倒れを思わせる画面が浪華の賑わいを写し出してくれています。明確な場所は解りませんが、木津川口、三軒屋と明記されていますから、現在の大正区に間違いは無い事でしょう。

賑わった三軒家川口遊里の里、大阪市立博物館所蔵、三軒家遊里の里の屏風は大阪市の重要文化財である。十曲の屏風からなっている、江戸時代前期の作で紙本金地着色 52, 2 の 362 センチの大作である、賑わった三軒家の風俗習慣と大

## 医学に貢献した今木刑場 松田邦雄

大阪の三刑場の一つ今木刑場物語。遠山の金さんの名文句、「市中引き回しのうえ張り付け獄門」は芝居のセリフである。元和元年(1619)大阪は幕府の直轄地となつた、大阪町奉行所は、城代、定番、加番、大番と共に民生部門を管轄していた。

十万石の松平下総守忠明の時、元和5年9月に創設された。奉行の役務は治安、警務、訴訟、裁判であった、東町奉行と西町奉行があり、西大阪の管轄は西町奉行所、初代は嶋田越前守である。重罪の首切り、さらし首等庶民に見せしめ刑が多い時期には年に八件にも及ぶ時もある。正確な刑死者数は解明出来ていないが、かなりの数である。

千日前刑場、平野刑場と共に大正区にも木津川口に今木刑場があった。葭島刑場とも言う明治3年廃止になった。今木刑場には近代医学の始まりを示す物語も残されている。

伴忠康の「適塾をめぐる人々」の本の中に勘助渡しの北側に葭島刑場があり、寛政13年(1800)に37才の女刑囚の腐分け(解剖)が行われたとある。解剖を行ったリーダーは伏屋素狄(1747~1811)西区阿波座の開業医である。

杉田玄白の「解体新書(1777)」に衝撃を受け、伏屋は解剖の実験に試み、この結果を「婦人内柔の図」に著した最初の人体解剖図である。和蘭医話の著書も残している、実験記録も数十枚にのぼる。我が国の実驗生理学の開祖といわれる。バルヘイン、ブランカールソ、ヘスリンギウスの解剖書を見て猿、猫、ネズミ、カワウソ、蛇、猪、牛などの動物、人屍を材料に独創的な実験も沢山やっている。

素狄は生きた動物や人の死体を開腹して、腎臓を取り出しガラス製の吸入管のさきを腎臓動脈に挿入し、水が

出て輪尿管を通り膀胱に入る事を繰り返し実験して確かめた。

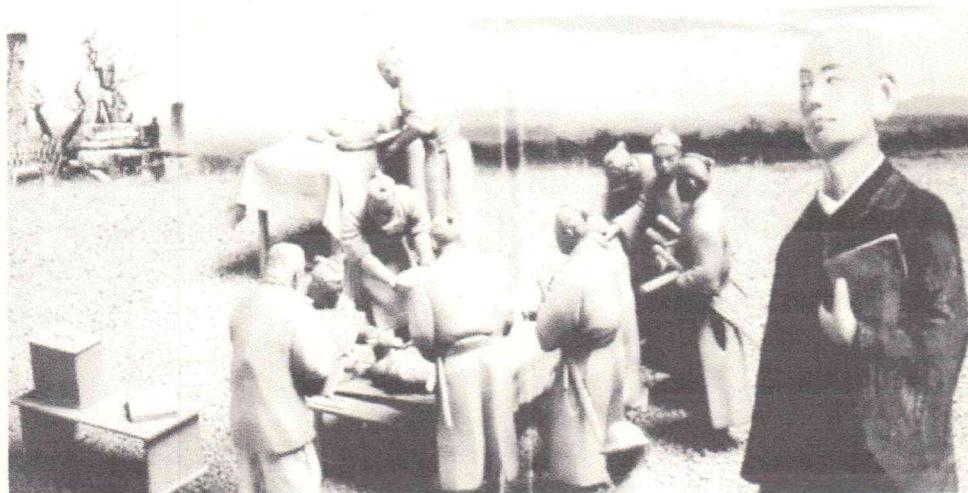
「腎臓は小便の濾し役」であることを見事に証明した、師である橋本宗吉の下、大矢尚齊、中川元興、斎藤方策、中天遊、各務文献の協力を得て腎臓の医学を発展させたのである。

著書に「腎臓は血中の汚れを濾し、その血を又血脉に戻す」この発見は、世界の医学会では1842年、ボーヌニの説が初説とされていたが、伏屋はその39年前（1803）年に「解剖と腎臓の働き」を出版している。

その医学的レベルは驚くべきである。文政7年（1824）にも19歳女屍を解剖したのも今木刑場である、白装束に身を整え、仏像に供養して、おごそかに解剖する。医学の発展に寄与する事大である。

適塾から解剖社を結成して、人体研究したのも今木刑場である。木津川の河口にあって、当時は舟で行かなければならぬ不便な場所であった。

命がけで解剖した男達の心意気が、そして医学発展につくした死刑囚達の魂に深く合掌をしたい想いで一杯である。



木津川の河口あった今木刑場

## 川口津波碑

野間智君

大正橋の北東橋詰め（浪速区側）にある「大地震両川津波の碑」の碑文の内容を元にして少し災害や地震について先人の教えに学びたい。

この碑は、江戸期の安政2年（1855年）7月に建立されたもので、主にその前年の嘉永7年（1854年）に起こった大地震での教訓を後世に書き残したものである。

嘉永7年の大地震の約150年前、宝永4年（1707年）10月4日に宝永の大地震が起こった。

この宝永の大地震については、この碑には小船に乗って避難したために津波で水死した人が多かったとの記載がある。この宝永の大地震の時には富士山の噴火があり、その裾野にいわゆる宝永山が形成された地震である。

その大地震やその後に来た大津波で、その5年前の元禄15年（1702年）にやっと工事が完成し検地を受けた泉尾新田の堤が決壊し、田畠が壊滅的な被害を受けた。その小作人たちは、さぞや相当落胆したことであろうと思われる。現在の大正区は全域が干拓地であるがゆえにその始まりから水害との戦いを宿命とされてきた。その町人請負として新田工事を始めた第4世北村六右衛門宗俊は、この時64歳という高齢であった。しかし、その被害に対して小作人たちを励まし、見事な気力と実行力で、その半年後の翌春には見事復旧工事を完成させたのである。

この当時の泉尾新田の堤は、沖堤と中堤があり、沖堤の高さは9m、中堤は5.4mであった。現在もその遺構の一部を辿ることが出来る。

さて、嘉永7年の大地震については、この碑文には同年の6月と11月に有ったと記載がある。

6月14日午前零時ごろ大地震が発生し、人々は驚き余震を恐れながら川のほとりにたたずみ4～5日の間

(余震が続き) 不安な夜を過ごしたとある。

その約半年後、11月4日午前8時(ないし9時)ごろに大地震が発生したが、このときには人々は以前から恐れていたので、空き地に小屋を建て避難していた。地震が発生しても水の上ならば安心だと小船に乗って避難している人もいた。

翌日の11月5日午後4時(ないし4時30分)ごろに再び大地震が発生し、家々が崩れ落ち、火災が発生した。日暮れ頃に雷のような音とともに一斉に津波が押し寄せてきた。安治川はもちろん、木津川の河口まで山のような大波(高さ3mから6m程度)が立ち、東掘(東横堀川)まで深さ1.4mの泥水が流れ込んできた。両川筋に停泊していた多くの大小の船の碇や艤綱は切れ、川が逆流し、木津川や道頓堀川の多くの橋が津波で流され、道頓堀川では船が横転し川をせきとめ河口から押し流してきた船を下敷きにして、その上に乗り上げてしまった。

木津川の川筋では、一面あつという間に壊れた船の山ができ、川岸に作った小屋は流されてきた船によつて壊され、その音や助けを求める人々の声が付近一帯に広がったが、救助することも出来ず、多数の人々が犠牲となつた、また船場や島ノ内まで津波が押し寄せてくると心配した人々が上町方面へ慌てて避難した。

地震が発生したら津波が起こることを充分心得ておき、船での避難は絶対にしてはいけない。

また建物は壊れ、火事になることもある。お金や大事な書類などは、大切に保管し、何よりも「火の用心」が肝心である。

川につないでいる船は流れの穏やかなところを選んでつなぎ替え、早めに陸の高いところに運び、津波に備えるべきである。

津波というのは沖から波が来るというだけでなく、海辺近くの海底などから吹き上がってくることもあります。



大地震両川口津波の碑

海辺の田畠にも泥水が吹き上がるということもある。津波の勢いは、普通の高潮とは違うということを今回被災した

人々は良く分かっているが、充分心得ておきなさい。などなど碑文には概要そのような先人の教えの記載がある。恐らく何百人いや何千人という人々がこの災害で命を落としたと思われるが、詳しいことは分からぬ。

先述したように宝永の大地震が発生して約150年後に嘉永の大地震が発生した。1854年発生の嘉永の大地震から150年後に当たるのは、ちょうど現代である。周期的には再び大きな地震が起きる時期に来ているといわれている。

この碑にある先人の教えを教訓にして、地震や津波などの災害に備えたいものである。この碑にある災害に対する先人の教えは、今まさに現代を生きる我々のために書かれたものと言ってよいだろう。

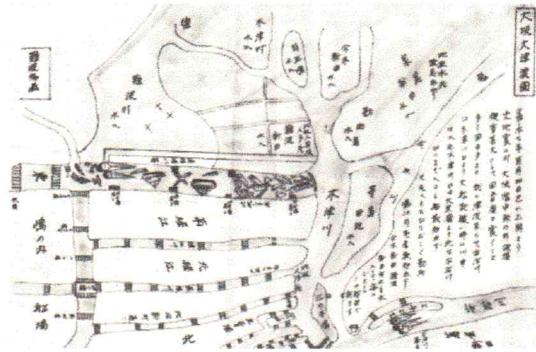
現在、我が大正区に於いては、その周囲を高さ大阪湾平均海水面+5.05mから7.00mの防潮堤で囲まれている。

尻無川水門、木津川水門などの大きな水門、その他104基の防潮扉がある。

それらの防潮扉や水門は、必要な時には扉が閉まるように行行政や水防団が備えている。

しかし、それらの防潮扉がいざという時に閉められなかつた時、台風や地震、津波などの災害が起こつたとき、どのように自分自身を守るのかを普段から考え、備えていくことが大事なのではあるまいかと思う。行政などから発信される防災情報に普段から敏感にならなくてはならないと思う。

それが、我々がこの碑にある先人の教えに応える道であろうと思う。



## 逃亡者 桂小五郎

本郷良章



ボランティア情報誌「COMVO」2008年10月号に”池上雪枝感化院跡を訪ねて”の探訪記事があります。

場所は北区の松ヶ枝町、今評判の天満天神繁昌亭の近くです。明治16年、地域で増えていく非行少年たちに心を痛め、池上雪枝が自宅を開放して感化院を開設、少年保護施設の先駆けとなっ

たった場所です。この女性に触発されて同じ梅田界隈に住む一人の慈善家が明治18年に授産場を開いた事も文中にあります。この人こそ小林佐兵衛、司馬遼太郎著『俄』の主人公 明石屋萬吉の後の姿です。この名前を見て、昨秋但馬の出石へバス旅行で行ったことを思い出しました。江戸時代は五万八千石の城下町、また三大お家騒動の一つといわれる「仙石騒動」の舞台です。

近年まちづくりが整備され、但馬の小京都「出石」とアピールしていることで、観光客が多くなっています。市中に出石川が流れ、川の両側に民家や農家やお寺が入りまじりながら、ちまちまとたまり、あとは城と但馬の山々に囲まれた何の変哲もない町ですが、目玉は太鼓楼です。辰ノ刻に打つので辰鼓楼とよばれています。

幕末好きの私は、このまちで見たい所が二つありました。昌念寺と廣江屋跡です、どちらも長州の大立者桂小五郎の潜伏跡です。廣江屋では妻を娶って荒物屋を営んでいました。彼は出石以外にも但馬地域では温泉で有名な城崎にも潜伏しています。池田屋事変、蛤御門の変と続く長州追い落としの危難を逃れて、時節到来を待つ桂小五郎の心境はいかばかりか、失意と憂鬱の月日であったとおもわれます。

桂小五郎がこの出石から長州に戻る計画をたてるのは潜伏後9ヶ月目の慶応元(1865)年4月のことでした。

西国街道を通って長州に入るには危険が伴います。途中

通過する藩はことごとく敵藩であり、関所には幕吏が目をひからせています。桂小五郎は一旦城崎に出て、そこから京にはいる街道をとります。京街道は逃亡者、桂小五郎にとって運命を託した道といえます。城崎出発は4月6日、そして-----同月16日、大坂着。

さて、ここで『俄』の主人公 明石屋萬吉のはなしに変わります。数々の遍歴の末、侠客として名を売った萬吉は、丁度この時期、桂小五郎が悶々と但馬の片田舎で人目を忍んで逼塞している時に、一柳対馬守に召抱えられ、横堀以南、西大坂一帯の市中警備にあたっていました。

市中警備といつても京に於ける新撰組の市中巡邏と違い、大坂は瀬戸内海に面して舟の要衝路になる為、実際は四通八達した河川の警備で、京から来る舟や西国からの入り舟の検分・警戒が任務です、いわば現在の警察の道路検問と同じです。

その検問所となる舟番所が河川の要所に張り巡らされていました。萬吉の持ち場は尻無川の舟番所。当時は中之島で分流した堂島川と土佐堀川が合流して西に安治川となり、南に尻無川と木津川が二分して、江之子島や寺島、勘助島を挟んで流れていきました。いまのドーム下から西中学校の横道を経て、北に伸びる細い道が昔の尻無川の名残りです。舟番所は川が分岐する洲の突端（剣先）にあり、北にむかって左手が安治川、右手が尻無川となり、その尻無川の対岸に見える小さな島が、江之子島です。萬吉は白髪橋北詰の住居から川舟で通っていました。

その尻無川の舟番所に慶応元（1865）年4月16日夜半、萬吉の配下に捕らえられた男が引き立てられました。池田屋事変後大坂でも不逞浪士の探索が厳しくなり、これまでにも数多くの浪士が各番所で捕殺されていました。

配下のいうには、16日払暁 北浜の旅宿「加賀伊」に行商人風の男が入っていった。辺りを覗う素振りに不審を抱いた見張番の幕吏が主人の伊助に問い合わせたが「但馬出石の小間物商人でおります」というだけで頑として口を割らない。夕刻、中之島に面した旅宿裏の土佐堀川の河岸から一艘の小舟が西に向かって漕ぎ出した。

半里程川下に行くと常安橋が架かっている。此処で一人

の男がその小舟に乗りこんだ。

この常安橋の南詰には萩藩(長州藩)の蔵屋敷がある。小舟が越中橋をくぐってから急に船足を速めた。

追尾舟が「御用舟である」旨を告げて「舟検めである」と大音声で呼びかけたが、応答がない、間隔は三十間近く離れている。堂島川との合流地点、安治川、尻無川、木津川の分流地点はもう目の前だ。

安治川に入られると川幅が広くなり、流れも速くなつて、この追尾舟で追いつくのは難しい。提灯で尻無川の舟番所に合図を送ると舟が出張ってきた。

安治川への航路を断たれて尻無川に旋回するのを追尾舟が挟み打ちして、やっと川舟に乗込み取り押さえた。乗っていたのは男が3人、女が1人である。2人の男は見るからに町人風です。この2人が旅宿「加賀伊」に入っていった男でしょう。萬吉は第三の男に興味を示します。

常安橋(長州蔵屋敷の近く)の橋下から乗りこんだとすると当節、長州者と見なければならない。

しかも囚われの身でありながら、泰然自若とした態度と風格。人品骨柄が卑しく無い上に目がすわっています。そして商家の妻女風の女はどうみても素人ではない・・・・と萬吉は見ます。

この4人の組み合わせも奇妙です。何か事情があると察した萬吉は、「これから先はわてに任せとくなはれ」と白髪橋の住居に帰る川舟に乗せて天保山の西国下りの船まで送っていくのです。この事が明石屋萬吉生涯の思い出話のたねになります。

4人は桂小五郎と愛妓幾松、そして出石の甚助と直蔵、義侠心のある兄弟です。桂は運の強い男でした。

しかし甚助や直蔵、そして萬吉という人達がいなければ、ここまで無事でいたかどうか?・・・彼はまだ逃げます、西国下りの船にのって、執拗な幕吏の追跡をかわしながら、現在を今夜を生きて長州に帰るために-----。

## 近代紡績発祥の地 三軒家紡績

松田邦雄

大阪紡績発祥の地は、「近代紡績工業発祥の地」の石碑のある三軒家公園にあって、明治16年（1883）7月に操業開始されました。

当時の時代背景は歴史上の人物で有名な“西郷隆盛”“木戸孝允”“大久保利通”“岩倉具視”“伊藤博文”“板垣退助”といった人々がいて、日本の国のあるべき姿を模索されていた時期でした。

第一工場（明治17年（1884）第二工場（明治19年（1886）第三工場（明治22年（1889）と写真にあるように、英國風の4階建レンガ造の工場で、当時としては随分美しい風変わりな工場であり、機械紡績で企業的に成功を収めた日本最初の工場です。

当時「第一国立銀行頭取」の「渋沢栄一」は国益のうえから紡績事業を興すことが急務と悟り、大規模な機械紡績会社を設立する計画を練っていました。渋沢栄一は技術の指導、事業の運営にあたれる人物を見つけなければならぬと考え、各方面より物色し、浮かびあがってきたのが「山邊丈夫」（後の社長）という人物がありました。「山邊丈夫」は明治10年ロンドンに渡り、ロンドン大学で経済学を学んでいたが、「渋沢栄一」からの「イギリスで紡績技術を学び紡績事業に協力されたい」との要望に、これを受け入れた。「山邊丈夫」は当時世界の紡績業の最先端地であった「マンチェスター」に居を移し、紡績経営に必要な紡績業の理論と実際を研修取得して帰国しました。

工場の建設については、「海に近く、川に面した、石炭や綿花の搬入の便が良く、労働力の給源としても適している地域」を求め、当時大阪の実業家である「松本重太郎」「藤田伝三郎」などの協賛を得て、大正区三軒家に「大阪紡績会社」として工場が建設されました。

資本金28万円、株主95名 大規模な会社の発祥でした。

大阪紡績は明治16年（1883）3月に設立総会が開かれました。

（イ）頭取：藤田伝三郎 取締役：松本重太郎、熊谷辰太郎；相談役：渋沢栄一 工場支配人：山邊丈夫等が登用され、当初は工員約2,300名、紡機15.000錘の大規模で出発しました。

後に鐘数は合計61.320錘となり、工員も3,970人を擁し、業界に傑出した地位を確立し目覚しい成績を上げることが出来ました。

（ロ）労働者の二交代制の昼夜兼業（24時間稼動）で夜間での工場作業において照明をどうするかが大きな問題がありました。

当時工場では5分芯の石油ランプ650灯を使っていましたが、火災等の危険が伴うため、これを廃止し、当時（明治19年（1886）皇居でしか使用されていなかった発電機を購入・採用されました。

初めて明々と電灯がともり工場全体が不夜城のように浮かびあがり本格的な24時間操業がスタートし、各地から多くの電灯の見学者が殺到し大変にぎやかであったといわれています。

（ハ）原料綿花も国産綿花から逐次低廉豊富であった外国綿（中国綿・インド綿）に切り替えられ、イギリス製紡績機との適合性も高く、生産向上につながりました。

（ニ）工場経営に最も必要な運転資金の流通が大変スムーズであった。

即ち、渋沢栄一の第一国立銀行や松本重太郎の第百三十国立銀行が大きく支援したことも大きかったと言われています。

（ホ）このような推移の中において、工場火災と相次ぐ経営革新がありました。

明治25年（1892）12月大失火により工場設備の半分を焼失し、逃げ遅れた96名もの女工さんが焼死する大惨事がありました。（扉が内開きで、一度に扉に押し寄せたため、扉が開かなかった。）

亡くなられた女工さんは、地蔵院（大正東中学校の西側にあるお寺）に弔われ、寺内に石碑が建てられてあります。

たが、現在石碑は無くお寺の本堂に位牌が安置されています。

なお、年忌には東洋紡績会社より重役がお参りされていると聞いております。

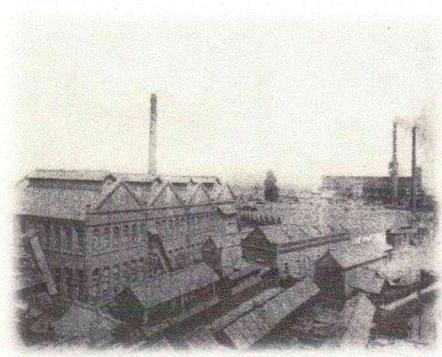
(ヘ) 工場火災後、機械は操作にかなりの熟練を要した従来のミュール機に対して、不熟練の、女子工員でも操作が容易であるリング紡績機を導入し、生産性の向上は著しく発展し、本家イギリス紡績業を追い抜くことになりました。

(山邊丈夫は、この失火による危機に直面したが、これをむしろ、奇貨としました)

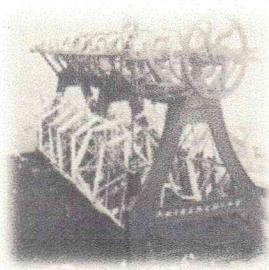
(ト) 大阪紡績は、これ等の推移の後、大正3年(1914)に三重紡績と合併して「東洋紡績株式会社」の設立となり、世界最大の綿布生産工場となり、我が国が世界最大の綿布輸出国となる礎となりました。

大阪紡績の成功を契機として日本の紡績業は急速な発展を遂げ、日本産業革命の主導部門となりました。(繊維工業の発展とともに大阪では繊維関係商業も大きく開花することになりました) まさに「東洋のマン彻スター」と呼ばれるにふさわしい発展を遂げることになりました。

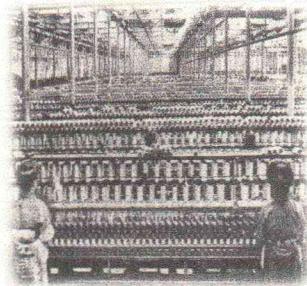
以後、太平洋戦争激化とともに軍事工場に転換させられ、昭和20年(1945)3月の大空襲によりレンガ造の立派な工場は焼失しました。



三軒家紡績工場全景



糸巻き機



# 明治の巨頭渋沢栄一と三軒家紡績

森 伸治

英國風のモダンなレンガ造りの4階建ての紡績工場が、我がまち大正区に誕生したのは、明治15年(1883)のことでした。

当時、大阪府西成郡三軒家村で操業を開始したことから、三軒家紡績(正式名は大阪紡績)と呼称されていました、三軒家紡績の誕生を契機に大正区の近代工業を大きく発展させ、大阪の紡績工業を日本一へと導く原動力となりました。

そして、イギリスの産業革命の基軸産業、紡績の中心都市であった、マン彻エスターにちなみ、「東洋のマン彻エスター」と称されるようになりました。

三軒家紡績を創立した人とその思いをたどってみることにします、三軒家紡績の創立者は、明治の大実業家、渋沢栄一でした、埼玉県生まれの渋沢栄一(1840~1931)は、幕末・明治・大正・昭和と大きく激変する時代にあって、日本の資本主義的基礎を確立させた偉大なビジネスリーダーでした。

91歳の生涯を終えるまでに銀行・製紙会社・紡績会社を始めとして、五百余りの会社を設立しています、当時は、第一国立銀行頭取であった渋沢栄一は、海外からの綿糸輸入額が巨額であることに着目し、国益の観点から国内で大規模な紡績事業を興すことが重要であると考え、当時、大阪きっての日の出の勢いのある実業家であった藤田伝三郎らと共に紡績会社を、三軒家村に設立したのでした。

三軒家村は海に近く、石炭や綿花の搬入、製品の運搬に便利なこと、労働力の供給源としても適していたことから選ばれました、三軒家紡績は操業草々から業績を挙げました、その成功の要點として、次のような事でした、第一は、動力源を水力でなく蒸気を利用し、大規模生産を目指した事、第二は、労働者の二交代制を当時として初めて採用した事です、昼夜兼業の実施に伴い、工場の照明もランプから電燈に切り替えました。

当時、我が国で電気を利用したのは、電信以外に無かつ

たころですから「ひもランプ」と呼ばれ非常に珍しがられました、大阪で初めてという電燈を一目みようと市内各地から見物人が殺到する有様で、工場を三日間公開したところ、5万人も見物人が押し掛けました。

工場発展の裏には悲劇の出来事もありました、明治25年工場で大火災が発生し、工場全焼、死者95名、怪我人22名という大惨事を経験しました。

その後は、大正時代初期の不況時代もあって、当時大阪紡績の社長であった山邊丈夫は、三重紡績との合併を決意し、両社の相談役であった渋沢の斡旋により、大正3年に東洋紡績株式会社を発足させます。

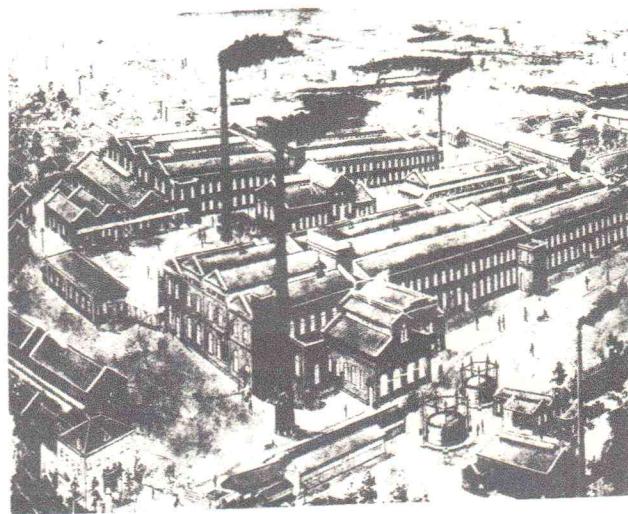
この合併により世界最大の紡績会社へと発展しましたが、戦争の激化と共に軍需工場に転換させられ、昭和20年3月の大空襲で焼失してしまいました。

今は、三軒家二丁目の三軒家公園内に「近代紡績工場発祥の地」が建てられその名残を留めています。

新しい日本を切り開いた渋沢栄一を中心とする先人たちの熱い思いと偉業を振り返ることが出来る歴史の碑でもあります。



渋沢栄一氏



三軒家紡績

## 藤田伝三郎伝

岸本君枝

明治 16 年（1883）7 月三軒家村に日本初大規模な「大阪紡績会社」通称・三軒家紡績が子爵・渋沢栄一・男爵・藤田伝三郎らが出資 15,000 錘の機械で操業開始、近代工業を発展させ大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となる。江戸時代から船着場として賑わい大阪の中心から離れていたが石炭や原料綿花製品を運ぶのに海上輸送の便利さから三軒家村が選ばれた。

明治 19 年皇居でしか使用していない発電機購入・夜業で 5 分芯の石油ランプ・650 灯使用していたが火災の危険から民間で初めて電灯が灯り工場全体が不夜城のように浮かび上がり各地から見学者が殺到して大変賑やかであった。

日清戦争から日露戦争時代に入り英國の「マンチェスター」と呼ばれるような発展を遂げる（江戸時代イギリスのマンチェスターで起こった産業革命のことで繊維工業など機械化による大工業が誕生）

明治 25 年 12 月火災で 96 名の女工さんが焼死、扉が内開きで一度に押寄せ扉が開かなかった為で地蔵院・東中学校西側の寺に位牌が安置。

大正 3 年四日市の三重紡績と合併して「東洋紡績株式会社」設立

世界最大綿布工場となるが戦争激化で軍需工場となる。

昭和 20 年 3 月 13 日の大阪大空襲で焼失したが東洋紡績に明治 16 年開業当時のレンガが保存されている。

男爵・藤田伝三郎は大阪紡績会社・明治 16 年 3 月設立・頭取を務め大阪経済の基礎を築いた関西実業界の中心人物であった。美術品のコレクターでもあり現在の都島区綱島町邸宅は明治から大正初期建設で表門以外は戦火で焼失・庭園は一般公開され大阪市指定文化財に指定、藤田美術館として 29 年 5 月開館。

太閤園横の敷地は、昔、近松門左衛門の心中物の傑作、淨瑠璃「心中天の綱島」で有名だ。

「浄土宗大長寺」と書かれた小さな寺の門の前に立った、遊女小春と紙屋治兵衛が悲惨な最期をとげた、ここは都島綱島町である。

太閤園の高い塀に沿って歩き右手に曲ってしばらく行った所に「旧藤田邸庭園」の山門風の入り口がある、美術館は庭園の角にあり、楠や松など大木のほか見たこともない四季の花々が植えられ芝生がうねる様に曲り、あずまやがあり、一角には木々が鬱そうとしげり、昼間でも小暗い丘のあたりに大川の流れがのぞめ、丘の下には見事な巨岩がある、丘や谷も自然の地形のままに見える。

享保 5 年 10 月紙屋治兵衛と遊女小春が大長寺のたもとで心中、幕府は「心中天の綱島」が上演されて 2 年後、淨瑠璃を禁止するほど、真似するカップルが相次いだという。

## 紡績王 山邊文夫

宮本 明



東洋のマンチェスター日本最初の近代紡績を造り上げた男 先覚者 山邊文夫、山邊は石見津和野の生まれ、20歳で上京英語を習い教師を務めた時もある。明治10年(1877)旧藩主の息子がイギリスへくのに同行、その時に巨人渋沢栄一と出会ったことが幸運となる。渋沢の要望で大学で紡績業を学び渋沢が発起人とする大阪紡績の創立に参加、工務支配人となる。

山邊はイギリスの工場で学んだ経験を生かし新技術も導入し最新工場を作りあげた。時の資本金28万円、支配人の月給は28円だった。場が三軒家村にあったから三軒家紡とも呼ばれた。力を応用し赤いレンガ造りの4階建て工場は当時の人々をあつといわせ見学者が何万人も押し寄せた。械類はイギリス仕入れ、夜業で生産をあげる為、石油のひもランプを使った。災が頻繁に発生し最新鋭の発電機による電燈に切り替えた。

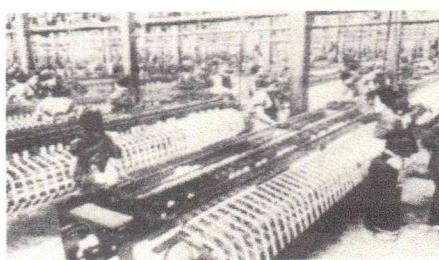
明治19年(1886)年10月工場内一斉に灯りが輝き女工さん達もキャキャと喜びの声をあげた。

見学者も跡をたたず、工業用としては日本最初の出来事である。原綿が不足すればインド綿の輸入をアメリカの織機300台の輸入、染色の研究と技術者、女工さんの育成と努力した。近辺には同業10社が増え生産がだぶついたり、火災も起きて90名焼死者を出したり困難もあった。難を乗り越えて明治26年(1895)50,000錘を復旧した。綿輸入税の廃止につくし、31年に社長に昇進、大正に入り渋沢栄一の斡旋で三重紡と合併、東洋紡を設立し紡績王といわれた。大正9年(1920)69歳で没したが功績は後世に伝えられている。

働く女工さん



機織り織り



## 森 鷗外と三軒家 波多江寿昭

森 鷗外の晩年、大正4年（1915、作者54歳）作の短編「最後の一匁」は、このような書き出しではじまります。「元文3年11月23日の事である。大阪で、船乗り業桂屋太郎兵衛と云ふものを、木津川口で三日間曝した上、斬罪に処すると、高札に書いて立てられた。市中到る處太郎兵衛の噂ばかりしてゐる中に、それを最も痛切に感ぜなくてはならぬ太郎兵衛の家族は、南組堀江橋際の家で、もう丸2年程、殆ど全く世間との交通を絶って暮らしてゐるのである。」

元文3年、1738年の大坂西町奉行所の管内には、木津川口に刑場があったようです。今の地図で言えば、三軒家東のあたりでしょうか。

そういえば、今の大坂ミナミの繁華街、千日前も明治までは、墓場と刑場だったそうです。

小説「最後の一匁」のあらすじは：大阪、堀江橋際で船乗り業をいとなむ桂屋太郎兵衛の船が出羽秋田から米を積んで出帆したところ、途中風波に会って積荷の半分以上を流失した。太郎兵衛が雇って船に乗せていた新七という者が、残った米を売って金にして大阪に帰ってきた。太郎兵衛はそれまで正直に営業していたのだが、営業上に大きい損失を見た直後に、現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇って、其金を受け取ってしまった。太郎兵衛は入牢し、木津川口で三日間曝したうえ、死罪に処せられることになった。

これを知った太郎兵衛の長女「いち」（16歳）が弟妹たちといっしょに父の命乞いをする願書を書いて、奉行所に訴え出て、その願いを貫徹させる。

いちが奉行所で取り調べを受けた時に、役人がいちに向かって、「そんなら今一つお前に聞くが、身代わりをお聞き届けになると、お前たちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか」という。このとき、

いちの発した「よろしゅうございます。お上の事には間違ございますまいから」という最後の一旬は「いちと語を交へた佐佐のみでなく、書院にゐた役人一同の胸をも刺した」というものです。(この皮肉、今日でも痛切に響いてくるではありませんか。)

かつての「木津川口」にあたる三軒家公園に、今は「近代紡績工業発祥の地」という記念碑が立っています。

解説文にはこうあります。「大阪紡績(俗称:三軒家紡績)は明治16年(1883)から操業を開始した。

日本で最初の工場で、近代紡績工業の先駆となった。」明治16年、渋沢栄一や藤田伝三郎らが出資した大阪紡績会社が、大阪府西成郡三軒家村で操業を始めました。この当時の「三軒家村」は、その名のとおり、まだ人家のまれなところだったことでしょう。

技術面には、イギリス、マン彻スターで紡績技術を身につけた山邊丈夫が起用されました。明治31年、山邊は大阪紡績の社長になります。

日清・日露戦争の頃には、大阪には数多くの紡績・繊維会社ができ、「東洋のマン彻スター」と呼ばれるようになりました。

山邊丈夫は「近代紡績工業の父」と呼ばれています。

岩波文庫「雨夜譚」(渋沢栄一自伝)には、このようにあります。

「.....そもそももの初めは明治13年頃(今は東洋紡績会社と名が変わりましたけれども)大阪には大阪紡績会社というのがあって、私の主として尽力して組立てたる紡績事業である。その会社が出来上がった後、明治19年に三重に三重紡績というものが出来ました。その三重と大阪とが合併して東洋紡績会社となったのである。....」同書「大阪紡績会社」の注には、次のようにあります。

「渋沢の主唱で、華族・政商・綿関係商人を中心として、明治15年(1882)資本金25万円で創立。翌年、イギリス帰りの士族出身(津和野藩)紡績技術者山邊丈夫を工務支配人とし、蒸気機関による15.000錘という西洋レベルの大規模で開業し、電灯をつけ昼夜二交替制で好成績をあげ、紡績会社設立ブームの先駆となった。」

津和野藩といえば、森 鷗外も津和野の人です。

森 鷗外、小説「最後の一匁」、木津川口の刑場、三軒家村、大阪紡績会社、山邊丈夫とここまで繋がってきました。ところで、森 鷗外と山邊丈夫には、どんな繋がりがあるのでしょうか。

阿倍野の墓地には、山邊の墓があるということなので行ってみました。

広大な阿倍野の墓地、南靈園1区15番には、この墓地の中でもひときわ目立つ立派な墓があります。

三つの墓石が並んでいますが、真中のひときわ大きいのが、「山邊龍一之墓」(裏側に「大阪府士族、山邊丈夫長男、明治22年12月9日歿、行年8歳9ヶ月」)、その左に一回り小さいのが「従5位(9代)山邊丈夫之墓、同妻定子之墓」、右側には更に小さく「八代山辺正義、同妻喜勢子」の墓があります。

墓の入口には、石の鳥居があり、その左側には、定子の歌碑、右側には、「文學博士 森林太郎撰」なる碑文があります。「撰」とは「詩文を作る」ということです。

この墓碑銘を書き写してみました。

### 「山邊君墓表」

伯 亀井茲常篆額

明治中興百度更新始與海外諸國貿易而輸入外物棉布居十之七澁澤榮一與藤田傳三郎松本重太郎等謀欲興紡績會社于大阪以拯此弊募資華胄與當民規畫就緒求監工場督職事物頗難其人物色四方而獲山邊君矣君諱丈夫本清水氏小字虎樞更善藏父曰格亮母吉松氏嘉永四年十二月八日生於石見國津和野安政元年為山邊正義所養冒其氏明治三年君詣東京從中村敬宇西周福澤諭吉等游習英語處問殖產事十年會前津和野藩主亀井伯茲明之英君從之攻經濟學于王學院時有津田東者說澁澤榮一欲聘君君諾於是治機關學于倫敦大學又歷訪諸市工場與衆工伍索術於隱微十三年還所謂大阪紡績會社者至此始成設工場於三軒家君為工務支配人二十三年併合大阪織布會社二十八年君為會社取締役兼工務長三十一年為會社長三十三年為大日本紡績聯合會委員長三十五年敕賜綠授章大正三年我會社與三重紡績會社合為東洋紡績會社君長之敕賜綠授章

飾版四年特旨叙從五位五季辭職肥遯須磨別業九年五月十四日病歿享年七十葬阿倍野君娶相澤氏名定生子龍一天養姪清亮為嗣聞之吾邦紡績之業至島津候齋彬始用機關幕府末造設工場於采邑業不甚振維新後松方正義為勸業局長分置紡績機關于大阪岡山奈良愛知宮城栃木廣島諸府縣所製棉絲皆未精良其遂振起此業使內產絲視外產絲毫無遜色以減輸入增輸出實始於大阪紡績會社而會社致之實由有君拮据盡瘁終身不倦然則君於吾邦產業其功豈鮮少哉君歿之二年知君者胥謀助貲立石以為不朽計嗣子清亮請予刻文乃叙君世系功績以授之

大正11年1月  
文學博士 森林太郎撰  
磯野惟秋書

難しい漢字がいっぱい並んでいますが、この中から、意味の分かる固有名詞だけを拾い出してみました。

人名では：亀井茲常：旧津和野藩主、伯爵。

「篆額」とは「石碑の上に篆字で彫った題字」のこと。

「山邊君墓表」とある。

渋沢栄一：1840－1931、明治・大正時代の実業家。大紡績の創立者。山邊丈夫（28歳）を大阪紡績の技術者として抜擢。藤田傳三郎：1841－1911、実業家、山口県生まれ、藤田組を設立。関西財界人。明治16年、大阪紡績初代取締役頭取に就任。

松本重太郎：1844－1913、関西経済界の重鎮。

「西の松本、東の渋沢」と呼ばれた。

山邊丈夫：1851（嘉永4）12.8－1929（大正9）5.14。山邊家第9代。英国留学中、専攻をから紡績技術に変え、マン彻スターで修業（明治12年9月）。清水格亮：津和野藩士、丈夫の実父。丈夫は格次男。

山邊善蔵：丈夫の養父山邊正義：山邊家第8代 明治3年7月1日歿。中村敬宇：1832－1891、中村正直。スマイルズ「自助論」出版。西周：1829－1897、明治の哲学者・啓蒙思想家。津和野の人。亀井茲明の養育係に丈夫を任命。福澤諭吉：1835－1991、明治の啓蒙思想家、慶應義塾の創設者。

（明治6年、丈夫、大阪慶應義塾に入り、傍ら船場小学校

にて教鞭をとる) 亀井茲明：旧藩主の養嗣子、丈夫が随行してロンドンに留学(明治10年8月)。

津田 束(「つかね」とも)：第一国立銀行、ロンドン留学中の丈夫を渋沢栄一に推薦。山邊定子：丈夫の妻

(旧姓：相沢) 山邊龍一：丈夫・定子の長男(明治22年12月9日歿、行年8歳9ヶ月)

山邊清亮：山邊家第十代、丈夫の嗣子(大正9年11月17日、森鷗外を訪問) 島津斉彬：1809-1858、幕末の薩摩藩主。蘭学に通じた開明論者。わが国西洋式紡績業の嚆矢。英國から紡機三千錘を輸入。

松方正義：1835-1924、薩摩藩出身、金本位の実施など、日本資本主義の発展に尽力。

英國より輸入した紡績機械を大阪、岡山、奈良、愛知、宮城、栃木、広島に配布したが、不成功に終った。

森林太郎：1862-1922、森鷗外、小説家・翻訳家・評論家、軍医。

磯野惟秋：1862-1933、書家、大阪の人。次に地名を拾い出してみますと：大阪、石見國津和野、東京、倫敦(ロンドン)、三軒家、須磨、阿倍野、大阪、岡山、奈良、愛知、宮城、栃木、廣島会社名では：大阪紡績會社、大阪織布會社、三重紡績會社、東洋紡績會社他の資料も参考に、山邊丈夫の経歴を年表にして重ね合わせてみると：嘉永4年12月8日(1851)：山邊丈夫生れる明治3年(1870)：丈夫、上京、西周、福沢諭吉などに洋学を学ぶ明治13年(1880)：丈夫、英國より帰国、渋沢と大阪紡績會社設立計画明治15年(1882)：三軒家工場、大阪藤田組が竣工、明治16年(1883)：大阪紡績創立総会、操業開始、工務支配人に就任明治22年12月9日(1899)：山邊丈夫長男、龍一歿、行年8歳9ヶ月明治23年(1900)：併合大阪織布會社明治25年(1903)：三軒家工場大火、死者95人(三軒家東四丁目の「地蔵院」には、犠牲者の合同慰靈碑がある) 明治28年(1905)：取締役兼工務長明治31年(1908)：松本重太郎の後を継いで社長に就任明治33年(1910)：大日本紡績聯合會委員長

明治35年(1912)：緑授章を賜る大正3年(1914)

4)：大阪紡績・三重紡績合併、東洋紡績株式会社創立大正4年(1915)：丈夫従五位を賜る。(鷗外「最後の一句」を発表) 大正5年(1916)：東洋紡績社長を辞任、相談役となる大正9年(1920)：5月14日病歿、享年70、阿倍野に埋葬される(この時、鷗外58歳)「大正9年11月17日 山邊清亮始来見。

清亮丈夫之嗣子也。」(鷗外晩年の日記「委蛇録」)

1923年(大正12年) 鷗外死去こうして漢学の素養のない者でも分かる固有名詞を拾い出して見るだけで、森鷗外が撰した難しい漢文から、山邊丈夫と森 鷗外との関係が彷彿としてくるようです。

2人は同郷のよしみで、若き日より交流があったそうです。

森 鷗外は山邊丈夫よりも11歳若い津和野の後輩です。丈夫が亡くなつて、2年後に鷗外も亡くなります。

丈夫が70歳で亡くなつたとき、鷗外は58歳でした。

鷗外が撰した山邊の碑文が公開された1923年(大正12年)には、鷗外も死去していました。ただ、気にかかるのは、8歳9ヶ月で亡くなつたという長男龍一の墓の異様な立派さです。

鷗外の碑文には、「龍一天」の三字で記念されておりますが、なにか悲劇的なものが感じられるではありませんか。調べてみると次のような説明を見つけました。

「明治21年、まだ大阪紡績に勤めていた頃、ひとり息子の龍一(当時8歳、三軒家小学校3年生)が父の後についてきて工場に入り、着物の裾が機械に触れ、あっという間もなく巻き込まれて惨死した。

龍一はとても賢い少年で、子煩惱の丈夫は悲嘆にくれ、しばし放心状態だった。

彼が生涯背広の内ポケットに数珠を入れていたのはこのためだ。

明治23年、丈夫は三軒家小学校(現:三軒家東小学校)に「龍一教室」と名づけた二階建ての建物を寄贈、図書室や実験室として利用してもらうことにした。

また、金250円也を寄付し、恵まれない子供たちに学用品を与えて供養に代えた。」

(「大阪人物辞典」三善貞司編清文堂また、「わがまち大正」(大正区制60周年記念事業委員会、平成4年発行)には、こうあります。

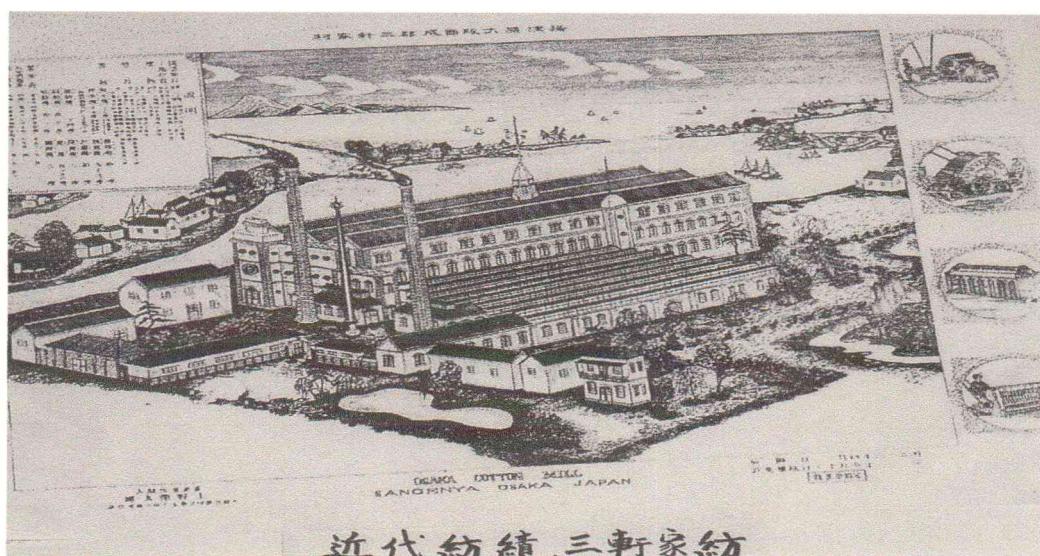
「...（龍一は）黄八丈の長いたもとのついた着物を着て遊んでいるうちに、そでから体全体を紡機のベルトに巻き込まれ、惨死する悲劇が起きた。

山邊は工場に入るなといい聞かせていたが、自由に出入りし遊んでいたらしい。

葬儀は三軒家始まって以来の立派なもので、岩崎の火葬場へ先頭が着いたとき、しんがりはまだ自宅前だったという。山邊は、愛児の死を悼んで、明治23年新築2階建ての龍一教室(13.5坪、44.6m<sup>2</sup>)を三軒家小学校(現在の三軒家東小学校)に寄付、さらに250円を差し出し、恵まれない子供たちの教科書購入費に充てさせた。

龍一教室は同44年3月、山邊からの寄付金800円で改築された。....」「紡績工業の父」山邊丈夫はまた火災用救命具、自動消火装置、防火建築の分野においても知られている。

山邊が防災に留意したのは、三軒家工場の大惨事を経験した反省からであった。



# 大阪ドイツ俘虜収容所の研究

西村東一

大正2年（1914年）第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟に基づき参戦しました。日本は中国の青島でドイツ軍と戦い、その結果ドイツ人など約4700名を捕虜としました。

その際、日本軍の神尾青島攻囲軍司令官（作家有島武郎の岳父）はヴァルデック青島総督に、「日本軍がドイツ陸軍より受けたこれまでの指導について謝意を述べた後、日本は政策上、不本意ながら青島を攻撃したことと、日本側に多大の損失が出るほどドイツ車の防備の優れていたこと」を語り、一方、総督は日本側の武勇を称えたと言われています。

彼らを収容するため、国内十二箇所に捕虜収容所が設置されましたが、大阪においては大正区（当時は西区）南恩加島にあった、「北の大火」（明治42年の罹災市民の収容施設を「大阪俘虜収容所」として使用し、軍人など760名を収容しました。

収容者の一人に、神戸のバウムクーヘン製造で有名なカール・ユーハイムもいました。

建物は平屋建て21棟の木造日本家屋で、一棟を十室に区画し、将校は一室に一人、下士卒等は2～4人の割合で収容されました。各室は畳敷きでしたが、厨は西洋式に改造され、建物の内外には230個のぼんぼりが点じられました。

調理は整った調理場での自炊で、食事内容も欧洲人の栄養所要量を十分満たすとともに、高い評価を受けていました。

捕虜に対する扱いは、日本が近代国家の仲間入りをするためにハーグ条約の遵守に努め、峻厳さとともに寛容さを示しました。

捕虜は収容所にあっては、朝夕2回の点呼を受ける以外の労働は特になく、娯楽として読書、絵画、園芸、演劇、音楽、スポーツ（テニス、サッカー、器械体操等）などを楽しみました。

大正 6 年（1917 年）大阪俘虜収容所は閉鎖され、似島（広島市南区）へ移転しました。翌年ヴェルサイユ講和条約が提携され、捕虜は本国に帰還することになり、大正 9 年（1920 年）にはすべての捕虜収容所が閉鎖されました。

しかし解放後も日本に永住を希望し、日本に留まった者も少なからずおり、日本におけるドイツ文化の発展に寄与しました。



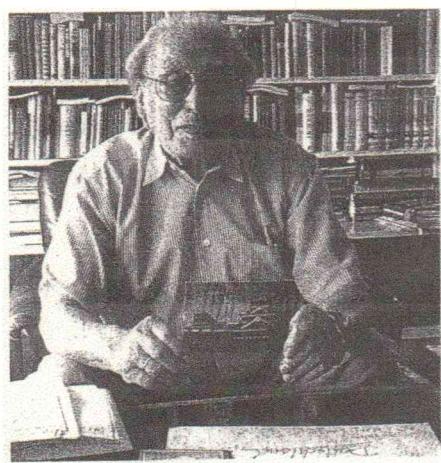
大阪平尾俘虜収容所



サッカーチーム

## ドイツに届いた友好の輪

松田邦雄



Karl Lange liest gern die Postkarten, Briefe und Faxe von Hiroshi Fujii aus Japan. (Foto: nick)

今、大阪市大正区はドイツ文化の花盛り！大正区とドイツのつながりのきっかけは3年前、たまたま毎日新聞（1894年6月）のドイツ在住の写真家藤井寛氏の日独交流への寄与の記事と、『毎日グラフ』に載った「新発掘、知られざる70年前の俘虜収容所脱走もあった、ドイツ兵の大坂収容所アルバム」（1984年11月）を目に

にしたことです。

グラフには、多数のドイツ人俘虜の生々とした写真と収容所生活が記載されていました。

このグラフを見た時は、今まで聞いた事の無い話、それが我が大正区にと、驚きと感動の連続でした。

90年前の第一次大戦の話ですから、歴史に造詣の深い西村東一区長に相談すると、「町おこしになるかもしれない、プロジェクトを組んでみましょう」と約束。

鳴門市ドイツ館の田村一郎館長も沢山の写真や資料を提供して下さいました。

西村区長の抜群の実行力により、「大正区の歴史を語る会」結成と出版、海の時空館での「懐かしい大正区の風景展」を開催。大阪俘虜収容所跡地近くでの史跡碑設置には、ドイツ総領事代行も参加してくれました。

「大正ドイツ友好の会」結成、ドイツ俘虜写真展、田村ドイツ館館長のあいさつやその後の堀田大阪市史編纂所長のドイツ俘虜の講演会、西村区長を座長とする大阪俘虜研究会の発足、西村区長の歴史講演会、大正歴史ガイド養成、6ヶ月講習と認定証の授与、さらにはベートーヴェン「第九」日本初演の指揮者ハンゼンが大阪俘虜収容所にいたという縁での大正「第九」合唱団の結成と、ドイツ俘虜が広島似島へ移動した2月18日を選び、大阪市長、ドイツ総領事夫人を迎えて第九合唱団発表会も行われました。

大正区ではドイツ文化センターの御協力を得てドイツ文化を探るセミナーも6回開かれました。

そんななか、ドイツの藤井氏からドイツ俘虜の故郷、歴史、交流に来てみませんかとの誘いがあり、西村大正区長のメッセージを携え出発しました。

フランクフルトから車で約4時間、ホルテンの町に捕虜だったシューアマン氏の生家を訪ねました。事前に約束していたカールランゲ氏とお会いでき、新たな事実もわかりました。

日本で生活していた捕虜が祖國に手紙を出すことがしばしばあつたらしく、その時の様子を知る親族のノースホーゲル氏を探し当て紹介してくださいました。

ノースホーゲル氏は、父親がシューアマン氏と幼い時から仲良しだったことや、よく遊んだ子どもの頃の話、日本で捕虜になった当時の手紙のことなどを、まるで昨日の出来事のように語ってくれました。

「手紙には『サッカーや遊びで捕虜らしくない生活ぶり』だったと書いてあり、戦争で負けた俘虜としての身分にしてはそぐわない日本での生活ぶりを、子どもである自分に伝えてくれました。

在りし日の日本での生活は悲しいものでなかったという内容に、父は生き残り、シューアマン氏ははるか遠い日本で23年の短い再涯を閉じた（大阪俘虜収容所から移った似島でスペイン風邪のため死亡）ことの無念さからも少しは救われたであろうとうかがえました」と、父親から聞いた話を懐かしそうに語ってくれました。

「日本での俘虜収容所での扱いが今日のドイツとの関係に信頼関係だけでなく、90年過ぎた今も、史跡碑建立など、ドイツ人を想う友好事業を行いたててくださることに感激し、日本の大正区が歴史的な事実を受け入れていることをドイツの歴史に残しておきたいと思います。」

カールランゲ氏の言葉を聞きながら、涙の出る思いでした。異国で亡くなった若いドイツ人の魂が両国で生き続けているようで、寂しく逝った異国での死が決して忘れられないことを、シューアマン氏の墓前で報告し、私は冥福を深く祈りました。

シューアマン氏の生家は、現在ペンションになっており、そこで二泊している時、ドイツの新聞“新ルールライン新報”に西村大正区長の友好メッセージが掲載されたことを知り、日本の大正区に史跡碑が建立されたこと、ドイツ人俘虜は日本に多くの文化をもたらし、サッカーもその一つであること、そして今日でも日本の人々はドイツ人俘虜に敬意の気持ちを忘れていないことなどが報じられていました。

大正区についての新聞記事を見ながら胸が熱くなりました。

その後、リューネブルク（徳島県鳴門市の交流都市・リューネブルク居住の市民が鳴門市にあった収容所にいたことから）に行き、リューネブルク市長に西村区長の友好メッセージを託し、ゲバル会長が1450年代の不朽の名作建築物が建ち並ぶリューネブルクの街を案内してくださいました。

町の美しさは素晴らしい花もいっぱい咲き、建物と自然の調和がバランスもよく感激しました。

町案内だけでなく、友好の証のメッセージをくださり大正区にお土産をもって帰れるような心境になり、思わず頬がゆるみました。

この時期の6月からドイツ全国一斉に、「ドイツ俘虜物語・バルトの楽園」が封切られていきました。

一人の日本の軍人が、陸軍省から俘虜の扱いが生ぬるいと批判され、悩みながらも人間としての誇りを失わないよう尽力する姿や夫を支える妻を凜々しく描いた映画は、戦争も民族も超え、未来を見据えながら互いに何が交流できるのか考える松江所長の姿がドイツ人にどんな風に映るのか、反響が大きいことを聞き、憎しみを持たない人間性を構築する難しさと大切さを思い、人類は一つ、平和ほど有り難いことはないとつくづく思いました。

まるで私がドイツを訪れたタイミングに合わせて封切りをしてくれたようで、映画を通じても日本とドイツの親善交流を行えました。

藤井寛氏、カールランゲ氏やフォルカゲバル氏が事前に関係者を探してくださいり、感謝でいっぱいでしたが、日本

とかかわりのあるドイツ在住の方や、多くのドイツ人と交流がでいきたことも意義深く、心温まるおもてなしに感激することしばしば、大切な思い出ができ人生の財産となりました。

おまけに家庭料理までもご馳走になり、ドイツの食生活だけでなく、ドイツ人の気質を肌で感じ、知識で知っていたドイツ人とはまた違う一面も発見し、人間の面白さに出会うことができました。

南恩加島にあった俘虜収容所の史実の公表から始まった大正とドイツの友好事業によせる区長等の熱意を感じながら、大正ドイツ友好の会会員として、今後もこの事業がさまざまな形で継続し、その際は、ドイツで経験したことや感じたことを発揮できればと思っています。

好奇心いっぱいの歴史をよみがえらせる短い旅ではありましたが、日本文化とドイツ文化を語り合える時間が持て、言葉は通じなくても表情で会話が出来、関係者の方々の笑顔あふれる歓迎が非常に嬉しく、そして楽しい旅でした。

ゲーテの館、ベートーヴェンやショパン他、有名作曲家の生家や演奏した場所も訪ね、その後はハンブルグ、ベルリンを回り、文化芸術の豊かな国だということを改めて思うとともに、日本祭りもあり、花火も華やかな国ドイツに壮大なロマンを感じる旅となりました。

お世話になりましたドイツの方々はもちろんのこと、史実の公表でドイツ訪問のきっかけとなり、日独交流を撮り続ける藤井カメラマンがドイツ関係者への橋渡しをしてくださり、地域から国際交流を生み出す入り口に立てたことを偉せに思います。

心からお礼申しあげます。

(『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第5号より転載。  
一部訂正。)

大正区長殿  
拝啓

本日藤井寛氏と視察員の松田邦雄氏がご夫人と妹さんをつれて訪問され、我々は大変うれしく思っています。

今回のご訪問のきっかけは、ホルテン地区出身の元戦争捕虜のフリッツ・シュアマンが第一次世界大戦中の1914年から19年まで大阪、似島の捕虜収容所に抑留され、似島でなくなったことを思い出すためということでした。

彼の遺骨は貴国の寛大な処置により、当地に埋葬されたとはいいうものの、大正区民の市民の皆様に伝統を重んじる気持ちが深く根ざしております、何10年もの時を越え、当時の兵士たちのことを回顧してくださることがなければ、フリッツ・シュアマンは彼の故郷の地ではとうに忘れ去られてしまっていたことでしょう。

大正区の皆様が、来年も晴れやかなコンサートを通じて、この事実を風化させないというだけでなく、同時に両国の人間の相互理解にも貢献しようとしていることを知り、我々はますます感謝の念を強くしております。

2007年5月29日、 オーバーハウゼン  
カール・ランゲ  
ケーテ・ランゲ



## ドイツ俘虜収容所アラカルト

松田邦雄

江戸時代の新田開発の波に乗って文化12年町人請負新田として岡島嘉平次が開拓し、代官岸本武太夫が許可し岡島新田と名づけられました。亥の年に開かれたので亥開と名づけられたのです。南恩加島東公園は地元の要望により、平尾亥開公園と改名されました。

明治41年3月に府立木津川隔離所が竣工されましたが、それは関西で大流行したベスト病に対する隔離施設でした。明治42年7月に天満を火元とする北の大火灾があり、罹災者の救援活動の拠点として木津川隔離所が転用されました。木津川収容所では、69日間に延べ22,000人を収容し、健康管理、職業斡旋、寄付の收受、身元確認調査等、救済に全力を尽くしました。又、所内北棟を改造した木津川学園並びに木津川幼稚園も開園しました。第一次世界大戦が始まり、大正3年9月日英同盟の英國軍と共に日本軍は、中国青島のドイツ軍基地を攻撃し勝利を治めました。ドイツ軍は4,600人が俘虜になり、日本各地の収容所に護送されました。その一つが大阪の平尾収容所であり、467名の俘虜はジュネーブ条約のもとに保護され、ミュンデル少佐を筆頭に将校22名、下士官兵隊445名、2年有余の収容所生活をおくりました。大正3年11月15日の事です。厳しい環境の中で音楽、合唱に、演劇に、料理に、スポーツに情熱を燃やし、日本人にも良い影響を与え、先進国の立派さを目の当たりにしました。

大正区民とも交流を図り相互の交流に役立ちました。残念な事に火災が発生し、収容所全員が広島県の似島に移る事態になり、大正6年2月に閉鎖されました。

ドイツとの交流を記念に、歴史に残すべく記念碑を建立して永久に保存しています。

## 大正区と似島を結ぶ俘虜収容所 杉井 勇

平成19年5月頃に私の大正区時代の友人で「大正まち案内人協会」・「大正歴史を語る会」のメンバーの山口氏から広島市南区の似島のことを電話で聞かれ、大正区で俘虜収容所の研究が行われていることを初めて知り、大正区にいたドイツ人俘虜達が広島市南区の似島に移送されたことを聞きました。

私は、昭和28年に広島県の能美島（似島の先にある江田島と陸続きの島）から大阪市住吉区へ転居し、さらに、昭和32年の冬、大正区に転居し、昭和49年3月までの幼年時代から青春時代までを大阪で過ごしました。

大正区に住んでいたときには、泉尾東小学校、大正中央中学校、泉尾高校に通学しました。

しかし、大正区に俘虜収容所があったことは学校で一度も習ったことはありませんでした。似島俘虜収容所のことは、以前、地元の新広島テレビの番組で見たことがあり、その時の知識しかありませんでした。

そして、俘虜収容所のことはすっかり忘れていましたが、平成20年5月25日に仕事で京都に行った帰りに、大阪に寄り、久しぶりに山口氏に電話をしたところ病気で済生会泉尾病院に入院していることを知り、見舞いに行きました。その時に、「大阪俘虜収容所の研究」を頂きました。

私は、広島市役所に在籍していますので、この価値のある貴重な資料を早速、かつて、勤務していた広島市立中央図書館、中央図書館時代の部下がいる広島市公文書館、似島俘虜収容所があった南区役所と似島公民館、そして、秋葉広島市長に山口氏から頂いた添書を付けて、寄贈しました。

そして、秘書課を通じて、広島市長からは「本書を編集するに当たって関係者の皆様は大変な御苦労をされたのではないかと思います。

皆様に敬意を表しますと共に、後世に伝える貴重な資料として十分活用させていただきます。」

とのメッセージを記載した札状を預かり、その他の令状とともに山口氏に送付しました。

また、私が学生時代からのファンで北一輝、三島由紀夫をはじめ、文学、政治思想、宗教に造詣が深く、幕末から近代の日本を論じた硬派の本を数多く書いておられ、明治維新の年（1868年）に島根県隱岐島で起こった事件「隱岐騒動」を19歳の時に一人で島に渡り、調べあげ、パリコミューンよりも前に、「隱岐島コムニーン」と称されるべきである島民の自治政府があったことを再評価し、世の中に紹介された「平成の司馬遼太郎」とも称される評論家で麗澤大学大学院教授の松本健一先生にも寄贈しました。

松本先生からは「大阪俘虜収容所の研究」ありがとうございました。

今後の研究に活かしますとのお手紙をいただきました。なお、隱岐島では、松本先生や地元の若者達の呼びかけで平成6年の秋に「隱岐学セミナー」が始まりました。

次に、広島でも昨年4月に小説「頼山陽」で第27回新田次郎文学賞を受賞した見延典子先生に寄贈しました。

札幌市出身の見延先生は似島に俘虜収容所があったことは知らなかったとのことでしたが、大変興味を示されました。

今後は頼山陽以後の幕末、明治、大正の広島を舞台にした歴史小説を書きたいと述べておられましたので、「大阪俘虜収容所の研究」は小説の参考になると思います。

なお、頼山陽は大阪の肥後橋付近で生まれており、母・梅颺は大阪の商家の出で、大阪で塾を開いていた山陽の父春水と知り合い結婚し、春水が広島藩の藩儒に迎えられ、広島にきました。

山口氏から頂いた「大阪俘虜収容所の研究」をこのような方々に、寄贈することにより、広島でも似島俘虜収容所の研究が行われることを期待しています。

広島市には似島俘虜収容所に関する公文書はなく、似島在住で「似島郷土史編集委員会」事務局長の宮崎佳都夫氏の「似島の口伝と史実（一）島の成り立ちと歩み」という本に似島俘虜収容所のことが書かれているだけです。

なお、広島市とドイツのハノーバー市とは姉妹都市の関係にあり、昨年は姉妹都市提携25年となり、ハノーバー市長が来られました。

同市長は平和市長会議（核兵器廃絶に向けて連帶する世界各国の都市で構成された団体で、1982年に広島・長崎両市が中心になって創設。世界133カ国・地域2536都市が加盟。）の副議長でもあります。

また、JR広島駅から広島の海の玄関口である広島港（宇品港）や世界遺産の宮島のある宮島口まで路面電車が走っていますが、この路面電車の車両にはドイツ製の車両もあります。

この路面電車を経営している広島電鉄の大田哲哉社長は広島商工会議所の会頭をされ、神戸市にあるドイツ総領事館の名誉領事もされています。

このように、広島市とドイツとは深い繋がりありドイツとの交流が続いています。

そこに、「大阪俘虜収容所の研究」を縁として、平松大阪市長の言われる都市間交流みたいな形で大阪市大正区と広島市南区とが連携し、さらに、官民一体となって「日独文化・平和交流事業」が展開されて行くことを期待します。



似島俘虜収容所

## ドイツ俘虜収容所の出版

満谷健作

平成16年から大正区のまちづくりの一環として、区の歴史の再発見が行われ、その中で、大正3年から大正6年の間大正区に設置された「大阪俘虜収容所」が浮上し、平尾亥開公園にモニュメントが設置されました。関連する事業として、区民による「第九合唱」が平成19年2月以来毎年行われています。

平成19年5月に「大阪俘虜研究会」が結成され、大阪市史編纂所の堀田暁生所長を中心に研究が進められ、翌年3月末にその成果を「大阪俘虜収容所の研究」一大正区にあった第一次大戦下のドイツ兵収容所一にまとめ発刊されました。

私はその中で、新聞記事集成（当時の大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、大阪時事新報よりドイツ俘虜に関する記事を抜粋したもの）の復刻作業を担当致しました。

研究会のメンバーの方々が、市立中央図書館所蔵の当時の新聞のマイクロフィルムを丹念に読み、ドイツ俘虜関係の記事を選び、コピーをし、原稿としました。マイクロフィルムの保存状況が悪く、拡大コピーにしても、不鮮明で、解読には、大変苦労致しました。

翻刻に当たっては、拡大鏡、漢和辞書、国語辞書が必要品でした。私は、印刷業を永年の生業としていますので、原稿を読み解くのは、他の人よりは慣れていると多少自負していましたが、その自信は、見事に打ち下されてしまいました。僅か数行が読めずに、漢和辞典を引き、国語辞典を引き、悪戦苦闘をしました。旧字体の漢字、多用される漢語、旧仮名遣い、等わずか90年前の日本語の文章が、すらすらと読みこなせないとは情けなくなり、しばしば自

信喪失に陥りました。

楽しいこともありました。当時の新聞記事を読んでいると、列強に伍して、世界に羽ばたこうとしている当時の日本の姿を文章から読み取れましたし、また青島を陥落させ、多数の捕虜を連行したことから、捕虜を見下し、揶揄する記事や、ドイツ人の国民性の素晴らしさをしっかりと理解し、優れた職業技術を真摯に学び取る必要性を論説する等、大変興味深い記事がありました。記事の中で、ユーバーシャール先生の記事を見つけて大変驚き、不思議な縁とも思われました。（同書 279P掲載 大正3年11月22日大阪朝日新聞、同281P掲載 大正3年11月26日大阪時事新報）先生は、私が、学生時代（1959年から1963年）甲南大学の教授をして居られ、一年生のとき、ドイツ語の初步をオーラルで、教えて頂きました。先生は当時既に70歳を超えておられたと思われますが、長身で、大きな声で、90分の講義をされ、大声で、言うことを聞かないわんぱく学生を相手に、授業をして居られました。大学の名物教授の一人として、今でも同窓会の集りでは、必ずユーバーシャール先生の思い出話が誰からともなく、飛び出し、在りし日の先生のお姿を思いだしております。

この記事を見つけて、すぐに当時のユーバーシャール先生ドイツ語の授業の助手を務められた西田教授にご連絡を取ろうと大学に訊ねましたが、誠に残念なことに数ヶ月前にご逝去されており、お話を聞くことが出来ませんでした。また社団法人大阪日独協会の会員には、ユーバーシャール先生の大坂高等医学校時代の教え子の方が居られるとお聞きし、総会の折りに訊ねましたが、最近は、ご高齢のため、ご出席されることが少ないと聞きました。

何れにせよ私が、大正区にドイツ俘虜収容所があったことを知り、もっと早く関心を持っていたなら、いろんな事が判ったのにと、残念に思っています。

## 第九初演の地

ドイツ在住・写真家 藤井 寛

毎年2月に行われる、大正区・ベートーベン「第九」演奏会に、合唱団のバスで参加させて戴いている。

今年で3回目だが、大正区民で構成される合唱団のレベルは高まる一方。唱い終えた後の満足感はたとえようもない。

そして、その度に頭の中を駆けめぐるのは、「第九」初演の地が、大阪の大正区であったらという夢想である。

歴史にイフ(もしも… )は無い、とよく言われる。だとすれば、私の夢は単に夢物語にすぎず、現実になる可能性は皆無なのだろうか。日本での「第九初演」は、四国・鳴門市にあった「板東収容所」で、ドイツ俘虜によってとされている。1918(大正7)年6月1日のことだった。

この日を記念し鳴門市では「鳴門の第九」と題し、20年以上もコンサートを毎年開催している。

2006年度公開の映画「バルトの学園」のロケ地となつた、元収容所の跡地周辺には「第九初演の地・鳴門」の旗や看板が現在もなお至るところにみられる。

私が夢想するのは、大正区の主要幹線道路に「第九初演の地・大阪市大正区」の旗や看板が、多数見受けられる様子なのだ。

鳴門市で見かけたのと同じ風景を夢見ていると考へて戴きたい。では、構想が現実化する根拠は存在するのか? 「ある」と強く主張できる証拠をお見せしよう。板東収容所のオーケストラで「第九」を指揮した、ヘルマン・ハンゼン兵曹が俘虜となって最初に入所したのが、大阪収容所だったからである。

各収容所とも例外なく俘虜の出入りが激しく、大阪収容所だけでも何10回も受け入れと退所を繰り返している。

ハンゼン所属の部隊は、短期滞在した大阪から、徳島・板東と三カ所の収容所を転々とした。大阪から徳島へは200名以上の大部隊で移動、徳島収容所で発行された、俘虜の手記による「徳島新聞」にハンゼンの音楽活動が活発だと称賛する記事が掲載されている。

ということは、大阪から移動した部隊だけで、かなり大

がかりなコンサートが行われたことになる、残された写真でも、多数の楽団員の中央で、セーラー服を着こみ、指揮然としたハンゼンの姿があった。

その後、移動した板東収容所では、久留米他から移ってきた楽団員を吸収し、「第九」初演の指揮者として歴史に名を残すこととなった。

大阪にも残留した俘虜だけの小オーケストラが存在した、もし、ハンゼン所属の部隊がそのまま残ったとすれば、残留楽団員と共に「第九」を手がけるチャンスはあったハズである。

板東収容所では不足する楽器のパート部分を他の楽器で代用したり、苦労しながらも工夫をかさねて演奏をやってのけた実績を見逃してはならない。

もし移動せず大阪に留まっていたら、500人から一時は700人以上も収容されていた俘虜より、楽団員を選抜する機会は思いのほか、多かったのではないか。大阪での残された写真には、男声合唱団の存在も確認できる。

合唱での女性のパートは、板東収容所でも男性俘虜で間に合わせているし、大阪でも全楽章を演奏するチカラはあったと考えるが当然だろう。

「第九初演の地・大正区」は夢でなくかなり高い確率で実現できたらうと確信する根拠はここにある。収容所があった四国丸亀でも「第九」のコンサート開催準備があると聞いた。

ドイツ兵俘虜収容所がかかってあった縁で、新たに「第九」コンサートが行われる地域は今後も増えるだろう、板東収容所に次いで二番目の「第九」演奏会を行った大阪大正区の市民の方々や、区役所の関係者の皆さん之力添えがあればこそその快挙と、私は熱い想いで合唱に参加している。

正直に書けば、ドイツでの知人友人に、この話をしても、ピンとくる人は多くない。アマチュアがドイツ語を原語のまま合唱しているなんて、と驚くのである。

まして約100年も前の俘虜収容所がきっかけで、となるとなおさら合点がいかないらしい。そっちがそうなら、今後も大正区の合唱団が練習を重ねて、ドイツ「第九」を唱いまくるという夢を見てもよさそうな気がしてくる。

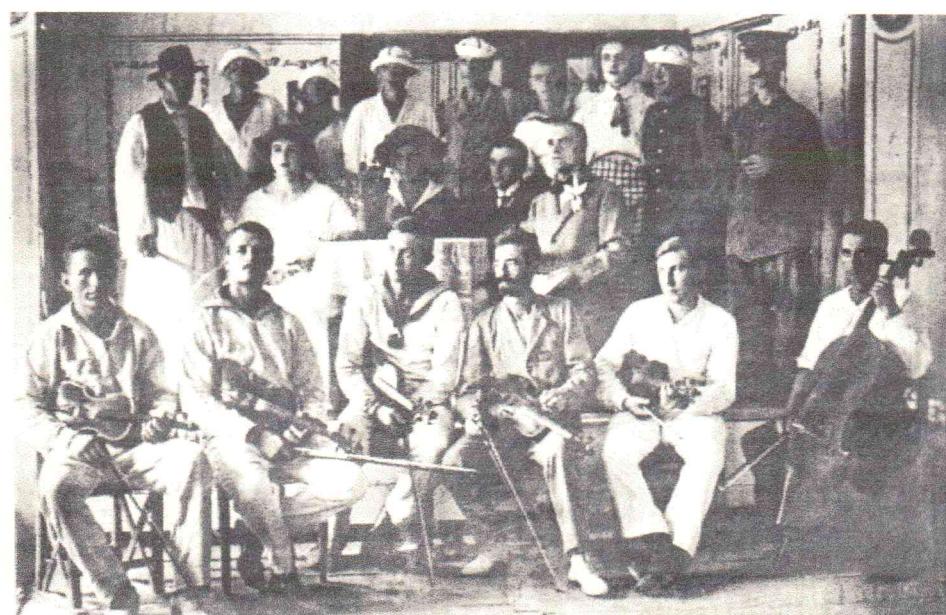
来年も楽しい夢を見させて下さい。

83年の毎日グラフをまち案内人協会の松田代表がさがしてくれなければ、又、西村前区長に逢わなければ、今日のドイツ交流の話も無かったのかと感無量に感じます。

大正区文化の堂々の発展を記念致しまして筆を終える事にします。



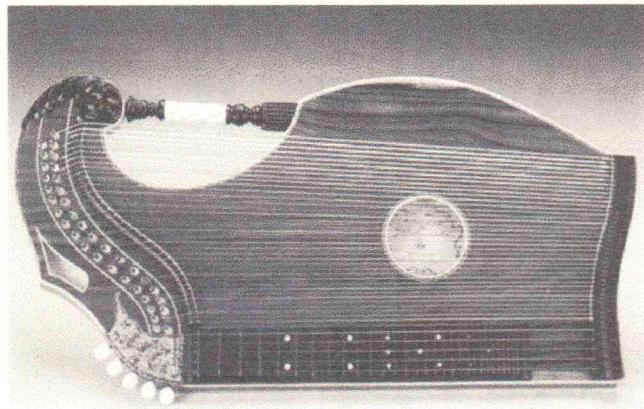
オーケストラ



芝居・オーケストラ

## チター初演の地

山下好子



“さよなら、さよなら』おじさんでお馴染だった映画ジャーナリストの淀川長治氏が、映画の教科書として位置づけた名画、キャロル・リード監督の『第三の男』。

映画の冒頭にチター（楽器）がスクリーンいっぱいに映し出され、アントン・カラスが演奏するテーマ曲が流れて始まる。1949年に上演され世界的な大ヒットとなり、数ある有名な賞をいくつも受賞している。

大正8年3月に広島で撮られた、ドイツ人捕虜のオーケストラの記念写真の中に、バイオリンを持つエアハルトさんとチターを持つ三人の捕虜が写っていた。

あと数枚チターを演奏する捕虜の写真がエアハルト・アルバムの中にある。

アルバムの持ち主であるフォト・ジャーナリストの藤井寛氏は、大阪収容所でも弾いていたことは間違いないと話されていた。

チターの写真を見ていると、映画のスリリングな場面と雑ぜるようなアントン・カラスの演奏、スクリーンから放つ光と影…霞のような記憶のかなたから再び浮あがって近づいて来るようだ。

## 日本最初の木津川飛行場 松田邦雄

人類の夢は果てしない大空を飛ぶ鳥人へ、夢を追い夢に挑む、新しい空の時代の幕開けが日本で始めての大坂木津川空港で始まった。

明治 15 年（1882）ライト兄弟の初飛行、リンドバーグの大西洋横断飛行、日本では明治 3 年（1870）二宮忠八の玉虫飛行機が飛んでいる。大正 12 年（1923）4 月、場所は大正区船町、木津川尻埋立地十万坪を整地、木津川沿いに長さ 850m、幅 450m、周囲には農林省倉庫郡 10 棟、中山製鋼、藤永田造船、北側には大阪鉄工、日本人造肥料、日本鋼管、南国人造肥料の工場群が立ち並ぶ中で、煙突が 48 本も煙を出していました。この飛行場は旧川西航空機の創立者川西清兵衛氏が民間定期航空を意気込んで作りました。大阪駅から 10 km と距離は近かったのですが、島の中のため市電南恩加島町駅から降りて渡船に乗り換え、降りて歩いて 10 分という不便さでもありました。最初は格納庫一棟、水上吊り上げ用レール付クレーンが設置され、クレーンで飛行機を吊り上げ移動して木津川に運び飛行するというものでした。乗客定員 4 名を職員がツナギ作業服の手足をめくって、川の中を乗客を背負い飛行機に乗せました。

日本航空輸送会社が資本金一千万円で設立、オランダのフォツカ一機三機で輸送を始めました。初代の飛行場長は通信省の佐々木航空官、日本輸送所長は、民間空港の立役者、井上長一氏、名実ともに東洋一で日本最初のエアポート大阪国際空港として発足しました。

スタートは大阪—高松—松山間、料金 30 円でした。ついで、大阪—福岡間、大阪—東京間が整備され、1924 年には日本一周飛行が行われました。時速 133 km、行程 4,295 km、時間 33 時間 48 分でした。

昭和 13 年（1938）の統計資料によると、年間発着回数は約 8,800 回で、年間旅客数は約一万人となっております。

海外では、大阪—大連間（料金 115 円）、大阪—上海間、

大阪一京城間がありました。大連行きは、福岡一釜山一京城一平壤一大連と四回乗り換えました。

大阪 11 時発、大連到着は翌日 17 時という遠大なものでした。当時の残された写真には、大阪国際空港、大阪気象台支所の看板も見えます。

昭和 9 年（1934）には一般公募された我が国初めてのエアーガール（スチュワーデス）の着物姿も見え、日本最初のエアーガールが大正で誕生したことになります。

空港を利用した会社は、日本航空輸送・日本航空・東西定期航空・日本郵便輸送・日本国内航空・西田飛行機研究所・日本飛行学校です。使用された飛行機はオランダフォツカ機、川西式 K - 五型水上輸送機、川西式 K - 六型、K - 七型、K - 八型義勇軍輸送機、サルムゾン機、ブランデルブルグ機、グラマンマラード、サザンプトン飛行艇遊覧機等でした。異も複葉の二枚から一救半单葉機と変り、マイ 8. 260 馬力、翼はゲッチングン 420 、張り線の無い翼となりました。

水陸両用機もありました。大阪では第一回飛行大会、第二回飛行大会、女性飛行士大会・、ナイルス氏の曲芸飛行、スミス夫妻の夜間宙返り飛行、大西洋横断で世界的に有名なリンドバーグ氏、映画「翼よ、あれがパリの灯だ」も木津川空港に立ち寄りました。

室戸台風の時には大阪市長の関一氏も被害状況視察のため、木津川飛行場から飛び立っています。

大阪名物小鯛雀寿司も大好評のようでした。空港に到着予定が告げられると大勢の市民が鈴なりに見物に訪れました。

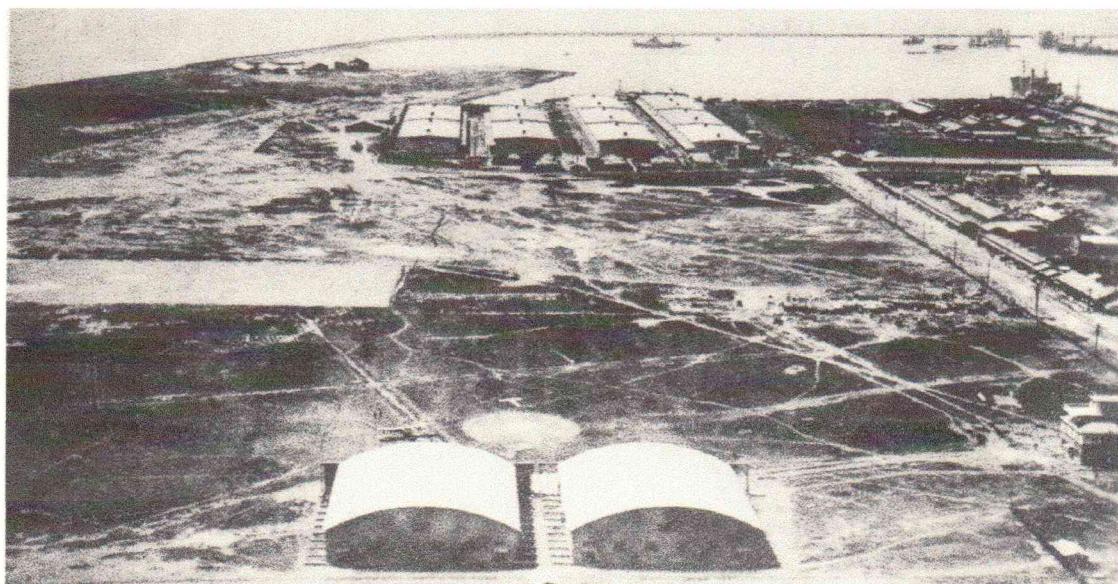
昭和 12 年（1937）可動式跳ね上げ橋・大船橋が完成し飛行場まで陸上から一直線で往来できるようになりました。大船橋の船の往来は一日千艘、跳ね上げ橋としては日本一の施設です。

飛行場は立地条件の悪さ、濃霧、48 本の煙突から出る煙の多さ、視界の悪さ、行き来する船への配慮、数件の事故も起こりました。世論の高まり、国際空港としての資質から、兵庫県伊丹に大阪第二空港として移転することとなりました。

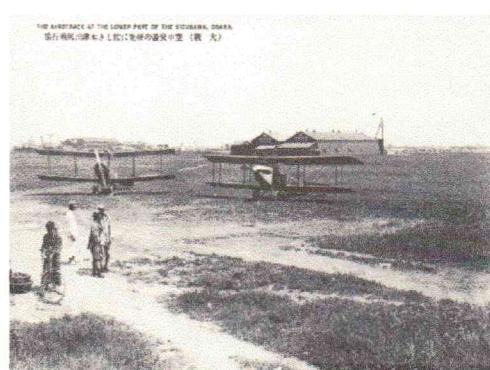
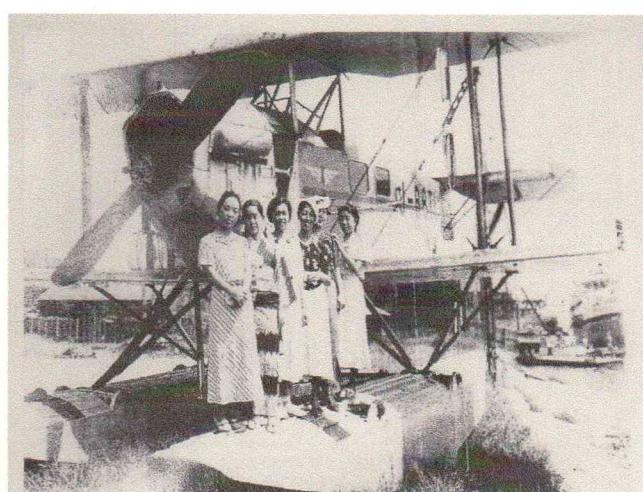
伊丹空港は昭和 16 年（1941）の開港です。東京羽

田空港が世界的に有名となって残っているのに対し、大阪木津川空港は跡形も無く消え去り、今は往時を偲ぶ歴史遺跡パネルが残るのみとなりました。中山製鋼工場内にはかまぼこ型屋根が、当時の格納庫がそのままに残り、歴史を語っています。

特記すべきは、太平洋横断飛行の王者、リンドバーグ氏が木津川飛行場へ着陸、パレードを行ったという事実が解りました。映画に脚色された「翼よ、あれがパリの灯だ」で世界中に知れ渡りました。大阪の雀寿司、小鯛寿司が気に入られ、アメリカ全土に紹介されました。



大阪木津川飛行場



日本初のエーガール

## 木津川飛行場のレコードホルダー 本郷良章



大阪を飛行機で往復した。  
池谷信三郎 横光利一 直木三十五 菊池寢

直木三十五 という名前は、かなり以前から記憶の中にある。叔母夫婦が、空堀商店街の北側、松屋町筋から東に上がった「お祓い筋」に面した所に住んでいて、物心がついた頃から母に手をひかれ、よく連れて行ってもらった。現在の住所地では中央区谷町六丁目だが、その当時は確か西賑町一丁目となっていた様に思う。あの辺り一帯は戦前の面影を色濃く残す町並みで、長屋あり、路地あり、坂道あり、石段あり、北に行けば榎木大明神の祠あり、南に行けば高津の宮さんあり、中間には松屋町筋から谷町筋に続く空堀商店街ありで、子供の遊び場には事欠かなかった。その榎木大明神の祠の近くに、高さ40cm程の小さな碑 いしぶみ があり、読めたのは小学校低学年になってからだが、『直木三十五 …… (点の箇所の漢字の読みを知らなかった)』と刻まれていた。

「三十五？なんのこっちゃ」、まさか人の名前（といつても、ペンネームだが）とは子供にはわからない。中高生となって、文学賞に「直木（三十五）賞」という大衆小説の金字塔があるのを知ってやっと気づいた。あそこに書いてあったのは、『直木三十五舊宅址（きゅうたくあと）』であったのだと。

調べると、出生地はもう少し東になるが、その生家のあった道筋が谷町筋の拡幅工事の為に無くなっていた。榎木大明神の祠にあった碑は、引越をして2回目に住んだ場所らしい。

この谷町筋界隈は、近くに「近松門左衛門」の墓があつたり、北に上がると本町通の手前に「井原西鶴」の終焉地が

あったり、南に下がると千日前通を越えた上汐町に「織田作之助」の出生地があつたり、結構 大阪の文学者発祥に貢献していると思うのだが・・・。

さて、前置きが長くなつたが 飛行場の件である。木津川飛行場については、父親が実際に見聞した事もあり、その話しなどを、幼い頃から聞いていたので知つてはいたし、学生時代に古書店 でみつけた大正時代発行の『大阪風記』にその概要と写真が載つていたので、あらかたの知識はあつた。

しかし、その飛行機を利用した乗客については知る由もなかつた。ところが先日、幼い頃遊んだあの空堀の地に近年開館した。「直木三十五記念館」に立ち寄つて、展示品を見て廻つていると、直木三十五が大の新しい物好きという一節が、眼にとまつた。

車にも興味をもつて早くから乗つっていたし、菊池寛と一緒に撮つた写真の背景に飛行機が写り、解説には”菊池が直木を見送りにきた”と書いてある、どうも東京の方の飛行場のようだ・・・・。

ひょっとしたらと思って、直木三十五が大阪について書いている作品を出来る限り調べてみた。

昭和5年に「大阪を歩く」という連載を夕刊大阪新聞に年末の12月から始めている。

年が変わって昭和6年の同じ新聞に「續 大阪を歩く」が連載され、そのふたつの連載の中に木津川飛行場に関する事柄が二編散見された。

それどころか、読み進むうちにわかつた事だが、時代小説家のくせに飛行機好きで、中古の飛行機を菊池寛と共有していたり、東京と大阪を何度も往復して搭乗レコード保持者でもあつた。

昭和5年の当時は、代表作「南国太平記」を執筆していた時期でもあるので、飛行機に乗つて「飛ぶ鳥を落とす勢い」であったのであろう。しかしこれを経ずして彼は亡くなる。昭和9年、齢43歳にして、飛行機に乗らずに天に昇ってしまった。文芸春秋の社主である友人の菊池寛は、夭折した彼の為にその名前を冠した文学賞を創設した、それが今にのこる『直木（三十五）賞』である。

# 日本初の蒸気船藤永田造船所

山下好子

元禄2年（1689）、大阪堂島船大工町に、船小屋「兵庫屋三十郎」が産声を上げた。

ロシア軍艦『ディアナ号』が大阪に来航した安政元年（1854）には、「兵庫屋」は紀州藩『御座船』を建造している。

幕末になり、「兵庫屋」が江之子島に移転した頃には、外国の蒸気船が姿を現すようになっていた。

明治元年（1868）には、オランダの「グラバー商会」の『スタンチ号』が、神戸一大阪間の定期航路に就航したのを始め、その翌年には、淀川でも小型蒸気船が、伏見一八軒家間に、定期就航するようになった。

そのようすを見ていた「兵庫屋」永田三十郎は、日本人の手で蒸気船を建造して、造船業の近代化を計ろうとした。明治2年（1869）、この時に偶然大阪にいたドイツ人技師セーガンを招いて、木造小型蒸気船の建造に着手した。

翌明治3年（1870）には、民間造船所初の西洋式外輪汽船『神速丸』を竣工させたのである。

「兵庫屋」のような伝統企業の近代化は特殊なもので、多くの造船業は、外人経営・日本人経営問わず、明治の中頃にはその姿を消していった。

明治に入ってから、白峰駿馬の経営した我国屈指の造船所と言われた、神奈川県の白峰造船所でも明治21年（1888）には、その名が見られない。

その後「兵庫屋」は、「藤永田造船所」と社名変更し、明治17年（1884）には木津川沿いの落合に船渠と機械工場を建設した。大正区にあった日本最古の民間造船所である。

現在の阪神ゴルフセンターの所にドックがあった。

船小屋「兵庫屋三十郎」誕生以来、1967年に企業としての競争力強化の為、三井造船に吸収合併されるまでの278年の歴史を持っていたのである。

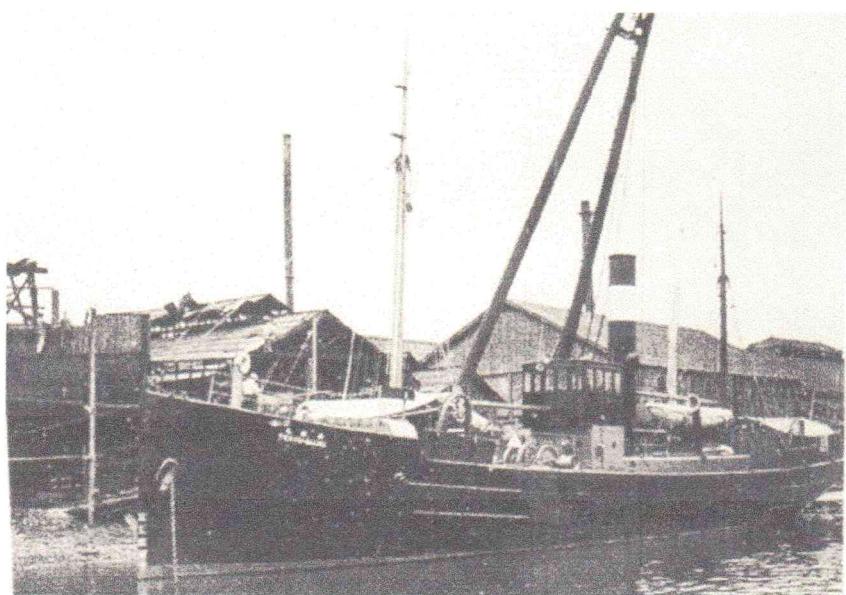
大阪人は人まかせやお上まかせにしないで、庶民や民間企業が労力を惜しまず、時には私財もなげうって、ものづくりを完成させるという気風がある。これがものづくりのまち大阪だ。

この原稿を作成中に、東大阪の中小企業の人たちが『まいど1号』というロケットを打ち上げたと、テレビの報道番組で大きく取り上げられた。

『まいど1号』という名前が、大阪人にとって、愛着がありとても可愛いのだ。

「兵庫屋」が278年の歴史を持つのは、大阪人の持つ、進取の気概の賜物と言えるのではないだろうか。

【参考文献】 『日本近代造船業の展開』井上洋一郎著 ミネルヴァ書房 1990年 222、3頁『大正区の近代』堀田 晓生著 大阪歴史学会 2002年 52頁



## 大阪シボレー物語

近藤正孝

現在、大阪ガス(株)導管機材センターとなっている。同社の社員の方にゼネラルモーターズがあったことを、知っていますかと訪ねると私は30年以上勤めているが、そんな話は、聞いたことがないと言う。その周辺は、工場地と新興住宅と市営住宅ばかりで、この地で生まれた人は見当たらない。そこで文献を調べた。それによると第一次大戦までは外車の輸入によって車の知識や技術の普及が始ったばかりで普及する環境は整っていなかったようである。

工業地帯、人口の集中などが進み、都市内や都市農村間の人や荷物輸送の必要性が高まり、大戦が起こり・戦争景気により、車を利用する度合いもふえ、外車価格も下がり、輸送費も手ごろになり、車は実用化された。

非能率的な牛馬車や人力車に変わったようになった。関東大震災は鉄道・私鉄・市電などは壊滅的な打撃を与え、物・人の輸送に数百台のトラック・バスが動員され、さらに大量の車がアメリカから輸入され都市の復興に性能を発揮し、車の価値の大きいことを実証する。国内の車に対する急激な需要の増加は、米国の自動車製造会社の認識を新たにし、車の販路に悩んでいたアメリカの各メーカーは日本に目を向けた。まず、フォード社が輸出していたが、完成車よりも日本で組み立てた方が有利と考え、東洋市場への本格的な進出を図り、乗用車、バス、貨物車のシャーシーであった。横浜に工場を建設して、組み立ては一日・200台、年間2千台の能力の工場であった。設立当時は、資本金400万円あったが、800万円に増資している。

一方ゼネラルモーターズ社は、これに対抗し、同社の輸出課員を日本へ派遣して日本に工場設立の活動を行いゼネラルモーターズ社は、フォードとの対抗上、また大阪市の勧誘運動もあって「四年間の市税の免除・工場設置に可及的に便宜を与える。」という好条件で大正区鶴町一丁目三十番地にある東洋綿花の紡績工場と倉庫を借りて、新工場を設立した。資本金は800万円で「日本ゼネラルモーターズ株式会社」で昭和2年4月から組み立て車の操業を開始

した。組立能力は、一日 130 台・年間 1600 台で車種はシボレー乗用車・貨物車・乗用シャーシー。オールズモビル・ポンテマック・オークランド・GMC シャーシー・ビュイックなどであった。米国の 2 大会社が、日本に組立工場を設置した利点は、自動車に対する、関税の軽減により、完成車シャーシーは、当時の協定税率従価 35%・部品 25%・エンジン系は重量税百斤につき 20 円・エンジンなどが低い税率であったこと。組立作業には日本の低賃金の従業員を使用できること。荷造り費用と海上運賃の節約ができたこと。舶来品に劣らない優良品質のもの、しかも、それ以上にはせず。

シボレー、フォード車組立に、国産材料や部品の使用を可能にしたこと。大阪市が免税の便宜を与えたことにより、将来日本だけでなく、東洋への輸出の拠点として、利用できるというさまざまな利点があった。

フォードと日本ゼネラルモーターズ社という 2 社の日本直接進出であった。昭和 3 年これ以外の外国車は提携し、フリムス・ダッジ・クライスラー・デット・ファゴーなどの車を一日 24 台程度生産していた。

直接進出の 2 社だけでなく、製品の競争は行われた。販売店の争奪戦は激しく、サービス網の完備、純正部品の充実に備え、月賦販売もし小売販売の 80%~90% が月賦であった。関東大震災、米国車の大量輸入、外車の組立販売や、工場の新設などで、国産車の打撃は、大きかった。

このため、実用自動車㈱は経営が悪化し、製造台数が減少した。久保田鉄工所の部品の下請け、海軍の舟艇用モーター・エンジンなどを造り、のちに日本ゼネラルモーターズ㈱にシボレーのアクスルシャフト・ピン・ユーボルトなどの納入を行った。残念なことであるが第二次世界大戦が起こり、製造の中止撤退が行われた。改近社→愛知自動車→久保田



# 幻の自動車王国誕生の夢

松田邦雄

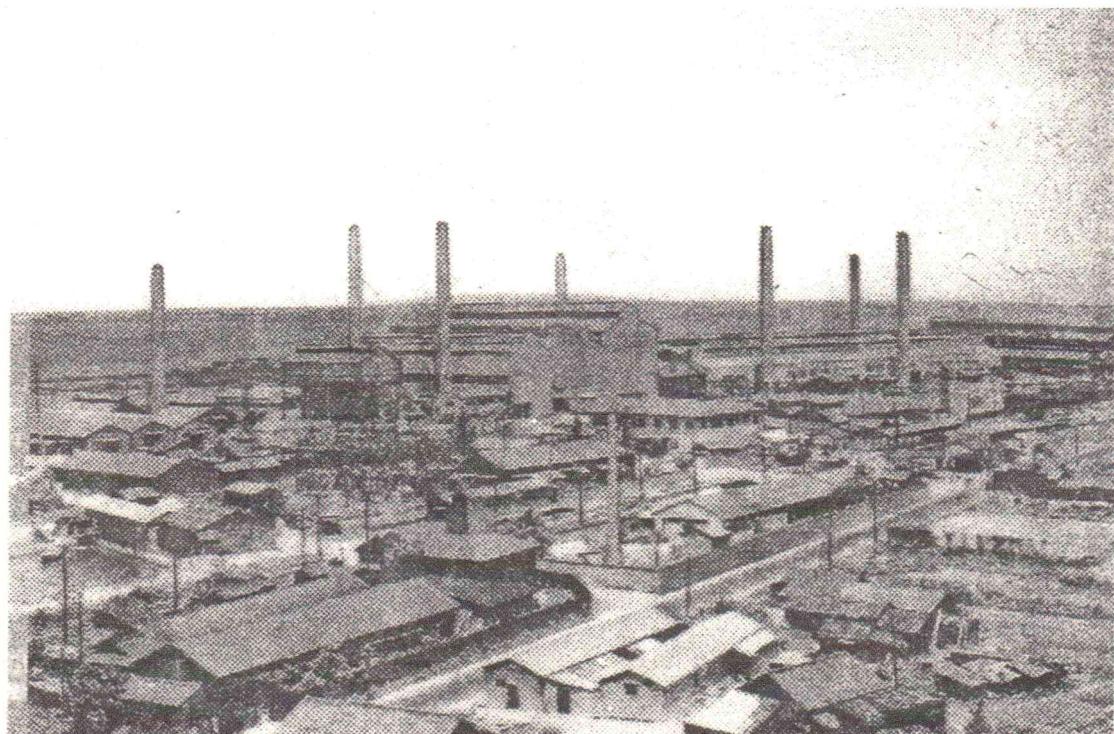
もしかして、自動車王国大正になったかも、エエツ一世界の名車シボレーが大正鶴町びっくりするのも無理はない、文明開化を謳われた、昭和2年(1927)大阪シボレー、横浜フォードの二大工場が日本に創設された。

鶴町工場では米人技術者が200名と工員700名で生産に従事していた、昨年朝日新聞がコラムにトヨタ自動車が初めて世界一の販売売上記録を達成した時、その自動車産業をコラムに記していた、鶴町シボレーは15年間に15万台を生産して輸出していたのだ、シボレーの会社には三軒家にあるトヨタ自動織機専務の豊田喜一郎も出入りしていた、トヨタ自動車の創設者である氏は将来の展望をみつめて、自動車の時代がやがて来る事を予測し、米国に自動車留学し帰国後、愛知県刈屋にトヨタ自動車を設立して今日のトヨタ自動車王国を築いた。

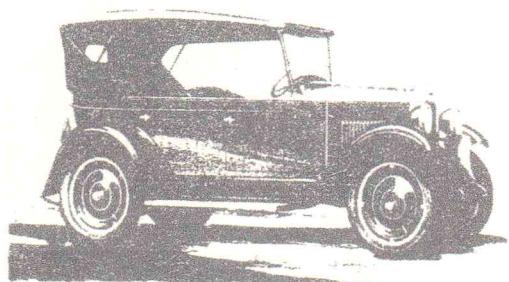
久保田鉄工も最初のダットサンを製造世に出した、後に日産の鮎川義介が日産自動車を引き継ぎ大メーカーとして今日に至る。関東大震災後2800台輸入ビュイックとシボレー。輸入車のヤナセの梁瀬長太郎社長もシボレー本社に出入りしていた。いわば鶴町工場が縁で自動車産業の基盤が出来たと云うのである。ゼネラルモータースでは名車。シボレー、オールズモビル、ポンテアック、ラサール、キヤデラック、オペル、ボックス、フォールの乗用車とトラックはシボレーGMC。ペットフォード、プリッジの四車種は月産4.500台迄生産可能、分速3mのベルトコンペアーシステム稼働、工場内は割烹着、着物姿の女子行員がミシンだけの仕事、シートや車内装をしている写真が残されている。一万坪の敷地、資本金800万円、日本ゼネラルモータース会社、後にトヨタ自動車販売を設立した神谷正太郎、加藤誠之、国産自動車の芦田定次郎、オースチンの木西芳一、満州自動車の前田勇等そうそうたるメンバーが従事していた。大正GMのあげた利益は大きく資本金800万円に対し昭和2年6.165.000円、昭和3年3.

280,000円(10%)、昭和4年3,120,000円(39%)、昭和5年1,780,000円(22%)、昭和6年1,090,000円(13%)、昭和7年百万円(16%)、昭和8年2,110,000円(26%)、昭和9年2,630,000円(32%)の現在では考えられない莫大な利益を計上した。

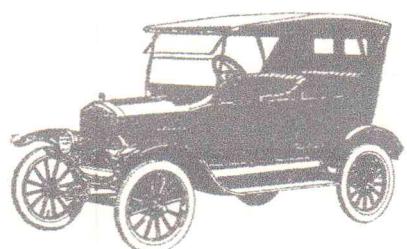
昭和14年生産中止、昭和16年の日米開戦と共に日本陸軍に接収され終幕を迎えるが残した業績は大である。



トヨタ自動織機



V4シザーフェートン



T型フォードフェートン

# 大正デモクラシーのさきがけ ムシロ旗で勝ち取った初代大正橋

藤原潤一郎

## 1 大正橋完成

大正デモクラシーのきっかけとされている富山の米騒動（1918年）の3年前の1915年（大正4年）、大正区住民の悲願であった橋が完成し、大阪市電が開通した。

当時日本一の支間長を誇る鉄骨アーチ橋である。

完成時の住民の喜びは尋常ではなく、1932年（昭和7年）の大阪市による区制定時にも、この大正橋がある地域ということで、圧倒的な住民の要望は「大正橋区」であったが、名称が長すぎるということで最終的に「大正区」に決まったほどである。

しかし、それも住民の決意と努力、そして大いなる行動による成果であったことは案外知られていない。

それは、大阪デモクラシーの幕開けであった。

## 2 架橋運動の背景

明治時代後期、大正区周辺は、「東洋のマンチェスター」（マンチェスター、大英帝国の工業都市）といわれた大阪の工業の中心地であり、多数の工員・労働者が寄宿舎等に住みつき、その食料や日用品をまかなうため、商店も集まってくるなど人口が急激に増加した。

そして、商店主や地域住民により、三泉同志会が結成され、市場の請願運動が開始、明治34年7月、三軒家と泉尾の境界に、140業者が参加して西大阪最初の問屋市場「三泉共同市場」（現三泉商店街）が発足したのである。

そして、買い物あるいは工場への通勤など住民の不便を解消すべく、架橋を希望する住民運動の素地ができつつあり、ついに大正橋架橋運動が始まった。

## 3 大阪瓦斯の横ヤリ明治45年1月16日の大阪南の大

火（4884戸焼失）により、大阪市電の路線計画が変更され、同年大架橋が決定された。

しかし、川沿いで操業していた大阪瓦斯が、この決定を覆させてしまったのである。

当時の都市ガスは現在の天然ガス（水素・炭化水素）と異なり、水性ガスと呼ばれ、真っ赤に焼いたコークスに水を掛けるなど、水蒸気を反応させて得られた一酸化炭素と水素の混合ガスを使用していたのであるが、原料である石炭コークス運搬は、風のあるときはマストに帆を掲げる機帆船に頼っていたためである。

大阪瓦斯は当時親密だった大阪府知事に働きかけ、知事の具申によって内務省を動かし、架橋を阻止すべく、横ヤリを入れようとした。

一方、住民側は三泉同志会を中心にして、大正橋規制同盟を結成、植村俊平大阪市長（第4代目）を立てて、国への陳情に住民代表が市長と同行するなど、巻き返しに出たのである。

双方の運動合戦の結果として、内務省は、賑橋・上本町6丁目間の路線許可だけで、湊町以西の路線は不許可とする裁定を下してしまった。

元鉄道庁理事であり市電の整備を信条としていた植村市長としては、屈辱なりしと、明治45年7月25日引責辞任してしまった。それを見て大阪瓦斯は、我勝てりと、ほくそ笑んだ。

4 架橋運動白熱、官憲の弾圧と逆転勝利内務省の不許可決定に住民側は激憤した。とはいっても、頼みの大正橋規制同盟を結成した植村市長は辞任し、再任の要請も固辞され、住民側は孤立無縁となってしまったのである。しかし、大阪瓦斯も大正区住民のパワーを見くびっていた。

市長辞任を境に、住民側は関係機関への陳情や内務省・府批判の住民集会だけでなく、直接行動に出たのである。そ

う、「街頭デモ行進」である。多数の大正区住民が結束し、ムシロを旗としてひるがえし、猛烈なる抗議行動を開始したのである。打ちこわしはなかったので、一揆とはいえないが、百姓一揆と同様の決死の覚悟であった。

デモを権利として憲法で保障されている現代の世と違い、当時の官憲は、これを抑えるべく、デモの参加者を片っ端から逮捕拘束し、警察留置場にしょっぴいたのである。

しかし、それにめげるどころか、大正区住民あげての動へと広がった。

とうとう、そのあまりにも激しい住民パワーに恐れをなし、大阪瓦斯も折れ、とうとう、内務省及び大阪府側もかぶとを脱ぎ、住民運動の軍門に下った。

橋げたのない鉄骨アーチ橋となったのも大阪瓦斯と住民側の妥協の産物であるといえる。

市電の賑橋一安治川二丁目間の路線許可につづき、大正4年、大正橋が完成した。

#### 参考

写真及び架橋運動、とくにムシロ旗のデモ行進の状況を三泉商店街坂井商店さんから教えていただきした。その立役者であった祖父のことを義父からよく聴かされていたそうです。



三泉商店街坂井商店（文具）さんの所蔵写真より、大正橋落成時の記念写真

三泉同志会の旗が誇らしげです。

## 大正橋こぼれ話

山下好子

大正橋は大正4年8月に、市街地との幹線道路として、市電の開通とともに木津川に架けられた。大正区と浪速区を結ぶメインルートで、市電の通ったアーチ橋はここが日本で初めてだった。長さは91メートル、幅員は市電の軌道敷を含めて19メートルあるのに、石炭運航船の邪魔にならないように、橋脚は一つもなく、その姿は風情があり、雄大なものであった。大正時代にふさわしく「大正橋」と名付けられた。「大正区」という区名は、この橋にちなんだものだ。設計者は、京大出身の増田雄之助工学士である。

彼は幼い時父と別れ、京都で貸座敷を営んでいた母親増田ふさが、大事に育て上げた一人息子だった。幼少の頃から利口な子で、学校の成績はいつも優秀で、近所でも評判の息子であった。

大正2年、京都帝国大学土木部を卒業後、翌3年4月大阪市に招かれて市電技手となり、木津大正橋設計の大役を命ぜられた。大卒ホヤホヤの知識を榨り出して、一つも橋脚の無い見事なアーチ橋の設計ができあがった。

その工事主任をも命ぜられた。大正3年には、よし子と結婚して大阪に住んでいたが、翌4年8月以来は病気のため彼の親元に帰っていた。

大正4年8月31日、大正橋の開通式が執り行われた。大阪に新しい名物を殖やしたので、彼は大いに名誉を得た。そしてこの直後には、難波新川より大國町に至る、新線工事の主任となつたほどであった。

ところが大正橋竣工の翌年、大正5年1月17日、彼は道後温泉で愛人娼妓と心中したのである。この突然起きた心中事件は、当時世間を『アッ』と驚かせた。「大正橋心中」

という歌が大流行したのだった。この時、大正橋近くに住んでいたお婆さんは、「あの橋は設計ミスやで、そやから心中したんや」と話していたそうだ。心中の相手の難波新地の娼妓・数江は、彼の療養中の妻よし子によく似ていたそうだ。彼は、新地で初めて数江と会ったときから、よし子の面影に惹かれて、数江に夢中になつていった。

大正橋は、非常によく揺れた。

揺れるほどに、橋と車両の重さから、アーチが外側へ開こうとする力が働く。

橋の水平力に耐えるだけの強固な地盤と橋台が必須となる。大正区はもと、上町台地の西側に出来た砂州・姫島を開削して、新田開発された所である。

京都で生まれ育った彼は、地盤が砂堆であり岩盤ではないことを、認識していたのだろうか。

架橋工事に入ってから、初めて分かったことではないだろうか。

彼は常々、道後か山中の温泉に行きたいと言っていたそうだ。心中した年の正月には、7日より3日間程役所を欠勤し、11日に少し顔を出したまま、居所が判らなくなっていた。

彼は、数江によし子の着物を着せ、自分の衣類数枚を金にかえて旅費をつくり、道後に着いた。

17日の午前4時頃、旅館座敷の中で数江を白手拭で絞殺した後、旅館の後ろの冠山の神社境内の樺に帶を垂下げて死んでいた。

夜明け前に心中とは、彼の苦悩の深さが窺えるが、数江はまだ21才だった。

数江は、難波新地君の家八人の娼妓の中で一番の美人で、1年前の4月に娼妓になったばかりだそうだ。新聞報道では情死とされていたが、旅館の仲居が女の悲鳴を聞いたことを考えてみると、数江は本当に道連れになることを、承

知っていたのだろうかと思うのだ。

17日午後3時ごろの急電に、母親も病妻もただ泣くばかりであった。

男一人は間違いのもとよく言われるが、間違い過ぎて同じ穴のムジナになったのかも知れない。

彼の大正橋設計当時は、統一された鉄橋の設計基準が無かった時代だ。

耐力計算等による橋の応力不足が判明したのは、随分後になってからのことであった。

大正橋の変形と揺れは、戦後最もひどくなり何度も補強工事が為されたが、都市計画道路拡張整備に伴い、55年間に渡る激務を終えて撤去された。昭和49年3月には、新大正橋が完成している。

彼には、未曾有の国産の鉄橋の大アーチ橋建設の大役と、愛妻の不治の病気という、難局を乗り越えるにはあまりにも若すぎたようだ。

参考文献：大阪朝日新聞大正5年1月18日（火曜日）朝刊



大正橋

## 音楽橋よろこびの歌

山下好子

二代目大正橋は、昭和49年3月に完成した。橋の下流側を歩いていると、高欄の中央あたりが楽譜のようになっているのに気がつく。歩道にはピアノの鍵盤がデザインされている。よく見てみると「歓喜の歌」だ！ 誰だって最初はびっくりしてしまうのだ。

この音楽橋を考えたのは、ダイクさんではない。市土木局橋梁課にいた技術者の日種俊哉氏の設計である。彼は福井県の出身。大学で土木工学を専攻した。昭和37年に市土木局に配属して以来、10橋以上手がけてきた。二代目大正橋を担当することになって、彼は従来の土木屋の感覚にはなかった、新しいデザインを生かしたいと考えたのだ。

一般に橋の高欄の設計は、基本的には縦と横の線の組み合わせであり、デザインのパターンが一定のものに決まってしまう。大阪のような都会の真ん中では、近代的なものにしなければならない。そこで思いついたのが「音楽」をテーマにしたデザインだ。高欄を横のアルミパイプで五線譜を表し、音叉をイメージした縦の短い柱で小節を区切り、楽譜を作り上げるというアイデアであった。

メロディの選曲の問題は、譜面が特殊なものであること、音符が五線の中に収まるものであること、なじみのある旋律であることなど、様々な条件を満たした作品として、「歓喜の歌」の登場となったのだ。音符の苦手な彼は、音域を移す作業を奥さんの日種貞子さんに頼ることになった。この歓喜の歌は、橋の長さ全体よりも真ん中あたりにさりげなくというのが彼のこだわりだ。この楽譜はなぜか下流側だけにある。

大阪八百八橋の中でも、特に市民に親しまれる橋を作ろうと設計した。大正橋の高欄両側をベートーベンの第九の音符で飾るつもりであったが、上流側の音符にかかるとした時、転任になってしまったのだ。

愛知県知多半島の中ほどに阿久比町がある。町の中央に阿久比川が流れ、町が東西に二分されており、これを結ぶ大橋の実現は町民の夢であった。

平成元年11月3日にオアシス大橋が完成した。全長五六七メートルの橋の中央部高欄には上流側にベートーベンの第九、下流側には阿久比町オアシス賛歌の音符がデザインされている。開通式には三笠宮殿下、信子妃殿下が臨席され、1,300人の阿久比中学校の生徒の第九の大合唱から始まった。

時の山内和夫町長は、日種氏のことを従妹の太田哲子さんから聞かされた。彼が大阪の大正橋でやり残した上流部分の第九をオアシス橋上流側高欄に引き継ぐことになり、大阪の大正橋と兄弟橋になったのだ。いつの時代でも、どんな事でも開いていくのは女性である。

故日種俊哉氏は、「橋というものは、ただ鉄とコンクリートで出来た、人を渡すだけのものであってはならない。

都市景観の中でデザインしそれが市民の憩いの場として、親しまれるようなものでなければならない」と話されていた。すばらしい達見である。

大正区には、大正3年ドイツ軍大阪俘虜収容所があった。収容されていたドイツ兵は、自分たちでオーケストラを作り音楽を楽しんでいた。後に移転した鳴門において、日本で初めて第九を指揮したハンゼンは、そのオケの一員だった。第九と大正区は不思議な縁がある。

今日、日本中で第九が響きわたっているが、その震源地は大阪の大正区であると、誇りを持ちたいものだ。



大正橋の音楽橋、歓喜野の歌の音符

【参考文献】日本経済新聞昭和50年3月26日  
(水曜日)短歌誌「作風」  
1998年5月号

# 橋 づ く し

## 宮本 明

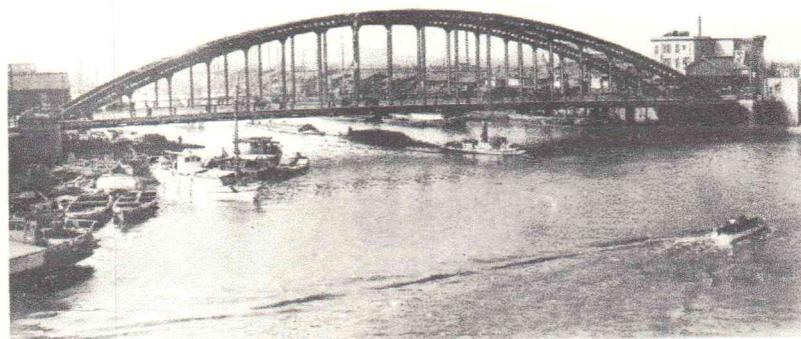
大阪は昔から八百八橋と称せられて、多くの橋が架けられていたが、今は千三百橋を超える（昭和7年）年々豪華なる橋が架けられ、都市の美観を添えている。

昔は主に木橋であり、時には石疊アーチ橋があったが、近年、鋼および鉄筋コンクリートが、材料として用いられている。淀川改修の工事が行われる以前の、明治18年に大阪に大洪水があり、市中の浸水はもちろん、大川筋の橋は全部流失して、交通は一時途絶した。

その後淀川には流れぬ橋として、天満橋・天神橋が鉄材のトラス型で造られて、市の名橋として永くうたわれたが、街路の拡張改修とともに撤去されて、昭和9年および10年に両橋ともに新しい鋼橋に架け換えられた。また大江橋・淀屋橋も、明治43年ごろ鋼鉄桁橋に架け換えられたが、昭和10年5月に、現在の鉄筋コンクリートアーチに架け換えられたのである。

その他、堂島大橋（2年10月）桜宮橋（5年9月）十三大橋（7年1月）昭和橋（7年5月）大船橋（11年5月）大浪橋（12年3月）等も、昭和時代の代表的な橋であり、いずれ耐久的で最新の設計になり、よく周囲の風景に調和し、また全体の意匠・装飾等、橋の大小によって壮麗簡素よろしきを得たものということが出来る。なお鉄橋および鉄筋コンクリート橋等の永久橋は580で、総橋数の45%を占めている。

GREAT VIEW OF THE TAISHO IRON BRIDGE  
THIS HAS NO PILES, OSAKA.  
御大の橋正大、橋離大の脚無事（成 大）



大正橋

## 大正区の八百八橋

高木善雄 松田邦雄

四隅を川に囲まれた 中州の街、大正、江戸は八百八町、浪華は八百八橋、京都は八百八寺、阿波の国は八百八狸と言う、浪速八百八橋の内、わが大正区は井路多く水運の利にまかされていたので八十橋を超える橋が存在した、小林運河を中心に、関西の山持ち大阪木材を中心とする、木材、製材、合板等大小込みで七百社あった、工場、自宅の通勤用が個人橋を含め十九橋があった、最初の橋は九条と三軒家に架かる 新柳橋 と伝えられています、順不同で並べてみると、

大正橋 岩崎橋 岩松橋 大浪橋 百済橋 泉尾橋 老松橋 梢橋 桜橋 八ツ橋 紡績大橋 駒井橋 永楽橋  
紅葉橋 中堀橋 竹橋 柏橋 榎橋 葵橋 千林橋 沖野橋  
橋 恩加島橋 萬歳橋 揚橋 千島大橋 千島中橋 檻橋  
市場橋 楓橋 松橋 真桜橋 栗橋 小林大橋 小林橋  
桂橋 五葉橋 彩橋 嘉平次橋 千歳中橋 千歳橋 千歳橋  
小橋 東ノ小橋 桃橋 檜橋 杉橋 永西橋 材木橋  
住吉橋 千鳥橋 落合橋 木金橋 宝来橋 永西小橋  
高砂橋 東ノ中橋 橘橋 北福橋 樽橋 沖ノ中橋 沖ノ南橋  
橋 南福島橋 大運橋 隆運橋 大船橋 昌運橋 栄福橋  
紡績小橋 丸山橋 白帆橋 大里橋 梅橋 蓬莱橋  
小島橋 千島小橋 檜橋 檜橋 南福橋 千歳大橋 なみはや大橋  
新木津川大橋 千本松大橋。

大正区は近代明治までは舟運の役目を果たしましたが、以後は橋が重要な交通手段に変わりました。岩崎運河、小林運河、木津川運河、と木津川、尻無川に四方囲まれた中州の区は大正区と広島市中区だけです、そして時代の名を冠せた区は、大正区と名古屋市の昭和区の二つのみ。  
価値ある大正区に栄えあれ。

# 尻無川風景

松田邦雄

桟紅葉が尻無川の両岸に映え、ヤンサ舟(淡路島より漁夫が雑魚場市の問屋に魚を運ぶ)の漁夫が暁の静けさを破ってヤンサ、ヤンサの掛け声と共に川を上ってゆく風景、井原西鶴は尻無川の紅葉を賞で、魚釣りと甚平衛小屋啜るシジミ汁と酒の旨さを広く紹介しています。



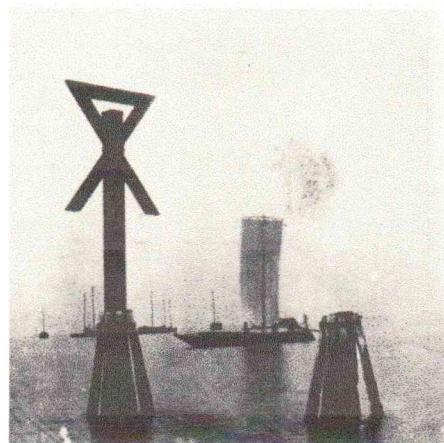
紅葉時には川面が錦色、朱色となり眺望も良く文人墨客も多く川船での一日の遊楽を楽しんだ、春弥生の頃には潮干刈りして蛤蜆をとらんとて大勢の群衆で賑わった。文久元年浪華の賑わいより、桟橋から下流十数町、右岸は桟の並木市岡新田を通して眺める景色は遠く、人家もまばらで、水郷の様な風景は心休まる風情であった。

左岸には甚兵衛の小屋がたった一軒、秋の鯛釣り時には、酒旗はためき、掛茶屋に毛縫に色紅を染めた、浪華では子女が山に行き、舟行きを楽しみ、遊芸の師匠や稽古屋が行楽の屋形舟で三味線、太鼓で囃子ながら川遊びをした。芸者家は長襦袢に自慢の金扇を開いて「松づくし」「紀伊の国」を舞った。女人は長襦袢でウコン木綿の手拭を頸巻きにして合舞、合三味と騒ぎたて楽しみました。

左岸には灯台が一基、沖あいには、みをつくしが並んでいた。又、遙か向こうには住吉の高灯籠も見えた。朝鮮通信使を秀吉時代には二百隻のかざり船で鳴り物入りの大歓迎をしたと伝えています。

この市標の起りは、明治27年4月大阪市の発足は明治22年ですから約5年間、市標はありませんでした。

この市標は大正区と西成区との境を流れる木津川口に立てられた船の道標です。船が浅瀬に向かわず安全な水深の深い方向を指示する方向板の一種でした。この道標は確かな年代は判明しておりませんが、江戸時代、河村瑞賢等により木津川の改修や川ざらえ等と一緒に航路の安全の為に立てられたと考えられます、ともあれ、「入るも千艘、出るも千艘」と云われる様に、尻無川と木津川は船の往来の激しかった場所の関係で、事故の無いように監視も行き届く様にされて居たのでしょう。大阪湾には、西の方から「左門殿川」「淀川」「安治川」「尻無川」「木津川」「大和川」は共に河口を大阪湾に流入しています、然し、「左門殿川」「淀川」「安治川」は川幅はあり水量はありますが、流れが風水害によって変化が大きく安定した運行ができないことが多かった。木津川は大阪歴史博物館所蔵の華麗な「川口遊里図屏風」はこの当時の三軒家の繁栄ぶりを見事に表しているが、明暦3年（1657年）に幕府の集傭政策で新町に統合された。しかし、木津川当初は船場表川口と呼ばれたが、北前船等の玄関として物資の大動脈であったことは、徳川時代を通じて変わらず、その水路確保のため、「川ざらえ」を幾度と無く実施した。「宝永、享保、天明、天保」など、木津川は特に北前船や渡回船を中心とした川筋で、上荷船の浜が24ヶ所あったとされ、その内、大正区には勘助島上の浜中之島、同下の浜、「今木浜」、「三軒家浜」、「難波島浜」、「瀬の浜」「落合浜」などがあったが、勘助島には、薩摩や日向の船が、難波島には北前船が着船していた録がある。木津川の様子は、シーボルトの「江戸参府紀行」にも紹介されて居る。



朝鮮通信使や琉球使節も木津川などを遡っていることが難波島や勘助島などの名称が記録されており、明らかである。朝鮮通信使は將軍の代替わりのときの慶賀使で、前半は、伝法口を利用していたが、後半は木津川口を利用するようになり、特に尻無川河口に大船を停泊させ、川御座船に乗り換え、京都まで船で行った様ようで、見物の群集が堤防を埋め尽くした記録がある。

西区の松島公園の一画に「朝鮮通信使の碑」もある。又、木津川河口は「此所は浪花の津の湊にして、諸国の廻船出入の要津にかかるゆえに廻舟の便利よからしめんが為、天保3年（1832年）、870間（1500米）余りの石堤を築き、万代の不朽にして浪花繁栄の基、又此堤は、上に松を植え列ねり、俗に木津川の千本松という。又、「津々たる蒼海に築出せし松原は彼の名の高き、天橋立三保の松原なども外ならずと見る」と挿絵入りで紹介されて居る。この様に木津川口の道標は幕府直轄の運営が江戸時代より行われていました。

おそらく、民ではなく、官であったと、幕府の直轄であった思います、故に重大な木津津川口の入り口の道標が大阪の市標になったのだと思います。

この道標の意義は深く、広く、広大であります。何故ならば、三軒家に於いて大阪紡績を興しその発展は目覚しく、24時間稼動できる電気と動力を使用して「人力」から「発動機」と近代産業へ変換して行ったのです。

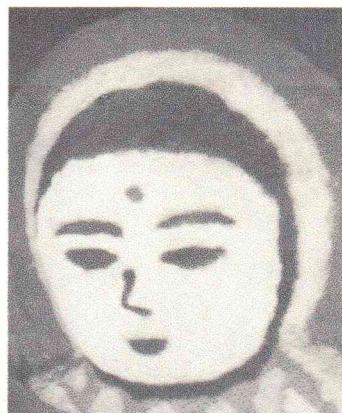
産業の発展は文化文明を変え又この人間生活の変換を也可能にしています。

こういう意味でこの道標で生まれた文化文明は大阪を興し、日本を鎖国から「開国」へと導いた、明治20年には世界のマンチェスターと言われる程日本の産業の発展を助けたのは、東京や名古屋、九州ではなく大阪の市標であり大正区の木津川口の道標は不朽の市標でありたい。

# 化粧地蔵

宮本 明

国内でも珍らしいと云うより余り類のない化粧地蔵。木津川右岸の落合上の渡しの通路前たばこ屋さんの軒下に一体と、すぐ南側の隣組にもご一体あります、二体並んで鎮座しています。第二室戸台風で、地蔵さんや、そのご近所は渡し場の入口からの高潮の流入で全滅しましたが現在は立派に復興しています。小さなほこらの扉越しに、美しくお化粧された二体を見たときの感動と感激は忘れられません。



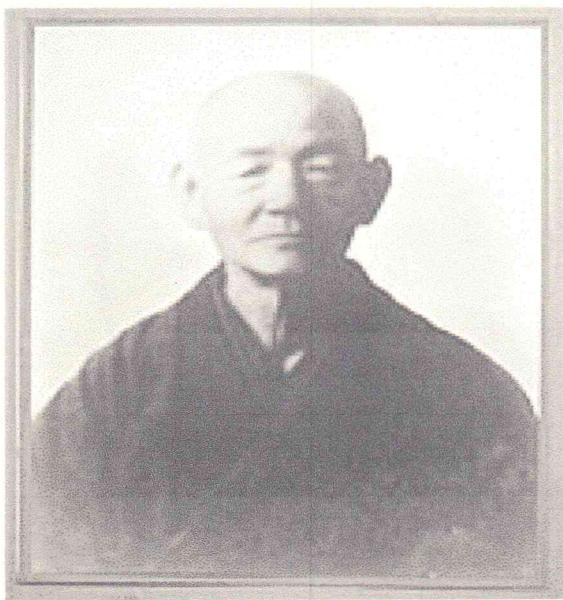
大阪市内はおろか府下でも珍らしいはず、市内生れの私には、渡し船取材中久し振りの出合でした。

たばこ屋のおばちゃんは『もとは川沿いにおましたんや。お地蔵さんのお蔭で戦災にもこの隣組は焼残りましたんや。

さよか、よそにおわまへんか、よそん見た事ないから知りまへんけど……。お化粧だっか、お白粉はな、毎年地蔵盆のとき、かたねりのん買うて来て、お化粧しますねん』と。ぼつぼつ語り聞かせてくれました。

小さな石仏は、幼なくして死んでいったわが子であり、また両親に見立てて化粧するご近所の人々の顔が、ざわめきが、ひしひしと伝ってきます。' 一体の銘に寛保2年(1742)とあり250年前に建立した庶民信仰の現れである。線香立には旧町名の新炭屋町名が刻まれていました。250年昔、この地の新田開発に移住してきた人々が、ふる里の風習を持ち込み、それが今日まで立派に受けつがれているある種の信仰の様を感じました。ほこらの中の地蔵さんは生き証人。川の両岸に狐もいた畠も、明治大正と重工業地帯にかわりクレーンの林立。渡し船も手こぎから動力船に、時とともに移り行く、町なかの小さな地蔵さんのほこらの中の大伽藍にないまひとの温もりを感じさせられた一期一会でした。おばちゃんも、ご近所の方も、地蔵さんの恵みを貰って元気でお暮しください。

## 大井伊助伝 小林一子



元治元年（1864）12月1日泉尾新田の一小作農に生まれ、幼名を猪之松といった。

幼少時代は貧乏でもあり、現在のように教育機関も整っていなかったことから学校へは充分に通うことができなかつたが、父と一緒に家業にいそしむ明け暮れに、閑を見つけては本を読んでいた。

猪之松の父は、貧しい百姓暮らしの中にあっても非常に心の正しい人であり、子どもの教育にも厳しく、猪之松を事ある毎に以下の教訓で戒めた。伊助翁は、この教訓を守つて、家の富んだ晩年においても一汁一葉を励行し、自分の仕事に精勤した。その猪之松は、14歳の冬に母を、15歳の夏に父を相次いで失った。しかし、四代目伊助を襲名した伊助翁の非凡な人格は両親の死後引き取られた叔父の松田徳右衛門氏によっても育まれた。

泉尾新田は、元禄16年頃開発された土地で、土地も肥えて農作物もよく穫れた、底地の所有者は泉州据尾村の北村六右衛門氏であり、大井家などの泉尾の農家は、上土の売買権とその小作権を所有していたのみであった。明治23年に北村銀行が破産し小作人の有する上土権すら地主に返還にせまられた。

これを機会に財産の全てを融通し質屋業に転向し、誠実な経営振りによりたちまち世間の信用を博し界隈きっての立派な質屋となった。卓越なる識見と鋭い経済眼を具えた伊助翁は、日清戦争後の発展する日本の資本を凝視し、商都大阪の持つ経済的地位と、港に近い西大阪に与えられるべき将来性とにらみ、大正9年（1920）頃に質屋を親族に譲り、貸家業へと転業した。最初に目をつけたのは九条方

面であり、土地を購入し「魁湯」と幸先のよい名前の風呂屋を建て、付近に40軒程度の住居を建てた。

伊助翁の事業経営方針は資本を片時も遊ばしておかぬことであった。「自分でうまくやれば、二割も三割にも利子を生む貴重な金子を低い利息で銀行に預けて置く等は、凡そ経済人のすることではない。」との利殖信念であった。昭和9年（1934）9月に関西地方を襲った室戸台風の際には、他に引き揚げるものが地所を売りに持ってくる場合、ほとんどを引き受けた。

これも、文化工業の中心区域である西大阪一帯が、このくらいの天災を蒙ったぐらいで潰れるものではなく、遠からず復興するに違いないと考え、持ち込まれるものは、どんどん買い取っていった。

すると、関西経済人により復興が進められたのみならず、大阪府・市、内務省の補助によって大規模な復興予算が計上され、一年もたたないうちに、住宅は復興し、風水害で受けた損失をカバーする以上の利益勘定になった。

伊助翁は小さい頃から厳格な父や叔父から叩き込まれた正直一徹の精神から売るにも買うにも決して卑しい商売人根性は持たず、「正直の頭に神宿る」として私利私欲に走らず常に構成と誠実とを旨とした。

また、地域に貢献するために教育・産業・警防・慈善・社寺など各種の社会公共団体に浄財を寄付して、各方面から受けた褒状・感謝状は、300通を超えて、金額も約10万円に達している。

その中でも、岩崎橋公園横のJR環状線の壁に設置された尻無川南岸直通路の開通記念碑には大井伊助氏が全額寄付により道路が完成されたことが刻まれている。

国家公共への奉仕の精神を常に忘れず、「我も人も喜ぶ経営」を実施していた伊助翁は、昭和13年（1938）12月5日に75年の人生の終焉を迎えた。

大阪市大正区北泉尾町一丁目一〇番（現在の三軒家西三丁目）に大井貸家事務所を構え、3万円軒余の借家を経営し、一ヶ月の家賃収入がざっと六萬圓にのぼった。

貸家の内訳としては、商店と住宅の比が一対二、であり、住宅以外にも映画館や公設市場、湯屋に至るまで生活付隨

の文化施設にも投資していた。

この経営する住宅等を一ヶ所に集めたとすれば、優に人口  
15,000人のする一大文化都市を形成できる規模であ  
ったといわれている。

大井伊助協賛会は、「勉めてもなお及び難きが、我等の未  
熟なるものの常なれば、愛にわが、一身を通じて賜りたる  
天恩の財、祖先代々の靈護のために蓄えたる資に対し、わ  
が心を通じて、再び之を社会国家の奉仕たらしめんと思  
うこと切なり。」として、「わが感謝の志をのべるための企  
にて、天地・君国・父祖に対し奉りて、感恩の情をのべる  
にはかならざるなり。」という伊助翁の社会奉仕の思いより、

「児童福祉、青少年補導並びに社会の文化厚生、その他有  
益と認める事業の助成となす」ことを目的として、

昭和16年（1941）11月17日設立された。

同じように、昭和幼稚園についても「地域の保育所」的  
な奉仕の精神から、昭和8年（1931）4月大正区泉尾  
松之町一丁目五十六番地に園児約200名により創立され  
た。

平成13年（2001）創立70周年を迎えた。

工事費寄附者を大井伊助氏である  
開通記念の碑文

【JR高架下壁面】玄ニ昭和3年10月尻無川南岸直通路  
新修の功を竣ふ顧ればここ臨港鉄道の敷設せられきとき東  
大正横より酉尻無河町ニ至る直通路の設けなく人馬永く交  
通の便を失ハントス附近住民深く之を憂ひ北泉親交合の蓉  
議に由リ十六箇町内合々長嶺起者となり尻無川南岸直通路  
期成同盟合を組織し億民二千名の連署を以て鉄道省及府市  
に陳情歎願し下記請願重点の奔走ニ依リ遂ニ菅局赤民意を  
諒しと之を許可せらる乃工事費百萬四千金を投じて其功を  
成せしものなり後尾衆庶永く其澤を蒙るニ庶弟からんか伍  
て之を勒して竣のえ記念トス尻無川南岸直通路期成同盟合  
有志一同

## 鉄鋼王 中山悦治伝 谷 真孝

中山悦治氏は明治16年（1883）7月15日福岡県京都郡泉村字竹並に生まれ、少年時代までここで育った。少年時代は傑出性を引き出すこともできなく、学術の上でも操行のうえでも平凡な子であった。明治30年（1897）4月に中学に入学、当時の新しい教育制度になじまず学校をサボることもしばしばあった。

中山家は、代々この地の庄屋をつとめ村民の声望を集めた家柄であった。

しかし父半歳氏は、日本の近代的工業化の魁をなす北九州の都市に近接している農村での変革の大きい時代で従前の農家のあり方にうまく振舞えないことや、村の顔役としての出費がかさむことなどで資産が傾いていき、さらに相場に失敗し資産を全て失ってしまった。

家族は全員でその日から働かなければならなくなり、悦治氏も中学を中退し働くこととなった。

当初、学校を中退した頃には家業を手伝い農耕の労役を行っていた。農家の将来に失望していた悦治氏は、16歳のときに家出をし、開港場として日清戦争後の日本の将来に直結する尖端である長崎に向かった。

そこではじめに選んだ仕事が『便利屋』であった。ついで就いた仕事が三菱造船所での『カンカン虫』と呼ばれるドックに入った船のそこに着いた錆を落とす仕事であった。『カンカン虫』では単調な仕事過ぎて将来が再度見えなくなり、一年間の苦闘の末、父母の元に返った。

出戻った家では、母の手伝いや野良仕事をしていたが、母の知り合いに製糸工場を紹介されたが、性に合

わなく半年で再度出戻すこととなった。

次に勤めることとなった鉄道では犀川駅の駅夫として2年ほど熱情を持って働いた。その後、日露戦争に向けて機運を高めている時期に適齢を迎えたため徴兵検査を受け、明治36年（1905）12月に小倉歩兵第14連隊に入営した。

徴兵検査合格後入営までの間は、炭鉱で送炭係として配車や渉外的な交渉などの、将来直接的に役立った仕事により面白さを味わった。また、入隊生活は後の諸事業遂行に示された強い意志と不倒不屈の実践力を自ら蓄養えた絶好の機会であった。翌10月には上等兵に進級し現地に赴くこととなり満州に出兵した。

終戦により帰国し、再度炭鉱に戻ったが、一年ほどして父が亡くなり、実母と同母弟3人を引き取るために家を構えた。この頃の仕事により悦治氏は著しく成長した。送炭業務の渉外と企画性実業家としての萌芽を育てていき、一従業員ではなく炭鉱事業などへの企業的方面に关心が向くこととなった。

悦治氏初の事業として新たに炭鉱事業を起業させたものの、手に入れた鉱区が近代的経営とはかけ離れた、採算の成り立つようなものではなく初めての事業は失敗に終わった。

無一文になったのち、電池や電鈴などの行商を始めたが儲からず、弟が八幡製鉄所に雇われていたことから、八幡に向かい、製鉄所傘下の亀井組という人夫組に入り、製鉄所に人夫を派遣することや弁当のまかないを請け負うことなど生業とした。

その後、同業者が人夫供給合資会社を設立し、外勤書記を勤めることとなった。ここでも熱心な仕事振りが認められ、生活を安定させることができ、再び母を向かえ、人夫の下宿屋も営むこととなった。受け入れる人夫が増え、女手が必要なことからや悦治氏は結婚

することとなつた。時子夫人の仕事振りによってさらに受け入れる人夫の数が増え120人に達することもあつた。

人夫供給会社での外勤職員としての月給などにより、かなりの貯金を蓄え、自身も經營に参画しようとしたが断られ、新たに大阪から八幡に来た酒井氏とともに人夫供給会社の酒井組を発足した。

ここでの仕事や婦人の奮闘する下宿經營で資力も次第に蓄えられて行つたが悦治氏にとっては中山家の再興を果たす以上に、もっとやりがいのある事業を求めていくのであった。

第一次世界大戦が勃発し世界的に軍需生産に傾いたため、当時後進国であった日本対しても軍需。非軍需ともに需要が大きくなり、日本の産業は急速に発展し、特に生産材生産部門での中心である鉄鋼業はまさに千載一遇の礎を迎えた。

こうした産業の盛況に刺激され生産事業に国家的社會的意義の実践である、自ら作り出す仕事に全身全靈を打ち込むこととなつた。

最初に經營をしたのは亜鉛鍍金工場（尼崎市：大正8年（1919）9月）であった。第三次的加工業ではあったが、将来の大事業に対する第一石となつた。しかし、見るからにお粗末な町工場で、商人からは一向に見向きもされず、売り出そうとした頃には周囲の經濟状況は思うに任せない状況となつてゐた。大戦が終わり交戦国が平時經濟に復してくると日本にもたらしていた軍需はなくなり、反動的に不況に陥つた。

当初の苦境も海外から輸入される粗悪な鉄板を加工することでうまく販売することで幾分資金を回転させ、新たに第二段階として「関西亜鉛鍍金工業所」に事業を進めた。

はじめに地球印のマークで売り出した商品は、他に

比べあまり良好でなく評判が悪かった。

製品の品質向上に不断の努力を払うことを怠らず、新たに三井三菱の三つにあやかって三星印をつけた新製品により品質向上で一躍業界に知れ渡り、他の商品を凌ぐ製品として注文が殺到した。

そのうえ、大正12年（1923）に発生した関東大震災による特需より「関西亜鉛鍍金工業所」の基礎を強固なものとすることになった。

大正12年（1923）12月には「株式会社中山悦治商店」を設立し丸釘の製造をはじめ、昭和4年（1929）には大正区船町に薄鉄工場を建て、今日の中山製鋼所の礎となつた。

船町工場では、薄板工場で最も肝心な圧延機を外国製の機械の図面を用い和製として造り上げた。

しかし、外国人技師や熟練工もいなく未経験の日本人だけで作業を行なつたので、毎日のようにロールが折れたり、圧延した薄板がうまく剥げないという有様でした。

悦治氏と従業員の、熱意と一体となつた取り組みで次第に業績を上げてきた。

昭和8年（1934）4月にはいよいよ製鋼事業に踏み出し、昭和9年（1935）6月に「株式会社中山製鋼所」と改称し、次々と各所に工場を進出させ、昭和14年（1939）10月に熔鉱炉完成させた。

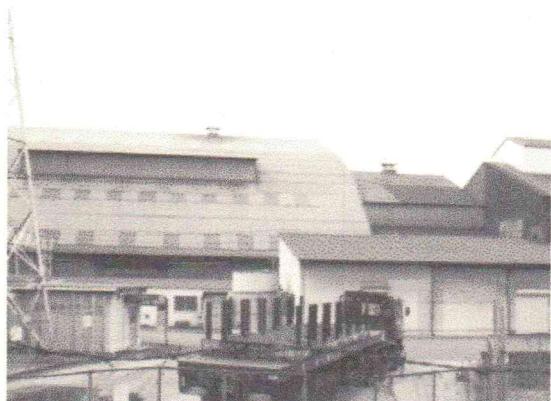
悦治氏の持つ実業精神は、収益を上げることだけに限られたものではなく、社会事業や育英事業により世の中に貢献するところもあった。

育英事業の最初は母校豊津中学校に置かれた中山奨学会では郷土出身の有為の少年に奨学の資金を援助していた。

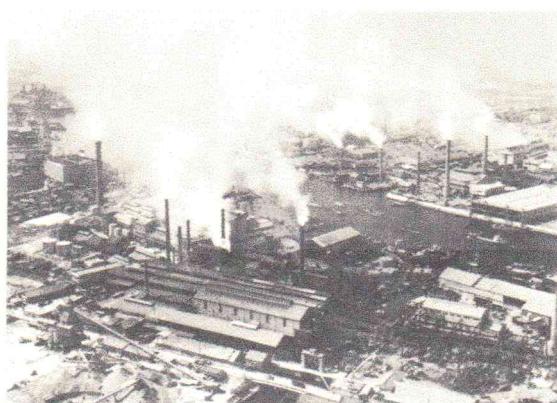
ついで昭和15年（1940）に財団法人中山報会が設立された。

昭和 28 年（1953）には経済的事由により医療を受けることが困難な学生生徒の医療・保険・衛生に寄与する目的で住ノ江病院を設置経営することとなった。

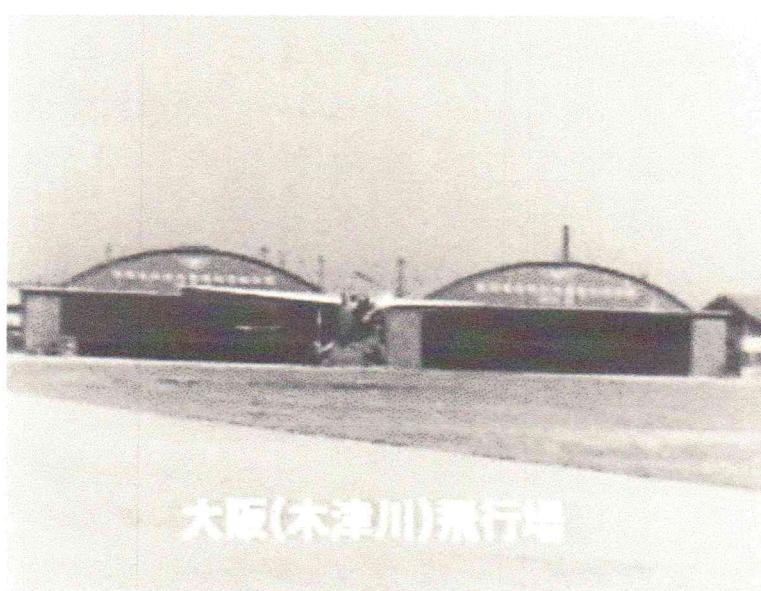
さらに、直接自分の事業として青少年を教育したいという願いから、浪速工業学校の経営を譲り受け昭和 19 年（1944）6 月に悦治氏が新理事長となり、財団法人中山学園として浪速工業高等学校を経営した。



船町の中山鉄鋼  
丸い屋根は尻無川飛行場の倉庫



船町の控除地帯



## 日本最初の自動車学校

神尾栄一

大正8年（1919）、大阪府内の自動車は348台でした。バスはまだ走っていない時代に、「自分で自動車を運転する時代がやってくる」と、思った人物がいました。当時24才の松本由太郎。

市立工業学校電気機械科出身の機械好き。軍需金物工場を営む父親に、今で言うと「ジェット機を買うような金額」だったというT型フォードをポンと買ってもらい、すでに乗り回していたことをうらやましく思った友人の筒井さんが、自分も運転したいと挑戦したが、運転はむつかしい、でも面白い。

「他にも乗りたい人が多くいるやろから、運転を教えてみたらどうやろ」と筒井さん。そやな。僕がお金を出すから、君がやってみるか」と、さすが裕福なお家柄の松本。そんな話をして、始めたのが「松本」と「筒井」の一字づつを取った「松筒自動車同好会」（後の松筒自動車学校）。大正の末に泉尾町に実習場を新設。今の北恩加島バス停付近から西側に、さくも無く、運転手の顔も丸見えの所に、有ったことを子供の頃におぼえがある、それから何年か後に、三軒家東小学校あたりに、松筒自動車学校が開校されていた。

昭和38年当時に知合いの教員が居たことで、3回ほど運転の実習を受け、守口の自動車免許試験に行き運転の試験を受ける。コース回りの車庫入りで脱輪したので、そく運転交代で不合格。

学科は、試験場回りの売店に、学科のプリントがあり入手し、学科だけ合格する。大正高等学校の南側に、現在市営住宅当たりに、関西自動車学校が、何年か前に開校していたので、我が家の近くでもあり、実習を受けに行く。約一ヶ月間で一万円前後だったと思う。

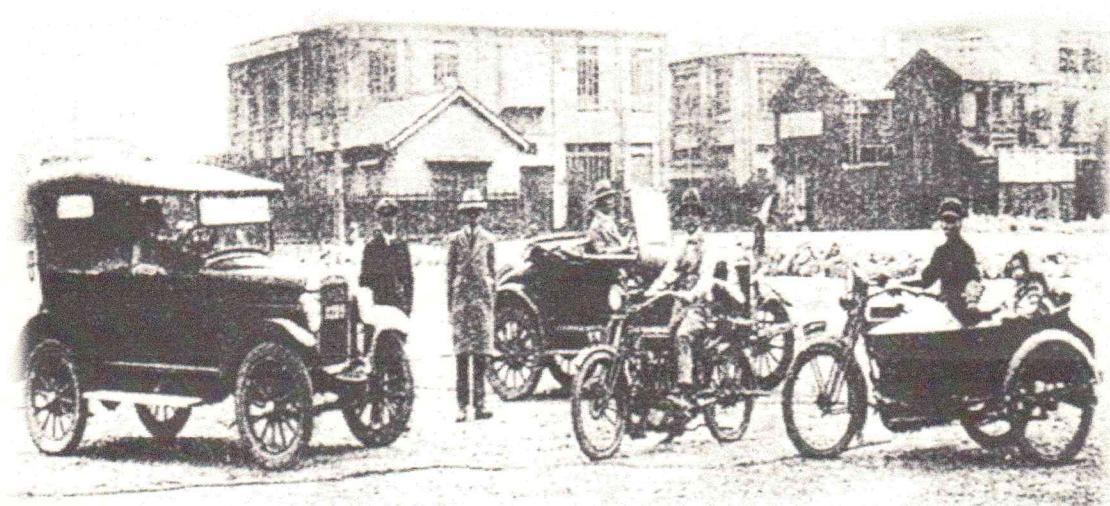
昭和 38 年 9 月に、運転免許証を取得する。当時は大正区に、自動車学校が二校あり、現在は二校とも廃校となり大正区は残念ながら、学校がないため長男は港区市岡自動車学校、妹は浪速区芦原自動車学校で免許を取る。

自分も免許証の切替えには、港区の市岡自動車学校に、もう 2 回運転実習を受け、身体の動く間は持ち続ける。今は中型車 8 トンになる。

昭和 38 年の一年前だと大型免許を取得することが出来ると聞いたことのおぼえがある。

大正の末には、松箇自動車学校は、谷町四丁目の、自宅の学校から、今の大正区泉尾町の実習場へ時間になると、中古フォード車が数台列になって、谷町筋から泉尾へ向かい、また泉尾から谷町筋へと戻った。

「ウアーッ車だつ」とフォード車を指さす人々が現れ、実習に繰り出す時も戻る時も、黒山の人だかりが出来たという。大正の末（1926）から、今年、平成 21 年（2009）で、83 年前のことである。大正区にもこういう時代が、あったのかと思うと、うれしいかぎりである。



日本最初の自動車学校

## 北恩加島繁盛記

嘉手刈 実

和久新三郎(奇才・北恩加島王)は、もと北恩加島新田といつて尻無川に、沿った砂州の地を、文政年間、今からおよそ百八十余年前。岡島嘉平次が開拓したところであります。かつて摂津の国西成郡川南村大字北恩加島新田と執していましたが、明治30年4月1日大阪市に編入され西区に属することになりました。

大阪市西区」川南大字北恩加島と称しました。次いで明治33年4月1日より町名を用いるようになり北恩加島町と改称し大正14年4月1日大阪市の増区により港区に、従属することとなり、さらに昭和7年10月1日大正区増区により、現在に至っています。

大正時代の中頃までは、市内と云へ実は一寒村に過ぎなかった。

北恩加島町がは以前の「新田開発者・岡島嘉平次」よりこの新田が「中見又兵衛」に渡り、さらに、和久伊兵衛の手に渡ったのは、明治25年10月(1892年)。二代目。和久新三郎は、明治17年(1884年)生まれ、明治36年大阪高等商業学校(現大阪市立大学)卒業後。同文書院(中国・上海市・文部省所管)に学び、帰国後、半田綿行に入社し、活躍した、しかし、先代伊兵衛が亡くなられ、家業を相続し、先代の經營していた、北恩加島新田の開発に乗り出し、その後、大正四年尻無川の改修浚渫事業が、行われた際、大阪



(街店商の町北恩加島)

府へ広範な土地を提供して、その推進に尽力した。

その浚渫された土砂は、当時大阪市・市街地発展による木材需要の増大に伴い貯木場の拡大整備が行われた。和久井堀の開削による土砂と共に農地を土盛して、宅地が造成され、北恩加島の町並みは大正時代に完成していた。

昭和 13 年(1931 年)当時戸数 2600 戸・世帯数三千世帯・人口 1 万 4800 人を数えた。因みに当時の大正区の人口は 14 万 2800 人を数えており、実に一割が北恩加島町の居住し、その隆盛、繁栄ぶりが偲ばれます。大正 12 年市電北泉尾線(三軒家 - 新千歳町)の建設に当たり率先して土地 3800 余坪を大阪市に無償で寄付し、それのみならず、隣接地主泉尾土地会社・芝川又右衛門一族(千島土地株式会社)を説得し建設敷地の提供を勧誘、その促進を図るなど、地域の発展に全力を傾注せられ又学校教育にも造詣で大正 11 年 9 月北恩加島小学校教育後援会が、創立されると初代会長に就任し学校運営に絶大な資金援助をなされその教育に対する熱誠は、德育はもちろんですが、大正 13 年 8 月 10 日わが国ではじめての小学校にプール竣工の一時を見ても体育にも着目せられた。

物事を見抜く先見の明と並々ならぬ尽力は、計り知れないものがあります。

今日、北恩加島町出身者。子弟のオリンピックメダリスト・体育指導者が、多数輩出している起源は、まさにこのときにあったといつても過言ではないと思われます。また、北恩加島町在住の大阪府会議員・大阪市会議員 2 名を輩出を見るに至る。枚挙に暇がない隆盛は、伊兵衛氏と新三郎氏の二代 48 年にわたる和久氏の北恩加島町開発・発展のおいて尽された功績は実際に大きいなるものがあります。嗚呼、今日・昔日の隆盛・繁栄に活気溢れる町並みを偲ぶよすがもなし。

## 材木の街 日本一の小林 松田邦雄

木材の街作り必要かつ切り離せない相関関係にあるのが貯木場である。長堀から小林へ、又平林へと移転した木材市場も都市の発展と共に姿を変えざるを得ない、小林木材界の中心は大正運河である。千島土地が木津川尻無川を結ぶ運河を策し大阪木材、岩田土地三社が協力して2年掛りで大正運河が完成。



大正12年6月のこと、昭和7～8年には貯木量日本一、輸出高日本一の発展した町になるのである、600軒の業者とも言われ、製材の音、木材を運ぶ荷馬車750車と、トラックを連ねたのである、筏や巨大な丸太をトビとよばれる人達が竹一本で自由に操る様は天下一品であった、国内は言うに及ばず遠くは満州、朝鮮まで輸出されていた。市電南側には、津田、海恒、楠、小名、角喜、瀬崎、富田の大間屋、製材業では辻良、大正が大手で、合板は川口ベニヤが大規模であった。

木材界の中心は西側で中川、北海林業、西本、村上、立木、成瀬、山長、笛吹、京竹、森平、万海、松岡等、立ち並び真桜橋から桂橋までを小林銀座といわれ、豪華な商社が立ち並んでいました。

昭和7年5月の千島大火災は日本中に有名になった、昭和9年の室戸台風も恐ろしい程の大被害をうけた、又、大阪大空襲でも焼野原になったが、大阪商人のたくましさで不死鳥の如く起ち上がった。

その後、市の計画で平林に移される事になり大正区の業界では反対同盟を作つて猛反対をしたが変更を余儀なくされた、40年間日本一の木材の街小林は、かくして平林に移る事になった。現在は近代的な町並みになり、昭和山が新しい名所として栄えている事は、喜ばしいことである。

# 消えた幻の小林銀座

奥野清美

## 地図から消えた幻の町(小林銀座)

Ⓐ 大ちゃん

Ⓑ 正ちゃん

Ⓐ 大阪の町名も大きくかわったなあ  
Ⓑ そう大正区も町名が変わり、町ごと消えた町名  
があつたね、確かに材木のまちだつた、発展した町で、橋  
を渡ると木の香りが漂う材木市場だった、現在は地図  
上からも消えて、町ごと土のなかや。  
Ⓑ ええ土の中の町か…さみしいなあ  
Ⓐ 君は「小林銀座って知っているかな」  
Ⓑ 東京の「銀座」なら知っているけど小林の銀座はし  
らんない  
Ⓐ そうやな、戦前の話やから当然や、この小林町一帯  
が「小林銀座」と呼ばれて日本中の材木がこの小林運  
河に集まり、貯木高、輸出高、生産高とも日本一にな  
った、黄金時代があつたんやで。  
Ⓑ へえ、聞いたことない話や、尻無川に囲まれて、鯉  
が水運で運んだ木船着場とがあった、尻無川ではそ  
れは綺麗かったで、  
Ⓑ 魚が獲れたんや、櫓、鯉づくしやなあ、  
Ⓐ そうや、「はぜ」は有名でな、渡し船が一番最初にで  
きた名が、はぜ渡し又、橋もはぜ橋ができたくらいや  
からな、うなぎも、どじょうもんや、  
Ⓑ すすんで、そんな時代があつたんや、材木の話は始  
めて聞いた。  
Ⓐ そや、力で大正時代正河連絡島はを作った、材木を  
三郎川元氏の木芝し工歳月がもやきにを新尻  
無川との大正時代正河連絡島はを作った、材木を  
地が担当な、二年やめんが余り貯木場軒りそして心木  
成したを含むがった、幼木馬をも残りがった、材木を  
も業者遂の洋様だいてな、材木が響いた、材木をも  
座の音が響いた、材木をも

荷馬車が動いとった、大正橋の坂は馬も大変やった、弱い馬はすぐバテる、坂の上には獣医の病院があったな、何時でも注射打って頑張っていた、

(B) ヘエ、馬が活躍してたんや、

(A) 馬の糞の後始末をせんと、罰金やったんやで、

(B) 聞き始めや、

(A) 各停停留所には馬の水のみ場か、ましの有しのと出たんです、つて軽にいにいたりました、浮いてたな、川に遊んでな、「あぶなぞー」くるくる回って川に落ちてからん、水難立たれ街あ持山らマンスの運命を

(B) 事故が多いですわ。事件が多かった、川は危険が一杯でな、立て看板も立たれ街あ持山らマンスの運命を

(B) 田舎の話みたいやな、大正区にそんな事が多かったんやな、大正区に住んでて知らん事には

(A) 余談やけどな、秘話があるんや、実はな小林西区にある遊郭松島を、小林に移すという計画でな、どうや、ビックリしたやろ。

(B) クドヒヨウ、

(A) 現実には実現しなかつたけどな、もしも、実現してたら、環境とイメージが随分と変わったいたやろな、

(B) 变化やろなのがいる限りですな、やった、火年第二の不事の二つの名譽コ室世が一戸界し時、金をもんさとごの界でせ男」お等きの運命を

(A) うね、考材ひ小芸や男もんや、あ木さ林能つと人まにつけたが五、もんさとごの界でせ男」お等きの運命を

(B) うね、考材ひ小芸や男もんや、あ木さ林能つと人まにつけたが五、もんさとごの界でせ男」お等きの運命を

(A) うね、考材ひ小芸や男もんや、あ木さ林能つと人まにつけたが五、もんさとごの界でせ男」お等きの運命を

を再現し日本中に名を轟かせたんや、凄いやろ

⑧さすが浪速商人や、

Ⓐ昭和4拾年代映画のロケが材木市場にやって来た、

Ⓑ初耳ですわ、

Ⓐわたしの憧れのひばりちゃんじや

Ⓑ今は亡き、天下の歌姫、美空ひばり

Ⓐそうや、美空ひばり主演、林与一と、頃休憩中のお家から出て来る美空ひばりさんは、今でも鮮明に覚えています、あの時の感動は一生の思い出です、

Ⓐ最近の作品では南の帝王ブラックレインは有名やね、

Ⓐ華やかですね、時の流れは厳しいです、大阪市都市計画で小林の材木は平林に移転が決まりましたと河運嘉平次橋付近と聞いた言葉を聞いた人の中の印象が最も大きいです。お家から出でてくる美空ひばりさんは、今でも鮮明に覚えています、あの時の感動は一生の思い出です、

Ⓐ最近の作品では南の帝王ブラックレインは有名やね、

Ⓐそやそや

大正区のことは何も知らずにいました、原稿を書かせて頂けて沢山の事をしりました、小林の町を歳月にはかけて創られ発展した町、今は土の中ですが、そこには生きています。

同じ土地を時代は変わっても時間を超えて生きて供ま繋いではいるのです、私も幼い頃このあります、生命がついています、感謝でいっぱいです、大正区万歳、小林万歳、我が町を大切に守ってまいります。



小林町材木置き場

# 大正区町名の由来 宮本 明

## 三軒家（旧三軒家村）

三軒家村は、もと木津川尻の小島で、姫島（日女島）または丸島といわれたが、慶長15年（1610）一説には正保4年（1647）木津村の中村勘助（通称木津勘助）が開発したので、勘助島と呼ばれるようになった。

この地が三軒家と称されるようになったのは、勘助の開発当時、三軒の民家が建てられていたからだといわれる。

## 泉尾（泉尾新田）

元禄11年（1698）10月、和泉国大鳥郡鈎尾村の北村六右衛門が開墾し、当初三軒家浦新田といわれたが、最初の検地が行われた元禄15年（1702）3月、泉尾新田と改称した。

開発者の国名（和泉）村名（鈎尾）から一字ずつをとり命名した。

## 北村（泉尾新田）

泉尾新田の開発者である北村六右衛門の苗字から命名した。

## 千島（千島新田）

開拓者の岡嶋嘉平次が自分の居住村名（千林村）の千と、姓の（岡嶋）の島をつなぎ合させて、千島新田と命名した。

## 小林（小林新田・岡田新田）

小林新田・岡田新田の名は、ともに開発者である東成郡千林村の岡嶋嘉平次に因むものであり、小林は千林から、岡田は岡嶋からとった呼称であることに由来

する。岡田新田の方が広い面積を有したにもかかわらず、「小林」を町名としたのは、小林新田にしか住民がいなかつたことによる。

### 平尾（平尾新田）

平尾新田は大坂江戸堀の平尾与左衛門が開拓。与左衛門の姓をとって平尾新田と名付けた。

### 南恩加島（南恩加島新田）

南恩加島新田は、文政12年（1829）に三代岡嶋嘉平次によって開墾された。時の代官岸本武太夫は、その功績をたたえ恩加島新田と称させた。岡嶋を恩加島と換用したものであるが、恩加島には後世に恩を加えるという意味があった。このあと明治4年まで数回にわたって増懲され、はじめは単に恩加島新田といわれたが、のち2分して南恩加島・北恩加島となった。

### 北恩加島（北恩加島新田）

四代目嘉平次が文政（1831～30）のころから開発を始め、天保2年（1831）に検地が行われた。

はじめは南恩加島新田とともに一つの新田で、南恩加島新田と呼ばれたが、のち南北に分けられた。

### 鶴町・船町・福町

大正8年3月埋め立て地に町名が設定され、鶴町・船町・福町が誕生したが町名決定の由来は、万葉集卷六の田辺福麻呂がよんだ「潮干ればあしひにさわぐあし鶴の妻よぶ声は宮もとどろに」の鶴と、同じく「あり通う難波の宮は海近みあまおとめらが乗れる船見ゆ」の船と、詠者の福をとったものである。

※福町は、昭和51年の住居表示の実施にともない、鶴町五丁目の全域と南恩加島五～六丁目、鶴町一～三丁目の各一部となつた。

## 三 泉 夜 話 齋 勝 晃 德

古希を過ぎ現役はさすがに荷が重く、百年近く親子二代にわたって続いた家業に終焉の時が来た。俗に開店のときより店をたたむ潮時の決断の呼吸のほうが、はるかに難しいといわれる。健康で頑張りぬいた満足感とともにさまざまな感激が胸にせまってきてどうしようもなかった。身辺の整理がはじまった。内外ミステリィのコレクションを雑誌社に介在してもらってオークションにかけ、約1200冊が放出された。膨大な日記を処分しようとし、種々の資料とともに思い切って一冊の本にまとめた。

出版社側は長大に過ぎる、親族以外は総て仮名。学校、病院などもイニシャルか仮名と注文が多く、大もめとなり、結局カットされ皮肉なことに、のちのち評判のよかつた近辺の歴史や時代の流れをとらえたエピソードの数々だった。

出版後、ホームページへ頂いた若い男性（うちの娘と同じ年）の「若輩者である私なんかが読むには勿体ない力作です。頭が下がるばかりです。前半の空襲の描写や国税局とのやりとり、後半の家族の方々への想いなど、一つ一つが私の心をつかんで離れないものばかりです。背景に描写される地元大阪の歴史にも関心を持ちました。この正確な記憶力の裏にはきっと膨大な量の日記があるのでしょうね。読ませて頂きまして本当にありがとうございました」の心情はうれしい。

一世紀昔にタイムスリップしてみよう。私にはむかしを思い浮かべる能力も資質もが、以下、両親に語り部となつてもらってその請け売りをする。今は三軒家公園となっている地で操業を開始した大阪紡績は、桁外れのスケールの西洋建築と深夜策業時の煌々たる電

灯の輝きが当時、夢の国のように物珍しく見学者がひききらず、発展を続ける。のち、軍事工場となり第一次大阪空襲で焼滅したが、明治時代、人気抜群、大スターの位置に君臨した。

頗在、城壁のように尻無川を延々と取り囲んでいる殺風景な防潮堤は、地盤沈下とジェーン台風の高潮被害による遺産ではあるが、これが我々を守ってくれている。

だから文句を言つたら罰があたる。このあたりが新開地であったころ、前の道路を北に300メートルの尻無川に櫨橋ハゼばしと名付けられた木橋が架かっていて、川の両側は土堤が続き、櫨並木が並んでいる。これが秋になると真紅に紅葉し見物客が集い、一大名所となに尻無の清流と映え合って一際ダイナミックな景観を演出したものと想われる。尻無川から枝分かれし広い小運河が縦横に伸び、はしけ風の舟が荷を積んで行き來した。家の前にもかなり広い道路と平行に運河が伸びていたが、時代の輸送機関の変化で消えてゆく。当時舟は大小に閑割らず最高の輸送機関であった。

川が競って大阪湾に注ぐ地形は最高の構図であったのだ。娘は区内の工務店に嫁いでいる。現夫婦第一線で頑張っているが、今年になって泉尾一丁目地区で二家庭から新築依頼があった。私の家からバス通りを隔てたすぐ南側に位置する。鉄筋三階建ての注文で契約設計も終わって木造の古家を壊して基礎作りの段階で、地盤が砂地で文字通り「砂上の楼閣」の危険があった。土地は十字路の角地のかなり広い好位置にあったが、運河の埋立地であり、土石でなく不運にも砂で埋められていたのである。施主は基礎の改良は相当の臨時出費を余儀なくされた。半年後に着工した家は一キロ足らず東によった土地であった、ここも運河の埋め立てによる砂地で大幅に遅れたという。事ほど左様に当時

運河がいかに到るところ網の目のように堀消されていったか、驚くばかりである。私が若い頃、半世紀の昔、早朝、今は球形になっているが、あのガスタンクの西北、ちょうど、今のドームの真下くらいに円筒形の四基並んでいいいいてそれにそって空き地が広がりこれと平行して、運河が掘られていた。北側は行き止まりであり、南側に小さな橋をくぐって尻無川に注いでいた。大阪ガスでは、石炭を蒸し焼きにし、ガスを発生させてタンクに貯蔵し、ガス抜きの石炭はコークスというあばた肌の塊となってこの空地で放熱され、火力の強い燃料として製鉄所なり鋳造所なりに、運河を利用して大舟に運び込まれるのであろう。またガスの発生の際の副産物としてコールタールも抻出され、これも土木建築関係には利用価値の高い商品であった。私はこの運河のほとりを毎朝、中央御市場への仕入れに往復しながら考えた。

母方の姉が来阪した夜、物干しからガス会社のほうを望見シ、コークスの自然発火を見て、「あれあれ、恐ろしいや！地獄の火の海のようや」と絶叫してた、平然として団扇を使っている母の顔を覗き込んだながつたのである。車が徐々に勢力範囲を広げてくる。

行き止まりとなっていた、このおなししじみの運河はやがてごみ芥とあぶくの吹き上がる悪臭のどぶ川となり、姿を消すにいたる。ガスっていえば、敗戦後にこうからことがあった。両親と私は、早い時期に店を再開した。神戸三宮の闇市を修復して統制外の品物を仕入れた。これが当たった。早朝に帰宅し朝食をかきこんで高校へ走った。閉店は夜の9時であった。当時は電力事情が最悪で、またかというくらいにこまめに停電した。点灯しているより停電している時間のほうがはるかに長かったのである、停電と入換えに橋す橋は隠隠滅滅として侘びしいものはない。父はゴム管と

まんまるのガラス製のホヤをセットして天井の中央に臍のように出ている金属に接続した。その夜、停電の瞬間、父はおごそかにガス栓をねった。神秘的ともいえるやや青みを帶びた光が店一杯に満ち溢れた。「うわ！すごい、お父ちゃん、むかし電気のないいとき、ガス灯使うとったの？」父はマジマジと私を見つめ「光徳、ぼんぼんやな、若い若いー」というなり一気に顎を緩めた。振り返った時光の中微笑んでいた母はきれいであった。

ここで大正区随一のメインストリートを高架で横切り尻無川を斜めに渡り大阪港に直行するいわゆる臨港線と呼ばれた貨物専用線路を導いた岩崎橋の完成を見る。この橋は名橋といわれてゐるし、戦後しばらくして環状線の開通なったあとも事務的には最高の役目を果たし続けている。手作りの絶品、えり抜きの職人のリベット一本一本ハンマーで打ち込む心意氣、こだわり、総てが結実した。この橋の建設に協力した人びとは、もう現存していないと思われが出来上がった傑作は厳熱とそこにある。

その存在感、間断なく通過するＪＲの客車、貨車をたのもしくがっちり受け止める抱擁力。こまめに塗り贊える若草色もじつに美しい。これぞ大正区の誇りという人に遭ったことがない不思議。

この冷淡さ！いやだねえ。

さて、岩崎鉄橋の完成を機に櫨橋は撤去され、櫨の渡しが新設された。これもずいぶんと昔の話である。

幼いころ記憶。ある夜、私の店の前に荷馬車がとまつた。斜め向えの「いもや」へのじやがいもの搬入がはじまった。役目の終わった馬が静かに立っている。胴長で四肢あくまでたくましく、栗色の毛並みがつややかである。無心に何を思つてゐるのか、目の深い光沢と優しさ、あたたかさにわけもなく胸が熱くなった。

あの三段ロケットの相似形をみたのです。もちろん、あのような金属的な冷ややかなものではなく、

それが、馬ちゃんのチンチンであることを納得するまで時間がかかるほど、スケール違いすぎた。おかげにいえばカルチャーショック初体験である。しばらくあと、何の前触れもなく、滝のような放水が始まつた。

私はしぶきを避けるのにのぞけるようにして逃げた。

小学生時代の友達で荷馬車輸送を生業としている家へ遊びに行ったことがある。

私の家から北へ歩いてはじめての角を西へ一直線に進んだ行き止まりのすぐ傍にあった。

当時は北泉尾一丁目、現在は三軒家西丁目に変わっているし、第一次大阪空襲で焼失、それからは音信不通、下田君といった。小学生時代、「なにしても たのしゅうなるよ お正月」という一茶はがの名句を読んだ楽しい友達であった。「おーい、しーもーだー遊ぼうー」大声でがなると、彼はとんとんと二階から降りてきて、にっこりした。

階下は土間で、奥まで太い手すりが伸びており、敷き藁がつながっていた。頑丈で長大な荷車はもう一方の側に納まっていた。

今になって思うと、これは運送会社のトラックガレージの草分けではないか。勿論ほとんどは仕事に出払っていてがらんとしたもので寂しく、ただ敷き藁のにおいがしていた。米俵やドンゴロス詰めの雑貨を満載した荷馬車が右往左往する幹線道路には中央に市電の軌道があって、その両側がある。その脇の歩道との境界にコンクリート造りの大きな長方形の水槽があり上部に取り付けられた水道の蛇口からは豊富な水がこぼれていた。

これがお馬ちゃんの水飲み場で市電の停留所の中間あ

たりに満遍なく設置されていたようだ。

岩崎橋鉄橋の新設で平行する岩崎橋も生まれ変わった。鉄橋に通じる線路の下にガートができ岩崎橋への勾配がきつくなり、ここが荷馬車の難所になった。重荷と急勾配に耐え切れずに転倒し泡を吹く馬が続出した。真夏の昼下がりはことに頻発度が高かったという事だ。映画「泥の河」の冒頭、橋上の荷馬車主の惨死をご覧になった方は思い出してほしい。

岩崎橋での事故はもつと悲しく切ないものであった。はしきくだり、ガードをくぐって川べりに向かいあつた家並みの角に「犬猫病院」かせあつた。

時を経て、うちの飼い猫が毒餌で瀕死となり、毛布に包んで飛び込んだ。

先生は辻さんといい堂々たる体躯の美丈夫で北支事変の時、軍医として従軍しておられたという。不意にわきあがってきたこと、辻先生は難所で瀕死の馬たちをどれだけ救われたのだろう。一人で感動した。今は高い堤防に埋もれたように病院は当時のままにあるが、辻の表札はかかっていても人の気配はなく空虚である。豪傑雷落出会った先生も、対照的に小柄で丸顔、色白でいつもこやかであった奥さんの安否など聞くすべもない。

両親が新開地の現地の木の香かぐわしい新築家屋でスタートし。にぎやかな大家族となつたかなで20数年後、私はポツンと生まれた。

以後この地を離れたことはない。私は遙か遠くの風物に憧れ、懐かしむような故郷を持たない。私が生まれ育ってきてさまざまな体験や喜怒哀楽の思い出の中で、それは美しい感傷に彩られて耀いている。故郷はしあわせに満ちた心の中にある。

## 昔話三軒家あれこれ 鴨宮光男

三西よいとこ住みよいところということで、住み着いてしまいました。桜町二丁目で生まれ、西二丁目で小学校に入り10歳のときから大正通五丁目（現住所）に住んでいます。

遊びに長けていた私は、小さい頃の思い出はたくさんありますが、何といっても風水害と空襲が一番大きな思い出です。風水害の一つは第一室戸台風です。

丁度私が小学校に入学した昭和9年9月2日ことです。朝から暴風が吹き荒れ、父親に手を引かれて登校しましたが、風速60mの風に屋根瓦が、舞い、結局学校には、行きつけず、そのまま何とか家に帰り着いたと覚えています。帰り道では、下水管から水が噴出しており、家も天井近くまで水浸しです。

嫁入り前の姉の着物等が全部水浸しになって、母親が随分と嘆いていました。

小学校は、一部倒壊して仮校舎が建ち、卒業するときまでそのままだったと思います。

次の台風はジェーン台風です。

私が転職して大正区役所勤務となった年の昭和25年9月3日のことです。

丁度日曜日だったと記憶していますが、水泳パンツをはき、着替えを持って出勤しました。

区役所は今の老人福祉センターの所にあって、ここも一番低い土地で、役所は水浸しでした。

その後災害救助本部が大正橋の公園に移され、救助用乾パンのケースの上で一週間ほど寝泊りし救助活動したことを覚えています。

その後も今と違って、ちょっと大雨が降ると家に浸水したので、いつも畳を机等の上に上げてから出勤し

たものです。

次に大阪が焼け野原になった、昭和20年2月13日の大空襲と大火災に三西地区が焼けずに残ったことは、本当に奇跡だと思います。

当日は友人が我が家に泊まっており、警報が出て家の中の掘っていた防空壕に両親と友人の4人で避難していました。

暫くしていつもと違う感じがしたので外に出てみると、北泉尾地区・三軒家東地区が火の海となっていました。

二階の物干場に登ると、泉尾上通りの火の粉がいっぱい飛んできており、友人と2人、火たたきを持って長屋中の屋根を走り廻って火消しに努めました。

落ち着いたところで、外に出ると、近所の家まで飛び火しており、訓練よろしくバケツリレーで火を消し止めました。

不謹慎な話ですが、その後堺方面。尼崎方面への空襲で、焼夷弾の落ちるさまは、花火を見るように美しく見えたものでした。

その他、家の前はまだ地道で、馬車が通り、その馬が糞をしながら荷を引いていたこと、今のバス通りを、チンチン電車が走り、三軒家大正橋の交差点で車掌さんが、ポールの紐にぶら下がって方向転換していた姿が目に浮かびます。

また、ガキ大将の私は、夕方遅くまで、かくれんぼをしたり、ラムネ遊び、ベッタン遊び・こま遊びなどが適当にシーズンがあって家の外でよく遊びました。

戦争という嫌な記憶がありますが、小さい頃は貧しい乍らも、ええ時代だったでしょうか。

## 相生座物語

野川由美子

相生席の紹介をさせて頂きます。

劇場に入りますと下足番が居りチップを渡すと下駄や草履を預かってくれ下足札を交換にくれます、館内はマス席になった畳敷きでオチャコさん(現在のウエイトレス)にチップ差し出すとシーツのかかった座布団と炭が入った火鉢を終演まで貸してくれます、武階全席も畳敷きで両横には桟敷もあり、勾配を作つて観劇しやすい構造に成っていました。

年少の頃は漫才と浪曲が主として口演された様な思い出があります、祖母はよく口癖のように、うちの舞台を踏んでいない役者はいないエンタツ、アチャコも出ていたそうです、戦争が激しくなり各劇場も休館が多くなり、昭和20年3月の大坂大空襲では八個の焼夷弾が落ちて、家族と近隣の人々の助けで焼けずに済みました。

戦争も終わり平和な時代になり芝居等が上演出来る様になりましたが当時の占領軍の命令でチャンバラの芝居は禁じられていました。それでも月に一度は占領軍の所に出向きます。どんな芝居をしていたか質問されればチャンバラの真似をしているだけと答えれば許して呉れたそうです。

だんだんと世の中も移り変わりどんな芝居でも上演出来るようになり、相生座にも大江美智子、市川おもちや、瀬川信子、その他の劇団員も多数来演しております。

その頃は一ヶ月興業で毎日芸題は変わっていました。その日の舞台が終わると明日の舞台の稽古を夜が明けるまでしていました。テレビや舞台に活躍中の京唄子もいました。

昭和25年のジェーン台風では多くの人たちが劇場内に避難してきました。

木津川が増水してどの家屋も浸水し劇場も大きな被害をうけました。その為に建て替えを余儀なくなりました。新築の劇場は新規一軒「相生座」と命名しました。

この時分から映画と芝居を上映しており映画は白黒で活弁師がおり、役柄により声を変えその場の状況を語って呉れます。第一号は「アラカン」こと嵐寛寿郎の鞍馬天狗でした。懐かしい想い出です。次第に世の中の変化も早く映画等も画面はワイドに音声も自然に近い音でした、気がついた時分は映画だけの興行でした。入場料は五拾五円でした。

「この世の花」「君の名は」上映時は切符売り場から西小学校の前まで長い行列が続いていました。夏は天井扇が回るだけ、客は暑いとも言わず映画に熱中していました。

昭和28年頃から35年頃が映画の最盛期でした、毎日が満員御礼で大入り袋が出ていました。36年頃からテレビの普及で映画産業は徐々に衰退しました。私の願いは今後も映画ファンが多くなり昔のような映画時代が来てくれる事を願います。

## 野口雨情と泉尾北小学校

小林一子

「稻をたばねし校章はむかし忘れぬしるしなり」、で始まる泉尾北小学校（当時泉尾第二小学校）・校歌は野口雨情が昭和9年（1934年）にわざわざ大正区まで来られ、わが地域の情景と児童の思いを自分の目で見、心の中で汲み取られて作詞された一章節です。

野口雨情は北原白秋、西條八十とともに、童謡界の三大詩人と謳われた一人です。

1882年（明治15年）5月29日生まれで、東京専門学校（現・早稲田大学）に入学し、坪内逍遙に師事されました。

茨城県出身の詩人であります。代表作は『十五夜お月さん』『七つの子』『赤い靴』『青い眼の人形』『雨降りお月さん』など、枚挙にいとまがない。他に『波浮の港』『船頭小唄』などがあります。

この泉尾北小学校・校歌が作られるきっかけとなつたのは、作曲をされた松永先生が日本作曲家協会に籍を置き、雨情先生。八十先生とも交流があり、特に親交の深かった、野口雨情先生にお願いし実現したものでです。

当時、小学校の父兄会の会長をされていたのが、中納さんでした。中納さんは、父兄会や学校の意見をまとめられ校歌制定の運びとなりました。中納さんは、その後、社団法人・「皓養社」を、福祉・厚生に関する事業の助成を行うために設立されました。現在の活動状況は、大正区内の経済的に恵まれない高校生に奨学金を支給し、府下の母子家庭の高校生にも奨学金を支給しています。

なお、皓養社の建物は、泉尾新田の当時の農家建築として大正区内においても数少ない建物であります。

大阪の民家百軒に数えられています  
野口雨情先生が泉尾北小学校へ来られた折、みんなで写った写真は、学校の宝物となり校長室に飾られております。

松永先生は、NHK大阪放送局で子ども唱歌隊の企画の仕事もされていました。

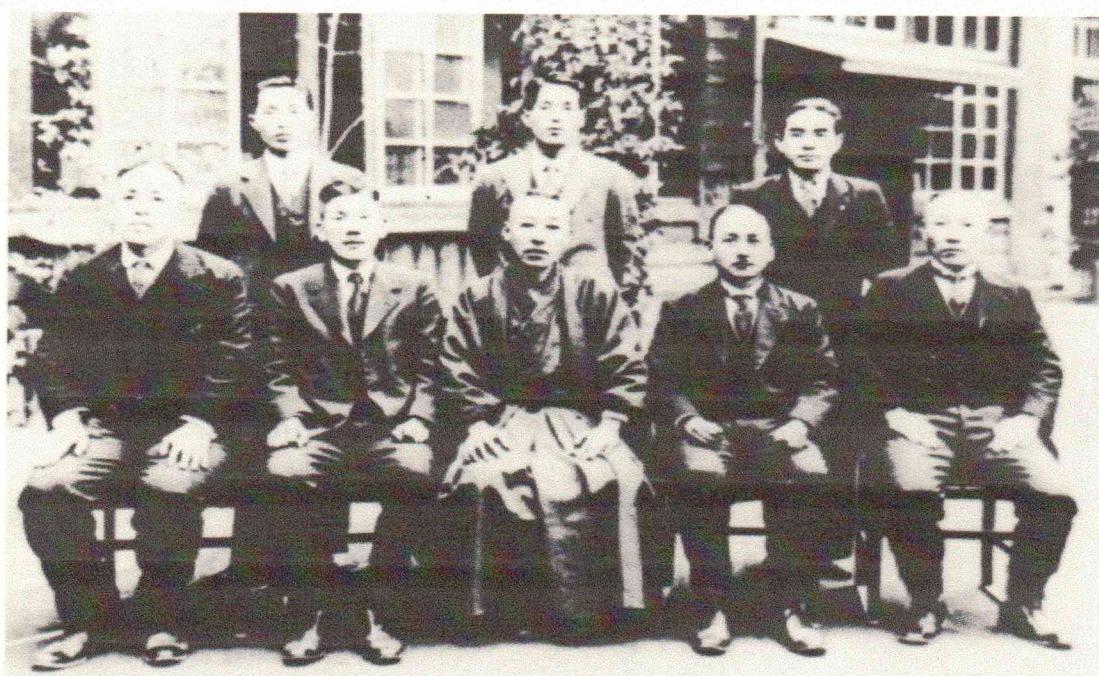
当時の泉尾北小学校の児童の合唱のレベルは優秀で、NHK大阪放送局で子ども唱歌隊の代表として、全国に放送されていました。

また朝日新聞の記者が、朝鮮に行かれたとき、大阪の泉尾に合唱でレベルの高い小学校がある。

という話を聞いたと連絡があった。など泉尾第二小学校は、全国的に誇り高い。歌の上手な卒業生が多くいる。

また音楽的レベルが高いということは、現在の泉尾北小学校の伝統となっています。

その起源を訪ねれば、一人の先生の熱意と、周りの人たち懸命の協力によって一歩一歩築かれ、日本一にもなれるという証であると思います。



野口雨情と泉尾北小学校記念

## 細雪語り草

本郷良章

たしか昭和63年の秋だったと思うが、翌年の昭和64年に会社が創業50周年を迎えるというので、総務部が行っている50周年記念の社史編纂作業にくわえてもらった。

社史というのは、文章が長いばかりで何の面白みも無いのが通例である。当社の「社史」もその例に洩れず「会社の沿革」について延々と述べた原稿の整理作業に入っていた。

このままでは他社の「社史」の内容を挿げ替えただけの体裁に終わってしまう。ひとつ提案してみた。

会社創業時の場所を特定し、その周辺地図を絵地図のように載せてみてはどうか・・・？心当たりはあった。いまは亡き伊勢戸佐一郎氏が、その当時『船場周辺の復元地図』の作成に取り組んでおられ、かなり詳細に戦前の建物の位置が判るという。善は急げ、早速伝手をたよってお会いし、『船場復元地図』を拝見した。まず会社の創業場所がこの地図に載っているのか？東区唐物町3丁目・・・あった！三休橋筋の一筋東の中橋筋と唐物町の交叉する角のところに、ハッキリと社名がでている。

時は昭和14年の復元地図だという。正に創業の年だ、うってつけではないか。

「社史」に転載する許諾を得て、複写のあと伊勢戸氏と雑談に入った。

氏は船場、西横堀のお生まれだ。実家は横堀川沿いに同業者がひしめいた材木商を営んでおられた。幼稚園はもとより、小・中・高校も船場で学び、遊び場も船場、当時はお仕事の事務所も船場に置かれて、まさに生糸の船場っ子である。

その頃大阪に関する著書も数点出版され、確か文芸雑誌『大阪春秋』の同人に入っておられたと思う。

氏との話は船場を舞台にした文学や映画に及び、先年上映された『細雪』の話題となつた。

これが三度目の映像化である。前二作共「相生座」で観た記憶があった。確かアンコール上映だったと思う。今作は長女 岸恵子・次女 佐久間良子・三女 吉永小百合・四女 古手川祐子の顔ぶれである。実はこの映画の撮影を真近で目にしていた。

一つは正に船場の伏見町、ガスビル近くの長屋で、この映画の撮影を真近で目についていた。一つは正に船場の伏見町、ガスビル近くの長屋の前で、市川崑が例のチビッタくわえ煙草で、古手川と(その当時映画初出演とおもわれる)桂小米朝のからみを撮っていた。そして今一つは、地元大正区の大正橋公園の近く、現今いまはマンションが建つその横の木津川からの坂道を、佐久間良子が上り下りする場面、四女 古手川が家出をして、男と同棲していたアパートからの行き帰りのシーンである。アパートに見立てた(実際は一階にスタンドバーが入る)古い建物も、マンションの前に現存している。

そんな話を伊勢戸氏にしていると、「大正区?、あのシーンは大正区ですか・・」意外な顔をしている。

確かに原作では尼崎の方だった気がする。

氏が言うには佐久間扮する次女 幸子のモデルが原作者の谷崎潤一郎夫人で、「自伝には造船所の娘で、大正区の出身と読んだ記憶がある」という。それに・・・と、氏は机上の『船場復元地図』の先程確認した会社の創業場所(唐物町三丁目)を指して、「原作の船場の蒔岡商店のモデルになった店もすぐ近くですわ」とおっしゃる。そこは北へ二町あがった。

同じ三休橋筋と中橋筋に挟まれ本町通りに面した所

(本町三丁目)、『船場復元地図』でも「丸紅」、現今でも同じ場所に位置する「総合商社 丸紅」であった。

以前はこゝに谷崎夫人、松子が最初に嫁いだ「根津清太郎商店」があり、この店は江戸時代から 250 年以上も続く大店であったという。

伊勢戸氏の話は続く・・・この復元地図の昭和 14 年頃の丸紅は建築中で、土地の主要部を手中に収めたのはだいぶ前の昭和 7 年のことだす。

その頃に「根津清太郎商店」が倒産したらしおります。当主の清太郎さんは良く言えば文化人で、いろんな人が出入りしてはったらしい、その一人が谷崎さんですわ・・・。話しに聞き入ってしまって、いつの間にか 2 時間以上もお邪魔をしてしまった。とんだ脇道にそれで長話をしてしまった。「社史」ができあがればお持ちしますと、丁重にわびて辞去した。

その後 社史編纂の作業よりも『細雪』のモデル探しの方に気がいってしまい、「社史」にはあの『船場復元地図』を掲載しただけで、他の新しい企画も思い浮かばず編集が終わってしまった。

そんな出来事が、もう 20 年も前になる。

あのあと天皇崩御、平成改元、中央区誕生 と大きなニュースが目白押しに続き、『細雪』のことも沙汰止みとなった。いま改めて、大正区まち案内人となつたことで『細雪』のこと、谷崎松子のこと を調べている。

手元に松子が書いた三冊の本があるが、いわばこれらの本は「ノンフィクション細雪」とよんで良いほど小説の実録的なものである。

また仔細に読んでいくと新しい発見もあった。

「蘆辺の夢」「湘竹居追想」「倚松庵の夢」 中央公論社

昨年(平成20年)の8月、久しぶりに青梅線に乗る。30年ぶりのことである。以前、青梅駅まで行ったことがある。しかしそれから先はない。

トンネルを抜けるとまったく首都東京の世界ではない。山と川のみの世界、ぽつんと家がある。降りた駅は、二俣尾駅・無人駅である。

ここが、「吉川英治記念館」のあるところだ。眼下80mほどの多摩川では、数名の人が鮎つりをしていた。少し町並みを抜けると、「吉川英治記念館」である。

そこで事務長さんと少しお話をする。

大阪の大正区のことも少しご存知の事務長さんであった。しかし英治氏と大正区との係わりについては、はっきりした返事はなかった。

しかしまったくの否定はしない。英治氏は、様々な職業を点々とする中、川柳と出会い、三越百貨店の「文芸の三越」に川柳一等当選している。

1914年(大正3年)講談社の懸賞小説に『江ノ島物語』が一等に当選。1921年にはさらに三作が入選を果たした。

同年、東京毎夕新聞社に入社。関東大震災を契機に執筆活動に専念することを決意、精力的に活動をはじめる。1926年(昭和元年)『鳴門秘帖』が大人気を博し、時代小説作家としての地位を確立した。長編小説であり、8月11日から翌年10月14日までの間、「大阪毎日新聞」に連載でされた。

『鳴門秘帖』が掲載された頃、英治氏はよく気ままな旅をしていた。

時には原稿は郵便で旅先から送られてきたことも何度もあった。行き先不明なのである。

大阪には、川柳仲間がいたと事務長さんからも聞く、木津川付近の三軒家に居住されていた、野勢さんの話を思い出す。

英治氏とは同年代であったそうだ。

当時は材木商を営み、借家も数10軒持つておられた。豪商である。

時には、持ち船で木津川から淀川へ向かい京都まで船で行ったことも、その中に、川柳仲間とともに吉川英治氏の若き姿があった。

と聞く英治氏はまた加藤汽船が大正橋より四国鳴門方面へ行く発着場であった。大正橋付近で食事を取ったこともあると想像する。野勢さんのご自宅にも宿泊したこと多かったと聞いた。

事務長さんにその話をすると、そういう事もあったでしょうねとの返事であった。

ともかく若き吉川英治氏は放浪癖の素浪人であったのだろう。

## 松下幸之助氏と櫻セメント

山口謙一



パナソニックグループ創業者で、P H P 研究所の創設者でもある。松下幸之助氏が、少しの間、大正区にあった櫻セメントに臨時運搬工として勤務していた。

そして幸之助氏の理想とした、人間としての生き方、人生の考え方、企業経営のあり方、そして、国家社会・世界の展望などを、築く基礎となった時期に、大正区に

関係があったことは、貴重な事実である。

昨年の10月ごろから「歴史を語る会」のメンバーと櫻セメントの話をしていました。

そのとき、櫻セメントが、船町の築港関連事業の資料の中で、大正7年の地図に櫻セメントの名前があり、渡船で港区へ渡るコースが記載されたいます。

明治43年6月、幸之助氏は、足掛け7年に及んだ大阪船場での奉公生活に終止符を打った。

奉公先の五代自転車商会を辞し、大阪電燈株式会社への転職を志したのである。

欠員がないため、入社するまでの4ヶ月ほど、櫻セメント株式会社の臨時運搬工を経験した後、10月21日、内線見習工として大阪電燈株式会社への入社を果たした。

その間、大阪の市岡（現・大阪市港区）にある姉（長姉）の家（義兄・亀山長之助氏の家）に居候していたという。

しばらくでも働く所はないかと義兄に相談した。

幸い、櫻セメントに臨時運搬工の口があり、使ってもらうことになった。初めは荒くれ男にまじってトロッコ押しをしていたが、まだ満15歳で、体もでない彼は、後から来るトロッコにすぐ追突されそうになつた。

監督が見かねて、もっと楽な仕事をさせようと考えたのであろう、10日余り過ぎてから、看貫工場に移された。

今度はセメントの分量を自動的にはかる看貫の機械を見張っているだけの楽な仕事だったが、セメント製造の中心をなす工場だから、終日もうもうとほこりが立っている。

口の中がジャリジャリになり、すぐのどが痛くなるのに閉口して、彼はまたもとの運搬工に戻してもらった。そのうちに、トロッコ押しにも慣れて楽にこなせるようになった。また、ある事件がありました。

桜セメントは、大阪港に臨む埋立地にあり、通勤するのに、毎日築港の桟橋から出る専用の小蒸気船に乗った。

その日も、ほこりの多い工場から解放されて、帰りの船に乗り、舷に腰をかけていた。

真夏のこととて、吹いてくる潮風がなんとも快い。

夕日が沈むのをうつとりと眺めていたときである。そばに来た船員が足をすべらし、彼に抱きついた。その瞬間二人は川に転落し、水中深く沈んだ。

彼は何が何やらわからず、もがきにもがいて、水面に顔を出した。見れば、小蒸気船ははるか向こうの方である。

船は気づいたのか、徐々に反転してきている。  
彼は無我夢中で泳いだ。

それからどのくらいたったろうか、彼はようやく船に助け上げられた。

幸い真夏のことでもあり、多少とも泳ぎの心得があったから、溺れ冷たい冬だったら、到底助からなかつたろうと、つくづく運の強さを喜んだ。

これが、世界の偉人・松下幸之助氏と大正区を結ぶエピソードである。

○西区の八千代座で見合をし結婚されました。

義弟は三洋電機創立者の井植敏男氏です。



## 鶴町よいとこ

勝浦典子

陸地となった大阪市の第一次拡張によって作られ、昭和7年に今の大正区として生まれる、鶴町は大正8年3月埋立地に町名が設定され鶴町、船町、福町が誕生する。

町名の由来は田辺福麻呂が万葉集で詠んだ「潮干れば葦辺に騒ぐ白鶴の妻よぶ声は宮もとどろに」から鶴の文字をとったとされている、難波宮の近くから鶴町方面を眺めると何も無かったであろうと想像、鶴の姿だけが美しく写ったとおもわれる、船町の由来も「あり通ふ難波の宮は海近み、天津乙女らが乗れる船見ゆ」とある、鶴町、船町はぐるりと海と川と運河に囲まれているので、人や自転車は千歳橋渡船場、木津川渡船場、船町渡船場し、車は千歳橋、新木津川大橋、なみはや大橋と充実した交通網がある、大正8年6月1日、木津川と尻無川にはさまれた地域は、もとは海で江戸時代初期から始まった新田開発、埋め立てによつて大阪市営住宅が大阪市ではじめて鶴町一丁目に1911戸建設される、その後、共同泊所、鶴町第一託児所も設けられる、大正9年3月には鶴町三、四丁目に8511戸の市営住宅が建設された、住宅はいずれも工場地帯で働く人たちが地方からの出稼ぎでした、しらない土地で暮らす心細さから隣近所の付き合いは大変親密であったと云う、大阪市が現在の住宅団地の先駆けともいえる市営住宅を「桜の宮」とともに鶴町にも建設したので、きっかけとなつて一般の住宅も建設が始まり、徐々に公設市場や雑貨店等が並び市街地としての体裁を整え、第一次世界大戦の好景気を背景として、久保田鉄工所恩加島工場、藤永田造船所、中山製鋼所などの進出が相次ぎ、そこで働く勤労者の住宅地として鶴町は発展して行きます。

昭和10年代の鶴町概略図を見ると造成された土地が整備されて、整然とした街であったことがうかがえる、ま

わりを丸善石油、松尾橋梁、ゼネラルモータース、等大企業の前身がひしめきあつてゐる、市電の整備工場や車庫も大きな位置をしめてゐる、長い年月と戦争、自然災害で変わり行く鶴町も今は鶴浜に昨年オープンした「イケア」によつて人の往来も変わりつつあり、今後は鶴浜の発展が注目されるところです。

アメリカまで海底ケーブルを引いた日本海底電線、交通局車軸工場海岸には、海水場の碑もあります。



船町 鶴町



## 十六地蔵と大阪大空襲

深谷 巖

思い出します。太平洋戦争終戦前の1944年、(昭和19年)サイパン島やグアム島が、アメリカ軍によって占領され、日本本土空襲が現実のものになりました。

この事態にそなえ政府は大阪市等、全国に十三の人口疎開対象地域を指定しました。

昭和19年4月までに縁故を頼り、地方に疎開する児童が、全国75,000人におよびました。

昭和19年6月30日には、児童を地方に疎開させるための学童疎開促進要綱が閣議決定されましたが、それにより人口疎開対象地域に住む国民学校（小学校のこと）の3年生から6年生までの児童のうち、地方に親戚、縁故のない児童は、親元を離れて学校ごとに集団で地方の旅館、寺院に疎開しそこで生活することになりました。

昭和19年の文部省の推定によると、集団疎開をした児童は全国で40万名、大阪は8万名といわれています。

縁故疎開の分を合わせると疎開した児童の数は100万人にのぼりました。

児童一人当たり月額24円の費用のうち保護者の負担は月額10円で、残りは国や都道府県が負担しましたが、生活は子どもたちにとって過酷なもので、早朝から武道の訓練や勉強、食料の買出し、農作業の手伝い、薪拾いと厳しい日課の明け暮れです。それ以上に空腹、さびしさ、ノミ、シラミに苦しめられました。大正区の児童は徳島県へ疎開しました。

昭和19年9月、南恩加島国民学校の3、4年生が徳島貞光町に集団疎開しました。

昭和20年1月29日夜9時半頃、3年生男子児童の宿舎となった真光寺本堂で原因不明の火災が発生し、児童2

9人のうち16人が逃げ遅れて死亡しました。

昭和28年8月、児童らの供養のため、貞光町の町民や徳島県内の学校関係者が募金を出し合い、翌年真光寺境内に「十六地蔵尊」を建立しました。現地では毎年、命日に法事が営まれています。

南恩加島小学校でも法事に合わせて千羽鶴を造って送ったり、PTAや地域の人々も参列しています。

平成15年1月29日には、南恩加島小学校内に当時の児童の発案で、新聞紙を集めたりしたお金で「十六地蔵」に祈念モニュメントの除幕式が行われました。

このモニュメントは東大阪の町工場で作られた、高さ四五センチメートルの銅鐸で台座には、16人の遺影と名前を刻んだ銅版をはめ、中に当日渡された卒業証書が収められました。

また「ピースおおさか」では、徳島県在住の児童文学作家原田一美著、福田庄助画の書籍をアニメにした。

「十六地蔵物語」を一日、二度放映しています。大阪への空襲は、昭和19年12月から敗戦の前日、昭和20年8月14日まで続きました。

そのうちB29百機以上によるものが、「大阪大空襲」とされています。

第一回大空襲	昭和20年3月13、14日
第二回大空襲	昭和20年6月1日
第三回大空襲	昭和20年6月7日
第四回大空襲	昭和20年6月15日
第五回大空襲	昭和20年6月28日
第六回大空襲	昭和20年7月10日
第七回大空襲	昭和20年7月24日
第八回大空襲	昭和20年8月14日

大正区が被災したのは、第一回と第二回です。

第一回大阪大空襲グアムから飛び立ったB29、34機が13日午後11時57分から14日午前1時にかけて従来の「高々度精密爆撃」という7500メートル以上の高空からの爆撃とは一変して、「夜間低空爆撃」として約2000メートルの低空から、一般家屋をねらって爆撃しました。

先導機が大型の焼夷弾（ナパーム弾）を、港区市岡の照準点に投下し大火災が発生、他の機はそれを目印に次々と焼夷弾を投下しました。

内蔵した38個の小型焼夷弾が空中で分散して落下、木造の日本家屋を炎上させました。

続いてテニアンから107機が、浪速区塩草を照準点として投弾しました。

さらにサイパンから124機が北区、西区へ投弾し、死者3987人を出しました。

大正区では三軒家東、港南国民学校（現在地大正西中）が全焼しました。

徳島疎開より帰阪した6年の児童は、翌日の卒業式にだれ一人として現れませんでした。

## 第二回大阪大空襲

昭和20年6月1日、9時28分～11時、硫黄島から飛來したB29は458機、投下照準点は大正区福町等で死者3112人を出しました。

鶴町国民学校が全焼しました。

私は三歳の時、芦屋で被災しました。

思い出そうとしても記憶は断片的ですが、3歳の私を父が背負い、一歳の妹を母が背負って、神戸から大阪方面へ攻めてきたB29の逆に神戸方面へ逃げたそうです。

遠くに一面に広がる炎や、父の背の温もりを思い出します。

# 炎の恐怖大阪大空襲

松田邦雄

不幸な戦争の思い出は苦しいもの、命の尊さ、悲惨さ、残酷さ、被害者は女性、子供、高齢者まで及び、出征して死闘した青年たちが、無念さの上に現在の豊かな平和がある事を忘れてはならない。

広島、長崎の原爆被災の写真を見られたであろうか？大阪の空襲は58回、昭和20年1月から終戦前日の8月14日まで続いた。

死者10,388人、重軽傷者35,504人、被災者1,015,140人焼失倒壊家屋319,555戸膨大な被害である。寒い真っ暗な穴倉の防空壕、不安と恐怖で夜も満足に睡眠がとれない、空襲警報のサイレンが鳴り響き、3月13日は270機のB29の空襲、6月1日は400機のB29の大編隊が無気味な爆音を響かせて、焼夷弾、照明弾を雨あられのごとく降りそそぎ、大地が震動し炸裂する。

ズドーン、バカーン、四方は火の海、逃げ場所はない。川の上を火の球が走る、泣き叫ぶ声、悲鳴、熱いから水、水、と叫ぶ声、助けてー、怒号がはしる、怪我そして火傷、病人とて容赦はない、生き地獄さながら、阿鼻叫喚とはこのこと、眼前で自分の家が焼かれ家族や友人が苦しみ乍ら、この世を去りゆく姿は人間世界ではない、そして、3時間半、4時間と地獄絵図は続くのです。

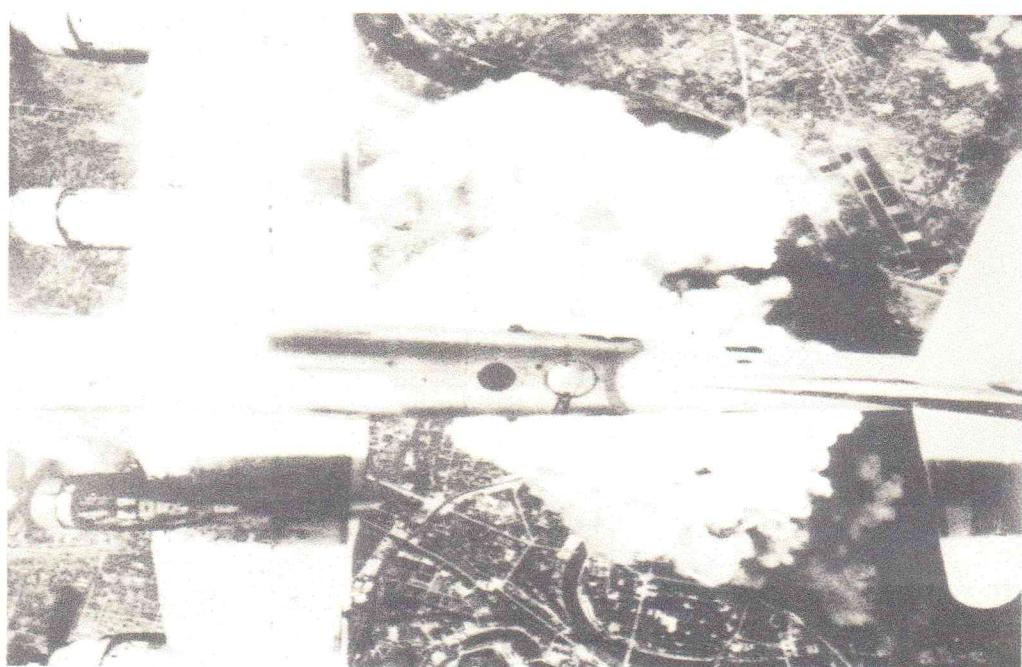
艦載機の乗員が肉眼で見える範囲の低空飛行で、機関銃を人間に向けて撃ちまくる、飛び上がって息絶える幼い児、全身に火傷を負って動けない人、黒こげになった死体の山、あたり一面に異臭が漂う、正常な人類の行為では絶対に為し得ない行為である、母親が背負った赤ちゃんの首が無い、恐ろしくて声もでない、ザザッ一とタ立ちのような音、顔

は真っ黒、すすだらけ、酸鼻を極める、もがきながら川に落ちる人、服が燃えながら狂気のごとく走り回る人、防空壕内で28名が蒸し焼きの様になり焼け死した、小、中学校が焼け、軍需工場が狙われ、木津川べりには50mに渡って焼死体がならべられていた。

その光景の恐ろしさと、人間世界にない現実に呆然となつて佇む、この人たちとは今後どんな人生を送るのであろうか。

人間は強いものである、意欲をもって立ち上がり今日の平和楽土を築きあげた、あれから64年、追憶や恐怖の想い出を語る人も少なくなりつつあります、生命の尊さを後世に伝え行くことの大切さをしみじみと想うものである。

二度と許すまじ戦争を、人類の争いを、愚かな人間になつてはならない。



## 大正区ロケマップ

松田邦雄

「人間が走る！」活動大写真は大阪から 1897 年（明治 30 年）2 月 15 日、大阪南の南地演舞場は、熱気とどよめきがおこりました。

フランスで発明された「動く写真」シネマトグラフが我が国で初めて公開された記念の日です。

自動写真会会場には「汽車の到着」「パリのダンス風景」「テムス川のボート」等の映像が映しだされました。

フランスのリマミエール兄弟が発明、親交のあった実業家、稻畠勝太郎に持ち込み実現されたのです、弁士も大阪から始まり、映画文献も大阪から発行地となりました。

撮影所も 1912 年（大正元年）東洋商会が鶴橋撮影所、大正 2 年には東大阪の小坂に帝国キネマが、昭和 2 年には長瀬撮影所、昭和 10 年極東映画が甲陽撮影所、さらに羽曳野に古市撮影所が出来て無声映画を量産しました。

昭和 2 年設立、大阪港パーク撮影所、さらに昭和 5 年東大阪瓢箪山撮影所、枚方の旭ヶ丘撮影所、大阪は映画製作の大拠点でもありました。

宝塚、芦屋、神戸、社、あやめが池、奈良等映画の都であった。

また、大正区にあった劇場も、喜陽亭、喜楽館、常盤座、弥生座、相生座、三泉劇場、鶴町座、そして映画館は、永楽館、泉尾劇場、港振館、港南劇場、大運橋東映、鶴町映劇、恩加島劇場、泉尾大映、著名な芸能人も、笠置シズ子、市田ひろみ、万田久子、桂三枝、林家染丸、林家小染、黒木曜子、中田ボタン、大木実、山田雅夫、江守徹、柴田郁広、樋本栄、大沢あかね、ルーキ新一、妹尾和夫等である。

ロケマップは三百人のお年寄りから直接聞いた話から、無声映画時代の「浪華無情」、「木津勘助」の映画も六本制

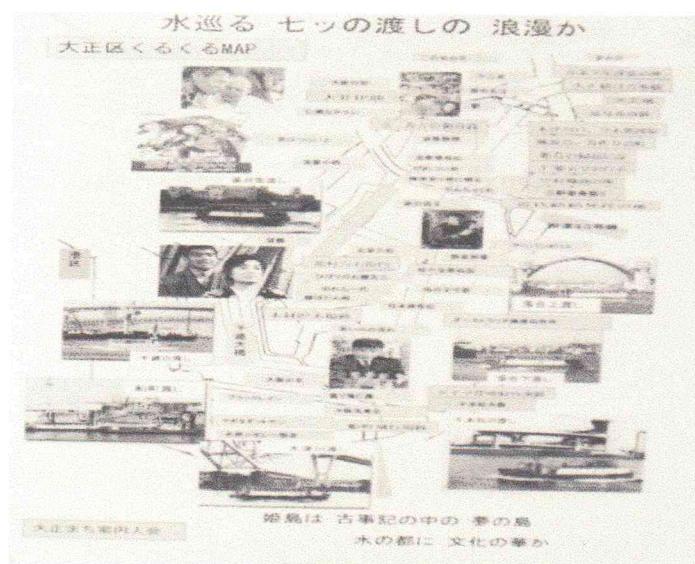
作、浪華小唄、浪華博徒伝、トーキー時代と言えば十三夜、三百六十五夜、この世の花、君の名は、若い川の流れ、ひばりのお嬢吉三、のれん一代、緋ボタン桜、泥の河、母と子の子守歌、日本侠客伝、寅次郎の男はつらいよ、細雪、アーバンポリス、お染久松、やんちゃくれ、二人姉妹、大阪の女、がめつい奴、ブラックレイン、題名は判らないが、長谷川一夫、山田五十鈴、浪花千栄子、田中絹代、高峰秀子、山根寿子、高倉健、緒方拳、鶴田浩二、松方弘樹、天地茂、藤純子、勝新太郎、その他大勢の人たちのロケ現場を見たと云う話は山程にある。

記録映画も室戸台風の後、市長の関一氏が木津川飛行場から視察、リンドバーグが木津川飛行場に着陸しパレードに加わるす姿がた、短編映画賞に輝く「木津川」、NHKでも信長の木津川大海戦が2回放映されました。

渋沢栄一と近代紡績発祥の地三軒家紡績の映像は三回にわたって上映されました。

その後、名物七ツの渡船シリーズも何回も放映されました。

大正区は、映画の絵になる街なのでしょうか。



# 司馬遼太郎と大正区

藤原潤一郎

## 1 司馬遼太郎の生れた場所

司馬作品は、大阪を題材としたものが多い。

産経新聞社大阪本社の記者であったとのことで、なんとなく、そんなものかと自己納得していたが、ある幕末を描いた作品を読んでいたところ、「白髪橋の下流！船番所！対岸が市岡新田！・・」との作品表現に出会った。

あれ！これは尻無川のことではないか？それもそのはず、作品に末尾に掲載されている作者年表によると

○大正12年(1923年)8月7日、浪速区西神田町(現在の塩草)で、薬局を経営する父・福田是定、母・直枝の次男として生れ。本名福田定一。

○昭和5年塩草小学校入学。学校嫌いで悪童であった！

○昭和11年上宮中学校進学

○昭和15年大阪外国语学校(現大阪外大)蒙古学科入学。  
その後学徒出陣。

○昭和21年新聞記者となる。・・ふむ、塩草小学校といえば、大正区から木津川をはさんだ大浪橋を渡ってすぐの近くで、大国町の手前にある。

## 2 生誕地の現状は公園事務所

早速、福田薬局の所在と現状を、確認すべく、浪速区役所へ出向いたのであるが、昭和20年の大阪大空襲の際B29の攻撃で焼失してしまったとのこと。

地番から、浪速区塩草1丁目1番にある浪速公園の東南角であることが判明したが、公園事務所となっているだけで、東大阪市にある司馬遼太郎記念館とは大違いで、掲示板も何も無い状態である。実にもったいない話である。

東大阪市には司馬遼太郎記念館があり、地域振興に多大な貢献をしているのに、肝心の生誕地には何も無い。

生家そのものは戦災で焼失したとはいえ、何百万冊以上の作品巻末に、生誕地が記載されているにもかかわらずである。

3 遼太郎少年と大浪橋大正区と浪速区のかけはしとして命名された大浪橋は昭和12年(1937年)3月完成した。昭和40年ごろまでは関西汽船と加藤汽船が大浪橋のすぐ下流に並立し、運賃やサービスで、苛烈なまでの競争

していたが、両社共倒れになるのを防止するためもあって移転し今はないが、大浪橋の完成時は大変な賑わいであったことは想像がつく。

ちなみに、戦前には大正橋西側にある岩崎橋鉄橋のすぐ下流にも船着場があり、沖縄など西日本からの船客が多数到着したため、沖縄料亭や映画館（喜楽館）が、現在の三軒家西2丁目（旧三軒家櫨町）周辺にあった。

さて、大浪橋完成時、遼太郎少年は13歳で、まだ上之宮中学1年生のことであるから、多感な年頃であり、歩いて10分の近所にできた巨大な構築物に感心を示し、大正区、浪速区間を往復したことは疑いない。当然、大正区の地にも相当、精通していたものと思われる。

そして、数々の大坂を舞台とする作品を生み出したのである。

4 作品「俄一浪華遊侠伝」1966年講談社文庫これは、舞台に、実在の人物「小林佐兵衛」の数奇な運命を描いた物語である。主人公は「どつかれ屋」を振り出しに、賭場荒し、米相場の妨害などで「明石屋万吉」親方として名を売ったことにより、播州小野の一柳家からの依頼で大坂の治安を倒幕勢力から守る大役をすることになる。

作品では、大正橋公園にある船番所を根拠地として活躍するのであるが、白髪橋で敵に襲撃され川に投げ込まれて、船番所まで流れ着く話や、尻無川の土手で長州志士桂小五郎を救う場面など、興味をそそられる。ただひとつ残念なことに、尻無川の場面で、向かいは市岡新田、手前は原尾新田という記述があるが、これは明らかに泉尾新田の誤植である。筆記字体では、「原」と「泉」はよく似ており、講談社の原稿校正担当者がミスを犯したものと思われる。

単なる小説だから、間違った地名も許されるといえば、それまでかもしれないが、いずれ日を見て、現在の著作権所有者に申し出て、司馬遼太郎作品原稿の再校正をしてもらう必要があるだろう。

いずれにしろ、大正区に住む者として、地元が著名作品の舞台であったことは、うれしいことだ。

浪速区役所が、何もしないなら、作品の舞台でもある大正区に司馬遼太郎作品・文学碑や記念館を建立してはいかがだろう。



大阪で好きな場所は？と問われゝば、私が先ず挙げるのは千日前通から逢坂にかけて上町台地に点在する、俗に「天王寺七坂」とよばれる“夕陽ヶ丘”的七つの坂道。また坂道の坂は、大坂の坂にも通じる。

およそ500年前、京都にあった本願寺法主の蓮如は、摂河泉、何れかの土地に坊舎を建

てるべく弟子 法円を遣わして、その地を現今いまの上町台地の北端にみつける。

坂の上に建てた御坊は「大坂本願寺」と呼ばれ、坂道の名もこの地を見出した法円から名付けた。こんな史話を考えながら坂道を歩くのが好きだ。では何が大阪か？といわれると、それはやはり川や運河ではないか。

好きな場所の二つ目に挙げたい中之島の景観は大阪の川や運河の中でも特にすばらしい。

歴史的には江戸時代、120藩の蔵屋敷が立ち並んだこの中之島も、現在は近代的な高層ビルが林立している。先年その中之島のビル群の一角にある住友中之島ビル五階の大坂府立文化情報センターで高村薫の講演会があった。正直 姿を見るまでは、本当に女性なのか？という思いがあった。

小説を読む限りに於いては筆力といゝストーリーの迫力といゝ内容の過激さといゝ、女ッ氣は微塵も感じさせない。

但しこの講演会にきた目的は、小説の話しを聞くためではなかった。

宮本輝の『泥の河』や『道頓堀川』を読んだ時にも感じたものだが、ストーリーよりも作者の目線というのか、感性、感じ方、考え方と共に通するものがあった。

特に『泥の河』の映画化を見た時などは自分の小さいときの姿を見ている様に感じたものだ。

それとは男女の相違でやゝ異なるが、高村薫にも似たものを感じる。年齢的なものもあるかも知れない、宮本輝は少し年上だが、高村薫も私も三人とも同世代である。

講演は「私の中の大阪」というテーマではじまった。

デビュー作の『黄金を抱いて翔べ』は、いま正に講演しているこの中之島が舞台となっている。

この作を例にとると、他の作家が地名として中之島を設定しても、彼女ほど細やかな風景描写はおそらくしないのではないか。

中之島の大阪市に於ける地理的な位置から、北は堂島川、南は土佐堀川とその輪郭を具象化し、建物、道路、施設に至るまで正確に著している。が、それでいて本人は「大阪の街を地図のように正確に書き記そうという意図はありません」とおっしゃる。

「大阪の人にはそれがどこか、ということがわかつても、大阪以外の人にはわからない場所もある。大阪を知らない読者は、小説の中で創られている特別な空間は、仮に大阪の街を描いても、実際の街とは必ずしも重ならないのが小説の本質だ」という。やや哲學的な話になっている様にも思う。

”大阪三部作”とよばれるのは、この『黄金を抱いて翔べ』と『神の火』そして『わが手に拳銃を』だが、随所に大阪の街、特に下町ばかりが目に付く。これを彼女は自分の原風景を描写しているといふ。

因みに『わが手に拳銃を』から、そうしたリアルな描写を部分的に抜き出してみると…

土地勘のない一彰(かずあき)は、道路地図をたしかめた。そこでは木津川、住吉川、大和川の三つの河川が並んで大阪湾に注いでいる。南端の大和川の向こう岸は堺市になる。北端の木津川の両岸は、製鉄所の溶鉱炉や発電所。その向こうは、大正区の工業地帯。さっき交差点で見た北加賀屋という地名には、ぼんやりと覚えがあった。大阪湾沿いに南北に流れる木津川は、その北加賀屋の辺りで大きく西へ折れて湾へ注いでいる。北加賀屋は、その折れた川の南岸にあり、対岸は大正区の工業地帯。そこに確か、南恩加島という地名があった。

そして、大正内港の北に尻無川。その川の南岸が、北恩加島。北恩加島の十号岸壁がどの辺りか知らないが、きっと尻無川の河口付近なのだろう。

そして、その尻無川の北岸に、確か福崎という地名があった。福崎。「水門は福崎の方か、八幡屋の方か」と尋ねていた、あの福崎だ。すると、その辺りにもう一本川があることになる。それがきっと三十間堀川だろう。

どっちを向いても工場ばかりの木津川沿いを北へ四・五キロ走了ところで、大きな橋を渡った。

大正区三軒家という標識があり、さらに直進すると泉尾という標識の上がっている交差点に出た。

それと並んだ道路標識に、《北恩加島》という地名が初めて現れた。左の矢印がついている。…………

少し引用が長くなつたが、僅か2ページ程の部分でもこれだけの風景描写が続いている。

『神の火』も神崎川沿いのマンションに住む主人公が、JR 天王寺駅から、天王寺公園、天王寺動物園、新世界、シャンシャン横丁と彷徨する描写が続く。

無論、この小説の舞台設定は大阪だけではなく、京都市内や舞鶴などの日本海側の地方にも及ぶが、大阪に限っていえば、私にとっての身近な風景が高村薫の”大阪三部作”には描写されているのである。

その女流作家 高村薫の原風景とは何か？ 講演会の話しに戻ろう。

「これは、実は、私が六歳で郊外の新興住宅地に移る前に住んでいた大阪市内の原風景です。

住んでいたのは、東住吉区です。そこで物心ついてからのほんの短い年月、この目でみたもの、それが私の原風景となりました。私にとって何より大事なのは、六歳まで過ごした大阪市内の風景です。

その当時、電車に乗って出かけていくのは、阿倍野のターミナルでした。引揚者などが天王寺公園で 野宿をしていました。バラックもあり、靴磨きの子供も、たくさんいました。

そういう街へ出て、阿倍野の百貨店の屋上で遊ばせてもらうか、天王寺公園の大温室へ行くか、隣の天王寺動物園へ行くかでした。動物園の入り口から、道路一つを隔てると新世界です。ジャ

ンシャン横丁の先は国鉄のガード下になっていて、その向こう側は西成です。

小さい子供の目には、こういった世界が鮮明に残りました。阿倍野界隈の風景が焼きついたわけです」なるほど、住んでいた街は違うが、同年代であるが故に原体験は殆ど同じようなものだ。

さらに高村薫は私にとって衝撃的なことを言う、いやこの言葉によってその共通項が解明したというべきか。

「そしてもう一つ、大阪市内で連れて行ってもらったところがあります。私の父は大正区の船町にある中山製鋼に勤めていましたので、小さいころに何度も大正区に行きました。

そして父の働く工場地帯を見て廻りました。

いまもだいたい同じですから、ご存じの方もおられるでしょうが、運河と海と工場と倉庫、そういう風景です。

私が生まれた東住吉の下町、近鉄電車で出かけた阿倍野界隈、父の勤め先の大正区の工場地帯 これらが 私が六歳で郊外の新興住宅地に移る前に住んでいた大阪市内の原風景です。その後、成人するまで小さいころに大阪市内で見た原風景を忘れていましたが、京都の学校を卒業して大阪で勤めるようになってから、どういうわけか私の足は、気がつくと小さいころ見た風景の方へ向かってしまうようになりました」高村薫の原風景の話はこのように締めくくられているが、宮本輝が安治川を描いた『泥の河』と同様に、高村薫の『わが手に拳銃を』も木津川や尻無川に郷愁を感じて描いているのではないか。

彼女の川や運河、水に寄せる思いは、並々ならぬものがあるよう思う。

『黄金を抱いて翔べ』は、土佐堀川と堂島川の川沿いの中之島界隈が舞台、『神の火』は、神崎川沿いのマンションに住む主人公で、物語の主軸は若狭湾の海が舞台、『わが手に拳銃を』は、淀川沿いの工場や街、大阪湾岸の工場地帯の運河や川が舞台、”大阪三部作”の中にもこれだけ川や運河、水に関わる設定を選ぶこと自体、高村薫の身体には間違ひなく大阪の風土というものが根付いている証左といえるのではないだろうか。

## 飛 行 機

私は、いつものように、飛行機である。東京から、30円である。

マントも帽子も買えない私として、大変高価であるし、人から、贅沢だと、見られているらしい。

だが、飛行機は、2時間半でくる。

11時に宿につくとすぐ湯へ入って、私は原稿を書けるし、本が読めるし、恋人に逢えるし（もし、有ったとしたら---実際私がこんなに、度々、大阪へくるのに、一人の愛人も無い、ということは淋しいことにちがい無い）、こうした時間の利用に、超特急よりも、夜行列車よりも、経済的である。

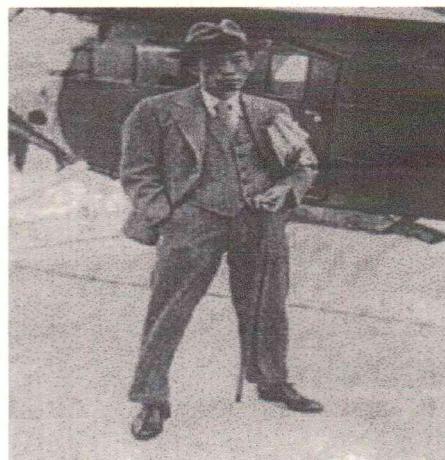
実際、科学に対し、飛行機に対し、日本人も大阪人も、理解が無さすぎる。

大阪にすんでいる外人は、仮に、5000人としておいて、大阪の人口が、仮に200万として400分の一である。

所が、大阪、東京間の旅客機には、2、30人に一人位の平均で、外人がのっている。

外人が、特別に忙しいのでもなく、金持ちのせいでも無く冒険心からでも無く-----私に云わせると、飛行機に対する信頼の度が、科学に対する理解の度が、日本人よりも、20倍強いせいである。

リンドバーグが、大西洋を横断する時に、全米人熱狂した。それに対して、日本人は「アメリカ人の、いつも世

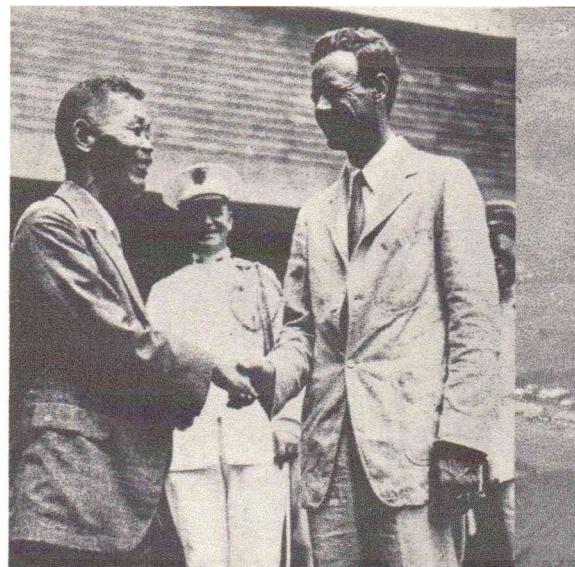


界第一主義だ」と、軽く評していたが、それも有ろうが、外国の科学の勝利、自國の飛行機の優秀さに対する国民の後援である。

私は、最近、日米戦争にたいする10数種の書物を亂読してみたが、何を、一番感じたかと云えば、飛行機である。

飛行機のラジオ操縦は、その実験では、完成されたし、人造人間の操縦も、立派に成功している。

私は、日米戦争が、急に起らうとは思っていないから、アメリカの軍用飛行機が、どんなに優れていたって、直に議会へ、空軍充実の提案をしろ、とは云わないが、アメリカの爆撃機が、3000メートルへ上昇するのに4分半かかり、日本のそれが7分かかるという事は考えなくてはならんことである。それは、飛行機のみに対しての問題ではなく、一般科学に対してこの優劣があるからである。



## 梅田と木津川

私は、いつも、大阪へくる時、飛行機している。汽車のように退屈しないからである。

(退屈ということが、何んなに、金儲けにならぬことかは、大阪人が、一番よく知っているだろう。

だから、旅客飛行機の乗客で、塔乗回数のレコードホルダーは、大阪の電気器具屋の八木氏?それから、もう一人大阪人があつて、次に、私である。尤も、大阪から一人、妓(おんな)の為に、飛行機で通っていくという噂がある

から、もし、この二人が、そうだとしたら、それは………いよいよ尊敬してもいい。

だが、退屈によく似たもので、疎懶（そらい）というものの有るのは、大阪町人には判るまい。これは、恐らく、大阪のどっかの隅にあるべき筈で、私が、大阪へ戻ってきたなら、きっとそうなるにきまっている。だが金儲けとは反対であるから大阪人はきっと、彼奴変わってまん々で片付けるにちがい無い）。

そして飛行機は木津川尻へ着くが、ここから大正橋までは退屈でもあるし、腹も立つし大阪軽蔑心も湧き出してくれる。実（じつ）になったあらへん所である。

文化は道路に沿って起り舗装道路の上に立つというが（誰が云つたのが知らないがこういう言葉があったように思う。

無かったとしたら、僕の造語だが中々うまいことをいう）、尖端的な飛行機発着場への道として………それは、道ではなく、自然の土の上へ軌道を敷いただけのものである。

處で、汽車の着く、梅田の駅頭も、その非文化的なうえに於て、木津川よりも賑やかという以外に何物もない。

大阪梅田駅前の光景、というものは、第三都市の下品さである。豊橋とか、岡山とか。

栗おこし屋、安物雜貨、バナナと蜜柑としか無い果物屋、何処の三流都市よりも劣った安宿。

甘酸っぱい湯気を立てている鯉屋、これらの店の連続は、近代都市、経済都市の玄関ではなく、朱印を押した白衣の、団体客によってその繁栄を保持している町のステーション風景である。

## 大正区内で航路が一番長い渡船場

宮本 明

### 千歳渡船場

鶴町地域は、大阪市の築港計画（明治30年～昭和3年）によって埋め立てられ、大正8年には万葉集の歌に因み「鶴町」と名づけられました。当地と対岸にあった千歳新田（現在は大部分が大正内港となっています）を結ぶ橋として、大正11年に旧千歳橋が架けられ市電も運行されていましたが、大正内港工事のため昭和32年に橋は撤去されこの渡船場が設けされました。

渡船は大正区鶴町四丁目と同区北恩加島二丁目を結んでいます（岸壁間371m）鶴町側からは、多くの船が浮かぶ大正内港のかなたに、昭和山（標高33m）や千島団地等が眺められ、尻無川の広々とした河口風景ともあいまって、ウォーターフロントの美しい景観となっています。

平成15年4月には、この渡しの上を全長106m、海面からの高さ28mの「新千歳橋」が完成し大正区の新たなランドマークとなっています。

### 甚兵衛渡船場

昔、尻無川の堤は紅葉の要所でした。「摂津名所図会大成」に、「この河の両堤に黄櫨の木を数千株うえ…紅葉の時節にいたりては川の両岸一円の紅にして川の面に映じて風景斜ならず、川下に甚兵衛の小屋とて茶店あり年久しき茅屋にして世に名高し」とあります。

この甚兵衛渡しの小屋は「蛤小屋」と呼ばれて、名物のしじみ、ハマグリを賞味する人が絶えなかったそうです。大正区側の「泉尾」の町名は、元禄15年（1702年）に開発された「泉尾新田」によりますと、その名称は開発者の出身地（和泉国瀬尾村）に由来しています。（現堺市津久野町）大正区泉尾七丁目と港区福崎一丁目を結び（岸壁間94m）朝のラッシュ時は二隻の船で運航しています。

### 落合上渡船場

落合上渡船は、大正区千島一丁目と西成区北津守四丁目

を結んでいます(岸壁間 100m)大正区側は旧町名を「新炭屋町」と言い、宝暦13年(1763年)に大坂瓦町居住の炭屋三郎兵衛によって開発された「炭屋新田」のあつたところです。明治以降も鉄工所や造船所等の企業が立地するとともに、北方の三軒家方面へ道が延びていきました。

また、関西随一の木材市場を支えた「大正運河」(現在は埋立てられ千島公園の下になっています)の木津川の人口もこの渡しの南側にありました。上流にある木津川水門(防潮)は、常時開いているが、毎月一回程度開閉試験運転のため閉められます

#### 落合下渡船場

大正区平尾一丁目と西成区津守二丁目を結ぶ(岸壁間 138m)落合下渡船は、開設時期は明確ではないものの、天保10年(1839年)の「大坂湊新田細見図」にも「ワタシ」の表示があります。

対岸の「津守」には、津守新田の産土神を祀る、「津守神社」があります。津守の名称は古く「万葉集」にも見えます。

また、大正区側の「平尾」の町名は明和8年(1771年)に開発された「平尾新田」に由来します。

#### 木津川渡船場

大正区船町一丁目と住之江区平林北一丁目を結んでいます(岸壁間 238m)。昭和30年からカーフェリーを運航し乗用車から大型トラックまで運搬し得る能力を持っていましたが、上流部に千本松大橋が開通し、今は人と自転車のみを運ぶ渡船となっています。大正区戦災復興事業によって、区内にあった木材関連施設を住吉区(現住之江区)平林へ移転することになり、これに伴い利用者の便に供するため渡船の運航を始めました。

水が綺麗になったためか、渡り鳥が飛来し、毎年10月から翌年4月にかけて魚をとる姿がみられます。

なお、大正区側の「船町」の町名は難波宮贊美の歌「あり通ふ難波の宮は海近み海人乙女らが乗れる船見ゆ」に由来しています。

#### 千本松渡船場

このあたりは木津川の川尻に近く、江戸時代には「北前船」をはじめ諸国の船が盛んに出入りしました。幕府は舟

運の安全のため、大阪市章のもとになった「濬標」を数多く設置するとともに、防波堤として、天保3年（1832年）には長さ1580mに及ぶ大規模な石の堤が築かれました。

千本松の名の由来は、この堤防に植えられた松並木について「摂津名所図会大成」に「洋々たる蒼海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天橋立、三保の松原なども外ならずと覺ゆ…」とあります。

昭和48年（1973年）に千本松大橋が完成しましたが、現在、渡船は通勤通学の貴重な交通手段として大正区南恩加島一丁目と西成区南津守二丁目を結び（岸壁間230m）運航されています。

大正区側の「南恩加島」の町名は文政12年（1829年）に開発された「南恩加島新田」に由来しています。

### 船町渡船場

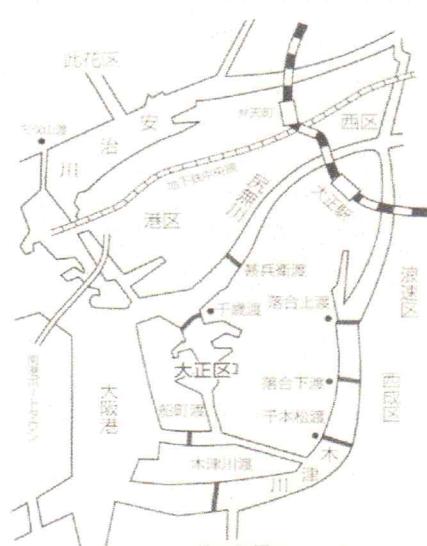
船町渡船は、大正区鶴町一丁目と同区船町一丁目を結んでいます（岸壁間75m）。この渡船がある「木津川運河」は大阪港の第1次修築工事（明治30年～昭和3年）による埋立地として「船町」「鶴町」「福町」が造成されたのと合わせて、木津川と尻無川を連絡するため昭和4年に開設されました。

昭和初期には、渡船の北岸の「鶴町」には、市電鶴町車庫や外資系の自動車工場等があり、南岸の「船町」には伊丹空港の前身である木津川飛行場や造船所等がありました。

（大正区コミュニティ）より一部参照）



昭和40年ごろ



渡し位置図（平成14年）

大正区逍遙

## 落合下渡船場（平尾・津守）　波多江寿昭

自宅から5分ほど歩いたところに、「落合下渡船場」（平尾一丁目）があります。

49人乗りの小船が、Sの字を描いて、対岸の津守まで、無料で渡してくれます。小船の名は「八坂丸」。「昭和59年2月、株信貴造船所、建造」とあります。

乗客はほとんどが自転車に乗って来ます。

船が接岸するときには、舵とエンジンのたくみな操作で、船が横に動きます。どうしてこうなるのか、考えさせられます。

対岸の、津守には下水処理場があり、このあたりは大型コンクリートミキサー車の集結場のようです。この頃は生コン・ミキサー車運転の職場にも若い女性が進出しているようで、「紅一点なにやらゆかしミキサー車」なんて川柳モドキを考えたりして、うれしがっています。

朝の同じ時間には、同じ通勤客らしき人が乗り合わせますので、顔なじみになります。その人の顔が見えない日など、「今日はあの人どうしたのかな」などと心配したりします。

同じ時間に同じ貨物船が木津川を通過することも知りました。

8:20 a.m.には、毎日、「第十六大洋丸」という給油船らしき船が、渡しの航路を十文字に横切って、かなりのスピードで油を売りに出動して行きます。

時々、ダグボートが力強く波を立てて通り過ぎるのに出くわすこともあります。

けっこう大きな貨物船も、このあたりを航行しますので、その波にもまれて渡し船が進む時など、ちょっとしたスリ

ルを味わうことができます。

また、大きな貨物船が狭い川幅一杯、きゅうくつそうに前進・後退を繰り返して方向転換する姿も見ものです。この辺の貨物船は主に鉄のスクラップ、砂利、燃料油などを運搬しているようです。

鉄のスクラップは、この渡船場の横の岸壁から、巨大な電磁石を利用したクレーンで、積み込まれています。この「落合下」のスポットから渡しに乗ると、ちょうど同じ時刻に両隣の「落合上」と「千本松」からも渡しが出発しますので、三つの渡しが同時に動くのを見ることができます。

(運行は毎時15分、あるいは10分おき) 渡し場の潮の満干の差は1メートルほどあって、その上下動は印象的です。満潮のときに乗るほう水がたっぷりあって好きです。

潮の満干を目の当たりにすると、「みつればかくる」の道理を思い、感じることもあります。

落合下渡船場の近くには、鷺とおもわれる大型の鳥が棲んでいます。真っ白ではないので、クロサギかもしれません。

周囲の環境に合わせて、シラサギが灰色に擬態しているのかもしれません。ただ汚れているだけなのかもしれません。

ちょっとやせ気味なのが気がかりですが、ほっそりした大型の鳥が渡船場の岸壁の上に立って睨みをきかせている姿は壮観です。

また、川鵜が数羽、鵜匠に首を締められることもなく、自分の好きなように、鵜飼を楽しんでいるのを見ることもあります。夕陽に照らされると、貧しい漁師も王様になるとか。夕暮れどきなど、金色に輝く水面に頭を出してスイスイと泳いだり、飛び立ったり、気持よさそうに「ひとり鵜飼」を楽しんでいます。

秋から冬にかけては、ユリカモメが群舞します。一度おおざっぱに数えてみたら、60羽ほどおりました。

この頃は鴨も混じっているようです。

落合下渡船場を南へ2,300メートル下ったところに平尾亥開公園があります。

第一次世界大戦の結果、大正3年（1914）、中国（青島）にいたドイツ兵の捕虜がこの地に収容されることになり、760人が収容されました。

ドイツ菓子バウムクーヘンで有名なカール・ユーハイムさんもこの中にいました。

後に徳島の板東俘虜収容所でベートーベンの「第九」の日本初演（1914年（大正7年）6月1日）を指揮したヘルマン・ハンゼンも一時、この収容所にいたことがあるそうです。

こういうドイツとの縁を記念して、平成17年11月「大正ドイツ友好の会」が設立され、平尾亥開公園の一角には、「大正ドイツ友好史跡碑」が立てられました（平成18年2月18日、2006年）。これと同時に、「大正区第九合唱団」（後に「大正フロイデ合唱団」と改名）が設立され（団員200名以上）、毎年、収容所が閉鎖された2月には「第九」を歌うようになり、大正区も「第九の聞こえる町」となりました。

第三回定期演奏会は平成21年（2009）2月15日（日）に予定されています。

大正区には、この「落合下」の渡しの他に、六つの渡しがあります。

木津川を渡してくれるのが、「落合上」、「千本松」、「木津川」、「船町」の渡し、尻無川を渡してくれるのが、「甚兵衛」、「千歳」の渡し。

このうち四つの渡船場で、他の区（西成区、住之江区、港区）と繋がっています。

落合上渡船場（千島・西成区北津守）からは、「木津川水門」と「三軒家水門」が間近にみえます。

千本松渡船場（南恩加島・西成区南津守）は、「千本大橋」

(通称：めがね橋)と共存する渡船です。

木津川渡船場(船町・住之江区平林)：むかしはカーフェリーで大型トラックまで運んでいました。

船町渡船場(船町・鶴町)：大正区内の住宅地と工場結渡船。対岸との距離が短く、円を描いて航行します。

(他のわたしは、S字型航法、ここはO字型航法)

甚兵衛渡船場(泉尾・港区福崎)：大阪で利用者がいちばん多い渡船。尻無川水門が見えます。

千歳渡船場(鶴町・北恩加島)：対岸までの距離371m、大正区内でいちばん航路が長い。

大正区の新たなランドマーク「千歳橋」の下を渡してくれます。

大正区には、橋が14あります。

大正橋、岩崎橋、岩松橋、大浪橋、千本松大橋(めがね橋)、木津川橋、新木津川大橋、なみはや大橋、大運橋、大船橋、南福橋、西福橋、千歳橋、尻無川橋(国道43号線)。

「橋」や「渡し」とともに生きるのが大正区の定めのようです。

大正区の名前の由来ともなっている「大正橋」下流側欄干には、五線譜にベートーベンの第九交響曲の合唱「歓喜の歌」の音符がデザインされています。

大正橋をくぐって木津川を遡るときには、

”Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium!” とでも口ずさんでください。

人や物がどこからか来て、またどこかへ行くのを助けるのが橋や渡しの役目です。

大正区を介して、芸術や文化も含めて、人や物が交流するよう、しかも双方向の交流が活発になり、大正区全体が発展することを願っております。

有史以来もっとも年号が永かった昭和の初浪花の信仰の中心的讚仰の趣きの觀があった。四天王寺の文化9年（1812年）淡路屋太郎兵衛の寄進、わが国社寺仏閣建築の嚆矢、名工金剛與八郎一族の施工、地震國・暴風國のこの地上に萬全を記して再建、建立され、安政元年（1854年）の安政大地震（M8.4）にもびくともしなかつた大五重塔が無慚に崩れ落ち、今は場所も特定できないが今宮付近にあったと伝えられている。住吉大社一の大鳥居が倒壊し大阪測候所の4メートルの無線大鉄塔三基が折れ曲がる、世に言う「関西大風水害」時に昭和9年（1934年）9月21日、大正区においても罹災死傷者、死亡109名、行方不明2名、重傷411名、軽傷56名計578名、罹災家屋、流出67戸全壊112戸半壊458戸半流出2戸床上浸水1万9147戸計1万9795戸を数える被害甚大な大惨事を与えた。

木津川飛行場中央気象台大阪支台の風圧計の速度が実際に最高風速60メートルを記録して破損、計測不能となる。実は風速65メートルとも70メートルともいわれるわが国観測史上未曾有の台風「第一次室戸台風」で、当時の文部省編纂の国定修身教科書卷四（小学4年生用）に「沈着」と題して教材に載せられた、北恩加島小学校児童の活躍をつぎに述べます。この日午前5時ごろ台風は室戸付近にあり、大阪においても早朝より風雨が強く、午前7時突如として風力が募り、7時30分ごろには早や猛威を現し、運動場周囲に植えられた樹木は殆ど根こそぎ薙ぎ倒され、講堂の屋根瓦があたかも木の葉の様に天に舞いあがり、その一部が廊下の窓ガラスを貫き、勢いあまって教室に入り、破片が四方に飛び散り、教室にいた児童は怯え、恐怖のあまり泣く者さえあった。校舎の動搖を感じたのは8時頃、弱い地震の様子、未だ誰も校舎の倒壊を予測しなかつたが、旧校舎・講堂が安全と知ってその校舎に近い組より6年生の誘導により非難をさせたが、残るは4年生男子一組だけとなった時、校舎は6～7回大きく揺れ、ついに20教室の大校舎が倒壊する中に津波がおこり、高潮が襲

来してものすごい勢いで増水。水深2メートルに達する倒壊後の校舎には4年生男児30数名と、思いがけない2年生男児9名が残った。しかし、4年生児童は互いに励まし助け合い、中には友人が気を失ってうずくまり、その上に窓がかぶさって上から呼んでも気付かないため、躊躇せず自身の拳でガラスを割り、さんを折り、友を抱き上げて手を取って非難せしめた児童もあった。

また、中には今にも崩れかかって折れそうな柱を自分の鞄のバンドをちぎり取り、しっかりと括って崩れるのを未然に防いで友の危機を救った子もあった。中に最も目覚しかったのは彼の鉄腕であった。全児童をよく指揮し、泣く者を慰め天井を破って全員を無事に救ったその沈着振りは大人も及ばないほどである。によって、当時の文部省編纂の国定修身教科巻四に沈着と題して教材に載せられるという光栄を得た。前二者も文部省出版の風水害美談集に載せられ学校の名誉というべきである。しかし、2年生の9名は一階教室にいたため、脱出できず、高潮のためついに他界していったのが痛惜に耐えません。ちなみに、この災禍にあたって、最も胸をうつたものは幼い多数の児童の痛ましくも悲しい死であった。大阪府下における教職員・児童・生徒の殉難者、小学校教員17名・児童656名・中等学校（現在の中・高一貫校）職員一名・生徒24名と記録にある。早朝、雨をしのぎ風を衝いて登校した精励な児童・生徒にしてこの惨事、そしてまた、多くの教育者の尊い命を失う。今この人々の手向け草にもこれ等尊い犠牲に対して教育現場で殉じられた方々の靈を慰めるため、今日大阪城南外堀公園内にそびえる総大理石の全国教育殉難者慰靈碑”教育塔”がこの災禍をキッカケに建立され、毎年9月21日に全国教育祭（教育殉難者慰靈祭）が厳肅の内に盛大に執り行われております。前記、”鉄腕級長”本名谷山徳幸君（当時10歳小学校4年生）のその後は徳島県に帰郷され学業・兵役を経て、戦後長らく教職に就かれ、現在85歳の高齢で大正区鶴町に在住しておられます。

平成17年8月22日（月）付・朝日新聞”声”「ヒーロー」に載りました一文と昭和11年（西暦1936年）12月発行の尋常小学校修身書巻四（4年生用）第十一”沈着”を紹介しました。

## 初代大阪競馬

本郷良章

先日(平成21年1月27日)、日本経済新聞の文化欄に「近代競馬史、國家の計」と題して富山大学教授の立川健治氏が、競馬史研究の成果の一端を披露されていた。

そのなかに東京・上野の不忍池競馬場の話がでてくる。

今では想像できないが、池の周囲に完成した競馬場で明治17年11月1日から3日間開催されたらしい。

この記事に刺激されて、今や伝説と化している大正区の競馬場を調べてみる事にした。

大阪で競馬が開催されるまでの経過を要約すると・・・・まず大阪馬匹畜産組合が、大正15年6月に大阪府知事の認可を受けて設立された。

昭和2年8月に地方競馬規則が公布施行されることにより、

大阪府に一ヶ所の競馬場の設置が認められる。大阪馬匹畜産組合は競馬開催の認可申請をして、同年12月26日に競馬施行の許可を受け、競馬場建設の運びとなる。

無論ここに至るまでには、府下の泉州郡畜産組合との競願や応酬などの紆余曲折もあったようだが、栄えある初代大阪競馬場として選ばれたのが、当時は港区(現、大正区)の南恩加島である。

当初は鶴町での開催を予定していたらしいが、埋立て間もない為に地盤が軟弱で建設工事が進まず、最終的に近隣の南恩加島に建設された。

地方競馬規則時代の『大阪競馬場年次成績表』によると第一次開催日程春期開催昭和3年1月7日より3日間

出場馬数85頭

有料入場者数 32,627人、

入場券発売高 170,509円と、

いうような記録が残っている。

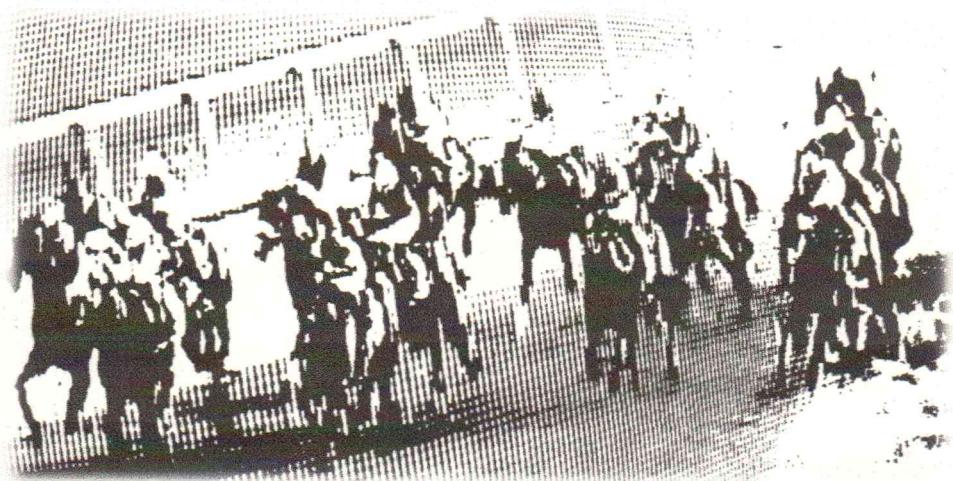
場所的な交通の不便さもあって、入場券発売高は予想よりも少なかったようだ。

さて、その場所であるが、古者の話しによると、現在のクボタを中心に道路を挟んで大正西中学校や大小の工場が建ち並んでいる六丁目から七丁目の辺りらしい。

明治や大正の古い時代ではない、昭和の御世の出来事でも 80 年以上も前になると、もう夢幻の如くなり・・・因みに翌 4 年の春・秋 6 日間の開催は大阪城東練兵場(二代目)、5 年の春からは八尾競馬場(三代目)となり、昭和 13 年までつづく。

戦後の昭和 25 年秋から長居競馬場(四代目)が開催され全国二位の好成績を残しているが 36 年に廃場となっている。

この跡地がいま市民に親しまれ、世界のアスリート達が集う、長居公園や長居陸上競技場なのである。



## 夕陽の昭和山

磯村成郎

昭和45年(1970)大阪三低山の一つとして昭和山は標高33m、周囲は千島公園である、昭和年代に完成したから、昭和山と命名された。

港の見える丘、夕日絶景の地として、地下鉄建設工事の廃土、170万立方mを(ダンプトラック57万台)使用して大正区に立派な山が出来ました。

大阪市で二番目に高い山である、当時は大阪万博を目前に控えて、地下鉄整備が急速に進んで時期でもあり、予定以上の速さで進んだ。公園内には、千島体育館等も開設されており、周囲には、(大正区の花)ツツジ5万本も植樹されて開花の時期には、多人数の人たちが喜び賑わっております。

入り口に昭和山と銘の入った石碑があり、音羽風の人工滝、周りにはヒメザサが茂り、見る人にやさしい雰囲気です、昭和山頂には標高を示す木製の看板が立っています。

吾妻屋が山頂にあり、四方の景色は非常に美しく一日中楽しませてくれます、紅梅や水仙、山桜、植樹40年を経て見事に茂っております。生駒山、金剛山、六甲山、との山々も眺望できます。又夕陽の絶景地としても有名です。

一歩山中に入れば里山の雰囲気で爽快です、大正区の昭和山、そこで、明治か平成の称号の橋や丘又は、川か建築物が有ればと願うのが大正区民です、昭和山を大切に育てて、わたくし達の憩いの場として見つめて行きます。



昭和山

# 私の地球一周の船旅

古川澄子

## 《横浜港を5月14日出発》

### (一)、ベトナム、ダナン。

ホイアンの市場へ送迎バスで行く。バイクが砂埃立ててビュンビュン走る若者の元気な姿、戦争から復興の息吹を感じる。旧日本人街では提灯屋のお爺さんが、君が代を歌ってくれビックリ。郵便局員が話し相手になってくれ、写真を撮って道端の交流となりました。

アメリカは嫌いと吐き出す様に言ったのが印象的でした。

### (二)、マレーシア、シンガポール。

バスでの国境越え、マレーシアから大きなパイプでシンガポールに給水している横を走りました。マレーシアでは、農家を見せてもらい舞踊を見学、錫の食器が安かったです。

夜のシンガポールでは、マーライオンが光の中で水しぶきを浴びていました。

### (三)、オマーン。

エンジントラブルで船が遅れ半日観光。ヌークの市場行きバスが運転手の手続き違いでアルバリード遺跡や博物館迄見せてくれました。やったーと心で喜びました。女性から口を聞くのはタブーの国です。市場では乳香を買い、オマーンではアラブ人から御馳走を戴き記念撮影しました。

### (四)、ヨルダン、アカバ。

パレスチナ難民キャンプを訪問。超大国アメリカの及ぼす影響の大きさに驚きました。子供達は元気、ワットと取り囲んで英語で話しかけてきます。カメラを向けると集中して寄ってきます。お婆さんは乳飲み子を抱え逃避行の話、ヨルダンに感謝していました。若者の殺氣も感じました。

夕方「死海」に行きました。塩分が濃く長く海に入る事はできません。夕日がとても美しかったです。

### (五)、エジプト、ポートサイド。

スエズ運河を通りエジプト着。皆が体調をくずし、風が蔓延。冷房も故障、さながら病人船。入院する人が続出。私も風邪ぎみでしたが、隠してピラミッド、スフィンクス見たさに観光に加わりました。バスは車列を組み前後には武装警官に守られての観光でした。遠くへ行くと思っていましたが町の近くでビックリ、子どもがラクダを乗せる仕事をしていて私も乗りました。

大金を巻き上げられたり、誘拐されたり物騒な話におびえました。町のはずれはゴミの山、埃の中での生活、貧しい国なのです。

### (六)、トルコ、クサダシ。

異次元異空間に圧倒される、世界遺産カッパドキヤ、東洋と西洋交差の国。イスラム教だが政治は独立している。キリスト教徒の隠れ住んだ地下都市カイマクルにも人間の智慧に驚く。

### (七)、ギリシャ、ピクルス。

アテネのパルテノン宮殿、アクロポリスの丘、傭兵の交代、動きに動いてアテネを満喫。夕方財布をすられ息子に連絡。カード中止も頼む。すられる方が悪いとのこと。

イタリア、ナポリ、青の洞窟見学。4人が小船に乗り身体を折り曲げて中に入る。光の屈折して見える青さに感動。船頭はオーソレミオを高らかに歌う。

### (八)、スペイン。

私の一番豪華な楽しみ、サクラダファミリアを見る。完成していないが日本の建築家も活躍。世界に誇るガウディの設計。華麗壮大です。水が貴重品でワイン並み。トレドの古い町並みを見学してパリへ。パリは凱旋門を中心に道が開け、凱旋門の向こうはシャンゼリゼ通り、原宿のような人の波。青空にエッフェル塔がそびえ立ち、ルーブル美術館もわんさの人並み。ベルサイユ宮殿マリー・アントワネットが居住していた想いと豪華さに眼をうばわれました。

世界遺産サンミッセルへ、道中の風景は京都のようでも見事でした。空も雲も農村風景も豊かさを感じました。それにも高い水。500ミリが800円とは！

(九)、オランダ、アムステルダム。

不思議の国、風車と花の国の印象ですが、コーヒー店には入らないよう注意され、ドックは堂々と売られておりドキッとしました。ユーゴ戦犯の裁判所へ、厳しいチェックが有り、裁判の現場を見学。アフリカの判事さんが挨拶され、威厳ある態度に感激。アンネ・ Frank の家を訪問、17才のアンネが今生きていたらどんな詩歌にいそしんだ事でしょう。

(十)、ノルウェー。

ペルゲン自由行動。足に疲れを覚え、ステッキを使い、町を歩きました。お土産屋美術館ブリッケンは世界遺産の町。

(十一)、アイスランド、レイキャビック。

エコ先進国で小さな地熱発電所を見学。人口30万人には十分のようです。温水配給システムは観光地になっていて、そこから町に配水されている。

ブルーラグーン温泉は世界一の大きい温泉、泥を顔に塗り皆で写真を撮りました。

(十二)、グリーンランド、ヌーク。

イヌイット族が住む美しい国。黄色いタンポポより大きな花が道端や家の周りに咲き、花夢世界です。

日本人と顔がよく似ていて親しみが増します。サンタのポストは、クリスマスカードを書く人が沢山、山のように盛り上がってきました。

(十三)、アメリカ、ニューヨーク。

滞在が延び12日間滞在。ブロードウェイミュージカル、ハドソン川のイーストリバークルーズにも参加。メトロポリタン美術館、セントラルパークと駆け巡りました。

路脇の木立からリスが飛び出し、人々は憩いの時間を楽

しんでいます。太極拳やオカリカを吹いたりスケッチしたりと！次の日はディズニーワールド、ケネディ宇宙センター、クリヤビーチ等々とディズニーでは、「スワン」という高級ホテルに泊まり、4人掛けの狭い船室から開放され感動し、飛び跳ねて遊びました。

(十四)、パナマ。

熱帯雨林の中をゴンドラで山登り、大自然体験、ナマケモノ、珍鳥、猿が飛び回っています。家の周りにはバナナ、パパイヤ、マンゴも成っています。

パナマ運河は海の運行にかかせない便利さ。運行量は大船舶は3千万円だとか。

(十五)、グアテマラ、プエルトケツタル。

アンティグアは世界遺産の町、石畳の町、足に痛みを感じ皆さんに助けてもらいました。小さな子どもが皿を持ち、道端で物乞いをしている姿に胸が痛みました。

(十六)、メキシコ。

メキシコ料理、夜はプロレス観戦、大声で応援。悪者、善い者懐かしい響き。

(一七)、カナダ。

移民と出会う企画。歴史を聞き開拓魂の上に今日の成功がある。1877年からの太平洋戦争で財産没収。収容所に追いやられたり苦闘のありさまを知りました。長い闘争の末300万円の補償で解決。この国に居る日本人は、日本の日本人と少し違うと感じました。

(十八)、アラスカ。

夜突然ジュノーバに寄港買物、散策、沿岸警備隊の検査が厳しい。スワード港に入港。キナイフィヨルド遊覧を楽しむ。アザラシ、トド、ペンギン、イルカに鯨、楽しい1日でした。絶景が続くアラスカ鉄道は1日に一回しか動かない。アンカレジまでゆく。アラスカから一週間後9月2日、懐かしの日本横浜港に帰る。114日間の世界一周の旅は終わりました。

# 木津川飛行女流歌人の見場

川上小夜子歌集「朝こころ」(昭和一九年三月)

夏の光ただ明らけし飛行場は

陰ひとつなき芝の陽炎

廣つ場の向こうには船のマスト搖るる

のどけさもあれ夏飛行場

あはやと云うひまもなかりき大島の

影かと疾頬上ひくく機は

着陸機は芝の中道滑走す

迎えて胸のとどろき止まぬ

# 水巡る 七つの渡しの 浪漫かな

松田邦雄

鶴の舞う

(千歳渡し)

千歳賑あう  
渡しかな

風董る

千本松や

舟子唄

千本松渡し

木津川は

(信長の決戦)

勇者どもの

夢の跡

夕映えに

(尻無川)

西鶴詩う

櫧並木

昭和山  
夕日百選  
丘の上

(昭和山)

尻無川  
唐紅の  
水に映え

(尻無川)

ときめきや  
恋の木津川

(落合下渡し)

波まかせ

雄飛する  
世界のシンボレー

(名車シボレー)

鶴町製

フロイデーの

(大正橋)

音符刻みし

大正橋

水上機  
(船町飛行場)  
開化の夢乗せ  
大空へ

姫島は 古事記の中の  
水の都に 文化の華か  
夢の島

難波人見やは

とがめぬ

浦の春

籠つりや

入り日に並ぶ  
赤ひ貝

はせ釣りや

待あふせたる  
汝かしら

押てるや  
みなとに月の  
数千艘

江の月や

帆柱ならふ

澪標

任平渡は買つてこの渡し場付近に甚平小屋あり尻無川の桺紅葉を  
この小屋に憩い乍ら観賞し旅情を慰めたところであつた

## 尻 無

田中 君業

甚じいさんの家は  
第三湾のところに在つて

醉うて喫す蛤羹  
霜樹の間

醉つて蛤の汁を

紅葉の所で飲んでいる

堤防の舟には夕日の

紅の光が一色となり

堤上

舟中紅一色

櫨とまた顔が酔つて  
赤く染まつてゐる

夕日櫨葉

又 酔顔

尻無川

遠山西に隠れ  
寒雲繞る

孤鶴南に飛び  
秋色香たり

水を挟む両行  
紅樹の間

鯉を釣る舟過ぎること多  
少かを知らん

鯉を釣る舟が  
たくさん通り過ぎる

広瀬旭莊

遠くの山が西に隠れ  
寒い冬雲が繞る

一羽の鶴が南に飛び  
秋の気配が深い

水を挟む両道には  
紅葉の樹ありその間を

無臀川

釣止舟停暮山看

模糊帆影有無間

晚潮一綫帰路通

荻花擇出楓葉湾

筱崎武江

釣りを停め舟を止めて  
暮れの山を見る

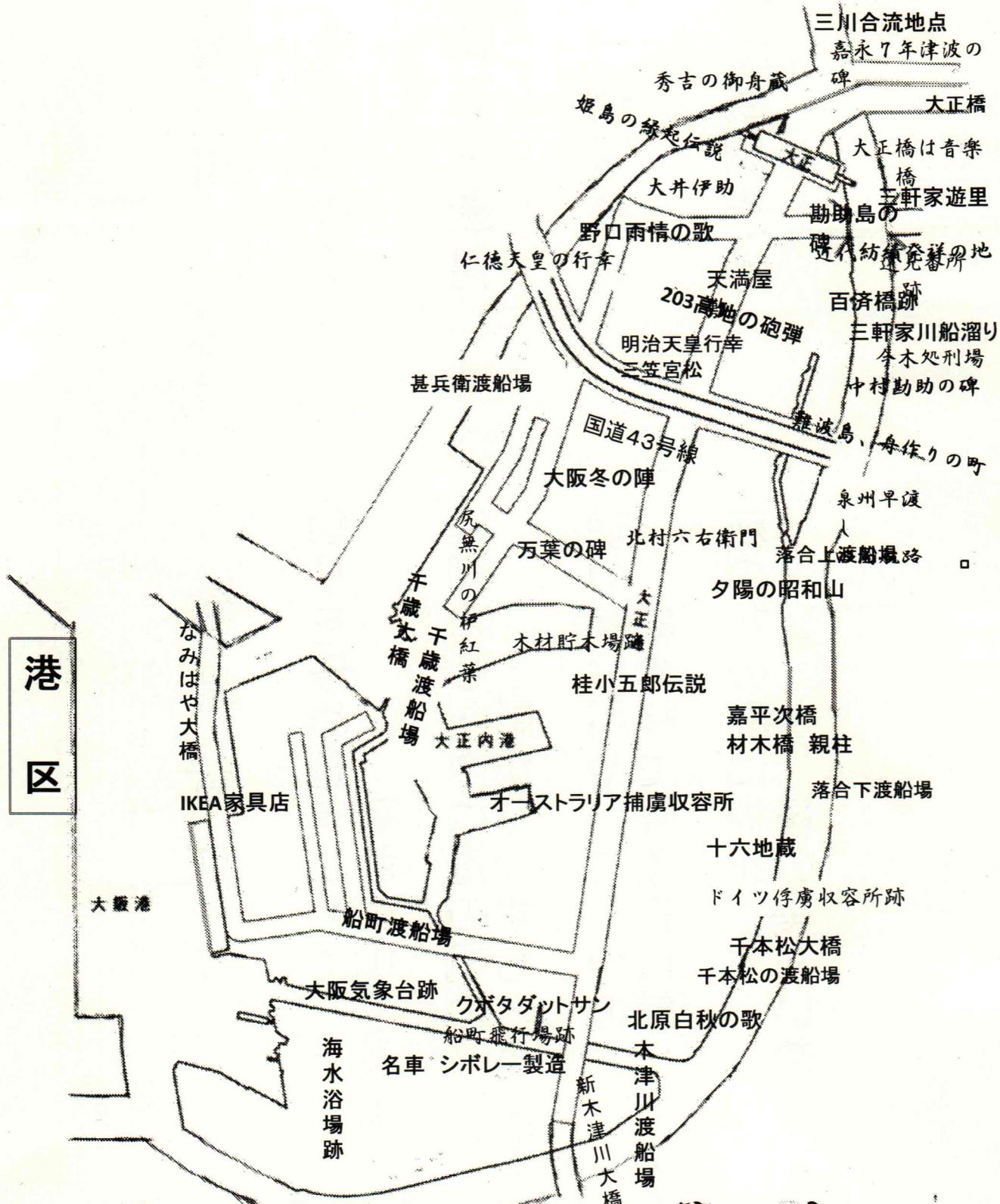
模糊とした中に舟の帆の  
影がうつすらと見える

晩の潮は穏やかで一つの  
線の様で帰る道に続いている

荻の花の間に棹をさす  
楓の美しい湾

# 我が街、大正歴史MAP

## 水巡る 七ツの渡しの 浪漫かな



姫島は 古事記の中の 夢の島  
水の都に 文化の華か

## あとがき まち案内人協会 代表 松田邦雄

平成4年3月に私は大正区選挙管理委員に任命されました。丁度、時を同じくして、3月に西村東一前大正区長も赴任された時期でした。万葉集の研究家で歴史の造形の深い西村前区長の熱い想いに傾投して私も大正区の街興しの一助になればと、協力を誓いました。

まず、大正区の歴史を語る会8名から始まり、今しかチャンスはない地域毎に有志に集まって戴き大正区の昔話の座談会を区長中心に7カ所で座談会を開催してこれを纏めて、「大正歴史を語る会」を出版されました。

次に街の歴史古跡を学ぶ、街案内人講座を6カ月に亘って開催、区長から認定書を授与されました。歴史書に記載されていない、93年前の大坂ドイツ俘虜収容所が平尾町に存在した事実も発見し、研究会が結成され、一切の写真等をドイツ在住のプロカメラマン藤井 寛氏より、エアハルトアルバムとして提供をうけ、記録を調べあげ、ドイツ俘虜研究書も出版されました。

私も4人でドイツ俘虜の足跡探索の為10日間ドイツへ行き、著名な歴史家 カールランゲーン氏と対談、俘虜の生家に泊まり、墓参もしました、大正区よりのメッセージを手渡し、返答を戴き、ドイツ日本友好協会の会長にもお会い出来て、街中を案内していただき、熱いメッセージをもって帰りました、又、ドイツの新聞にも、大正区の記事を掲載していただき感動いたしました。学んだ歴史を活用する為、まち案内人協会を設立(25人)ユニホームを作り「海の時空館」「図書館」「老人センター」「生涯学習講座」小学校での講話、地域振興会、福祉会館、外来者のガイド、巡航船のガイド、写真展、等30回を数えました。その間、テレビ、新聞等でも10数回掲載され、ボランティア活動の醍醐味を味わっております、歴史に語られていない、沢山の事実や、人物も新たに発見されました、これらを一冊の本にまとめ、街興しの為、若い人たちにも大正区をこよなく愛してもらえる街にと出版の運びとなりました、皆様おそらく意外な発見に驚かれる事を楽しみにしております。

志村大正区長にも丁重な前書きを戴き、西村大阪市スポーツ部長も多大な御協力を戴きました。又、出版に当たり、陰の苦労を全面に引き受けて下さった、府川 進氏には最大の敬意と感謝の言葉お礼を申し上げます。沢山の方が読み活用し、歴史に光を、明るい未来に継ぐ歴史を築きいく事を信じながら後書きとします。

アマチュア集団の為、大変読みづらく、又、見苦しい箇所も多有りますが、御容赦下さい。

写真・古本・古雑誌・資料提供 (敬称略 順不同)

鳴門市 ドイツ館

毎日新聞 ・ 毎日グラフ

朝日新聞 N H K

日本経済新聞 産経新聞

なにわの海の時空館所蔵 錦絵は雑誌から

写真家 藤井 寛

大正区図書館

大阪市図書館

大正区役所

大正区まち案内人協会

大正区の歴史を語る会

大正ドイツ友好協会

ドイツ俘虜研究会

その他多数

企 画 大正区まち案内人協会

発 行 平成21年6月

編集・発行 大正区まち案内人協会

編集・構成 松田邦雄

府川 進

印刷・製本 大正区まち案内人協会

非売品 浪漫俱楽 内部資料研究用

コピ-禁止

N O - 3 0 古本屋に売るのは禁止